

和水町文化財調査報告 第8集

ひ

び ら

じょう

あ と

日 平 城 跡

2013年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

和水町文化財調査報告 第8集

ひ びら じょう あと
日 平 城 跡

2013年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

序 文

和水町では、合併前の平成10年度より旧菊水町内に残る中世城跡の調査を実施してきました。これまで「焼米城跡・萩原城跡・用木城跡・牧野城跡・乙城跡・小乙城跡・江田城跡・立石城跡・内田宮山城跡・和仁石山城跡・内田今城跡」の11か所の城跡について調査を終え、6冊の報告書を刊行しました。今年度は、平成21年5月から3か年間、調査を実施しました「日平城跡」について報告することになりました。

今回、調査を実施しました「日平城跡」は、県内でも大規模な山城のひとつであることがわかりました。遺構の保存状態も良好であり、中世城の実態を知るうえで貴重な資料になると思います。

本報告書が、郷土の文化財に対する理解を深め、保護・研究に役立てば幸いと思います。

最後になりましたが、調査にあたって終始ご指導いただきました大田幸博先生、多大なご協力とご理解をいただきました地権関係者並び関係各位の皆様に心からお礼申し上げます。

平成25年3月29日

和水町教育長 井 上 忠 勝

例　言

1. 本書は、熊本県玉名郡和水町に所在する日平城跡（中世城跡）の調査報告書である。
2. 日平城跡は、県内屈指の大規模山城で、和水町教育委員会が、平成21年度から23年度にかけて、測量調査を実施し、平成24年度に調査報告書を作成した。
3. 調査は、益永浩仁（文化係長）・居石裕臣（元文化係参事）と、大田幸博氏（元・和水町史編纂委員会副委員長）とで行った。
4. 調査に際しては、阿蘇品保夫氏（文献調査）、大橋康二氏（輸入陶磁器）から指導を受けた。
5. 日平城跡の籠集落にあたる日平・靖浦両地区の方々から、多くの協力を得た。
6. 本書の執筆は、益永・大田氏で行った。資料整理と製図は、石工みゆきさんと溝口真由美さんの助力を得た。編集は、同じメンバーで行った。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の取り組み	1
第3節 交通と町内の中世城跡	3
第4節 日平城跡周辺の歴史的環境	7
第5節 日平城跡の縄張り	13
第Ⅱ章 調査の成果	17
第1節 I郭	17
第2節 II郭	21
第3節 III郭	21
第4節 III郭-1	22
第5節 空堀2	22
第6節 IV郭	23
第7節 堀切6	24
第8節 V郭	24
第9節 竪堀2	27
第10節 空堀4	28
第11節 小山A	31
第12節 小山B	31
第13節 南西側派生尾根C	36
第14節 西側主軸尾根E-1	42
第15節 西側派生尾根D	42
第16節 西側主軸尾根E	49
第17節 東側派生尾根F	57
第18節 南側主軸尾根G	66
第19節 小山H	70
第20節 小山I	70
第21節 城山J	77
第22節 井戸の環境整備作業	87
第23節 表採遺物	90
第24節 小森田一族塗社の調査	97
第25節 薦集落（靖浦・日平）の様子	100
第Ⅲ章 考 察	103
写真図版	109
〔付論〕天正八年～十年の肥後情勢と島津氏 阿蘇品保夫	卷末1

挿 図 一 覧

第1図 熊本県玉名郡和水町位置図	1	第38図 全体遺構図10〔I郭・堅堀2から城山谷部へ〕	81
第2図 和水町内主要道路と中世城跡位置図	5	第39図 測量図②(城山谷部・J-1)	82
第3図 日平城跡周辺地形図	9	第40図 測量図③(J-2)	83
第4図 日平城跡周辺図および字図	11	第41図 測量図④(J-2~4)	84
第5図 日平城跡 繩張り図(城山)	14	第42図 測量図⑤(J-4~5)	85
第6図 日平城跡 繩張り図	15	第43図 測量図⑥(J-5)	86
第7図 測量図①(I郭)	18	第44図 Ⅲ郭-1測量図	88
第8図 全体遺構図1〔I郭~V郭〕	19	第45図 井戸・実測図および断面図	89
第9図 測量図②(II郭~V郭)	25	第46図 遺物実測図①(表採:域内全城)	91
第10図 測量図③(堅堀2・空堀4)	29	第47図 遺物実測図②(表採:Ⅲ郭-1)	93
第11図 測量図④(小山A・堅堀4)	32	第48図 遺物実測図③(表採:Ⅲ郭-1)	95
第12図 全体遺構図2〔小山A~D〕	33	第49図 遺物実測図④(井戸)	95
第13図 測量図⑤(小山B)	35	第50図 Ⅲ郭-1・石塔実測図	95
第14図 全体遺構図3〔南西側派生尾根C〕	37	第51図 靖浦地区周辺図	97
第15図 測量図⑥(小山C・C-1)	39	第52図 小森田一族墓社実測図	98
第16図 測量図⑦(C-2~4)	40	第53図 墓社・石祠実測図	98
第17図 測量図⑧(C-5~7・堀切8)	41	第54図 墓社・五輪塔実測図	98
第18図 全体遺構図4〔西側派生尾根D〕	43	第55図 墓社・石碑実測図	99
第19図 測量図⑨(小山D・D-1)	46	第56図 靖浦・日平地区周辺図	102
第20図 測量図⑩(D-2~3)	47	第57図 繩張り規模解説図①	103
第21図 測量図⑪(D-3・小山D-4)	48	第58図 繩張り規模解説図②	104
第22図 全体遺構図5〔西側主軸尾根E〕	51	第59図 繩張り規模解説図③	104
第23図 測量図⑫(E-2~3)	53	第60図 西側主軸尾根E	106
第24図 測量図⑬(E-4~5・小山E)	55	第61図 日平城跡周辺図	107
第25図 全体遺構図6〔東側派生尾根F〕	59	第62図 写真撮影位置図①(I郭)	111
第26図 測量図⑭(V郭~F-1の尾根)	61	第63図 写真撮影位置図②(II郭~V郭周辺)	114
第27図 測量図⑮(F-1~2)	62	第64図 写真撮影位置図③(堅堀2・空堀4)	122
第28図 測量図⑯(F-2~4)	63	第65図 写真撮影位置図④(小山A・堅堀4・小山B)	126
第29図 測量図⑰(F-4)	64	第66図 写真撮影位置図⑤(南西側派生尾根C)	130
第30図 測量図⑲(F-5・小山F)	65	第67図 写真撮影位置図⑥(西側派生尾根D)	134
第31図 全体遺構図7〔南側主軸尾根G〕	67	第68図 写真撮影位置図⑦(西側主軸尾根E)	138
第32図 測量図⑳(G-1~3)	68	第69図 写真撮影位置図⑧(東側派生尾根F)	142
第33図 測量図㉑(小山G:武者溜まり)	69	第70図 写真撮影位置図㉒(南側主軸尾根G・小山H・小山I)	144
第34図 全体遺構図8〔小山H・小山I〕	71	第71図 写真撮影位置図㉓(城山谷部~J-1)	148
第35図 測量図㉔(小山H・南側追地)	73	第72図 写真撮影位置図㉔(城山J-2~5)	152
第36図 測量図㉕(小山I・北側谷部)	75		
第37図 全体遺構図9〔城山〕	79		

表一覧

第1表 調査の経過表	2	E-5 遺構計測表	50
第2表 和水町所在の中世城跡一覧①	3	第39表 小山E遺構計測表	50
第3表 和水町所在の中世城跡一覧②	4	第40表 V郭とF-1間の遺構計測表	57
第4表 龍集落概要	7	第41表 F-1 遺構計測表	57
第5表 行政区概要	7	第42表 F-2 遺構計測表	57
第6表 「上井覚兼日記」に見える城跡	7	第43表 F-3 遺構計測表	57
第7表 日平城跡の周辺城跡	7	第44表 F-4 遺構計測表	58
第8表 「高瀬の津」概要	8	第45表 小段計測表	58
第9表 周辺字名一覧①	11	第46表 小山F遺構計測表	58
第10表 周辺字名一覧②	12	第47表 G-1~3 遺構計測表	66
第11表 I郭遺構計測表	17	第48表 小山G遺構計測表	66
第12表 Ⅲ郭遺構計測表	21	第49表 小山H遺構計測表	70
第13表 Ⅲ郭-1 遺構計測表	22	第50表 小山I遺構計測表	70
第14表 Ⅳ郭遺構計測表	23	第51表 井戸計測表	87
第15表 堀切4・5計測表	23	第52表 土層観察表	87
第16表 堀切6計測表	24	第53表 遺物観察表①	92
第17表 土壘遺構計測表	27	第54表 遺物観察表②	94
第18表 南東下小段計測表	27	第55表 遺物観察表③	96
第19表 土壘p遺構計測表	28	第56表 五輪塔計測表	98
第20表 土壘p北側小段計測表	28	第57表 「間」と測量値の対比表	103
第21表 小山A計測表	31	第58表 「古城考」・「肥後国誌」に規格が記載された城跡	105
第22表 竪堀4計測表	31	第59表 敵勢の動向と対策	105
第23表 堀切7計測表	31		
第24表 小山B計測表	31		
第25表 C-1・C-3遺構計測表	36		
第26表 堀切8遺構計測表	36		
第27表 小山C-7遺構計測表	42		
第28表 E-1 遺構計測表	42		
第29表 小山D遺構計測表①	42		
第30表 小山D遺構計測表②	45		
第31表 D-1 遺構計測表	45		
第32表 D-2 遺構計測表	45		
第33表 D-3 遺構計測表	45		
第34表 小山D-4 遺構計測表	45		
第35表 E-2 遺構計測表	49		
第36表 E-3 遺構計測表	49		
第37表 E-4 遺構計測表	49		

写 真 一 覧

写真1 遠景 用木地区から望む	110	写真38 小山Dの南裾・登城道（西→東）	133
写真2 I郭から婧浦地区（競集落）を望む	110	写真39 西側派生尾根Dの小平場（さ）（東→西）	133
写真3 I郭 北西斜面	111	写真40 西側派生尾根D-3①（北→南）	135
写真4 I郭の山頂から萩原城跡を望む	112	写真41 堀切10-2（尾根筋より西側）	135
写真5 I郭 帯状削平地⑤（北西→南東）	112	写真42 西側派生尾根・小山D-4（北→南）	136
写真6 I郭東下 空堀1（北→南）	113	写真43 西側派生尾根の最北端部・小段（72）	136
写真7 堀切1（土橋より東側）	113	写真44 西側主輪尾根E-2（東→西）	137
写真8 III郭 城跡最大の平場（北東→南西）	115	写真45 西側主輪尾根E-3（東→西）	137
写真9 III郭（正面に鬼沙門天の石祠：II郭の法面）	115	写真46 西側主輪尾根E-4・岩場（東→西）	139
写真10 堀切2（III郭→IV郭）登城道が土橋を通る	116	写真47 西側主輪尾根E-5の南側を通る登城道	139
写真11 堀切2（土橋：登城道→北側）	116	写真48 小山Eの頂上（東→西）	140
写真12 III郭南斜面 桁型の凹道C	117	写真49 日平集落からの登城道	140
写真13 IV郭北西下 空堀3と土壙k	117	写真50 東側派生尾根F-3鞍部（南西→北東）	141
写真14 空堀2と土壙j（西→東）	118	写真51 東側派生尾根 堀切12（婧浦集落からの登城道）	141
写真15 空堀2と土壙j（東→西）	118	写真52 東側派生尾根 小山F（東→西）	143
写真16 堀切3と土壙l	119	写真53 小山Fの北側小段（93）から城山を望む	143
写真17 堀切4と土壙m	119	写真54 V郭から南側の通路①（北→南）	145
写真18 堀切6-2（通路①より北側）	120	写真55 小山G-③「武者滝まり」	145
写真19 堀切6-2と土壙n	120	写真56 小山H-①（頂上：東→西）	146
写真20 堀切6-1（通路①より南側）	121	写真57 小山Hの西斜面（頂上→西）	146
写真21 堀切6-4下位（自然谷：湧水地）	121	写真58 小山I-①（頂上：東→西）	147
写真22 堀切6-2と堅堀2の結合箇所	123	写真59 小山I北側谷部（南西→北東）	147
写真23 堅堀2上位（北→南）	123	写真60 城山 谷部（南→北）	149
写真24 堅堀2の南側土壙o（イ→下位）	124	写真61 城山J-1 四凹地A区（北→南）	149
写真25 堅堀2の北側土壙p（ト→下位）	124	写真62 城山J-2・堀切14（北→南）	150
写真26 空堀4と土壙q（南→北）	125	写真63 堀切14（尾根筋より西側）	150
写真27 空堀4と土壙q（北→南）	125	写真64 城山J-3（山頂）西側の削り落とし	151
写真28 小山A北下の登城道（東→西）	127	写真65 城山J-3から下る北東尾根	151
写真29 小山A 頂上（西→東）	127	写真66 城山J-4②（尾根線：北→南）	153
写真30 堅堀4-1（上位：南→北）	128	写真67 城山J-4③（第二の頂上：南西→北東）	153
写真31 堅堀4-4（下位：東→西）	128	写真68 城山J-5・堀切15（南→北）	154
写真32 小山B 頂上（北東→南西）	129	写真69 城山J-5・北端部（南→北）	154
写真33 小山B南西斜面 小段（41）	129	写真70 表採遺物①（城内全域）	155
写真34 南西側派生尾根C-1（北東→南西）	131	写真71 表採遺物②（III郭-1）	156
写真35 南西側派生尾根C-4（南西→北東）	131	写真72 表採遺物③（III郭-1）	157
写真36 堀切8と小山C-7（北→南）	132	写真73 戸戸からの遺物	157
写真37 堀切8（西→東）	132	写真74 戸戸からの木製品	157

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体 和水町教育委員会

調査責任者 相澤祐一（教育長：平成21年度）

井上忠勝（教育長：平成22年度～）

調査者 大田幸博（元・碧水町史編纂委員会副委員長）

益水清仁（文化係長） 屋石裕臣（文化係參事：平成21年度）

調査補助員 石工みゆき 漢口裏由美

高地春子（総合教育課長：平成21年度）

有高率一（社会教育課長：平成22年度）

黒田裕司（社会教育課審議員）

第2節 調査の取り組み

日平城跡は、標高342.2mの花车礼山に築かれた山城で、菊池川流域の和水町役場からは、310.1mの高低差がある。役場から、靖浦集落を経由して、林道を車で上がっても、峠まで20分近くかかり、それから、枝道を200mも分け入る必要がある。城跡については、「菊水町史」編纂事業の際に、城域が余りに広いという事で、取りあえず立ち入り調査だけを実施して、略測図と縄張りの概要を掲載している。今回は、本格的な調査に取り組み、およそ考えられる城域すべての範囲で、縮尺400分の1の地形図を作成した。調査に至るまでの手順とその取り組みは、下記のとおりである。

(1) 城跡の麓には、婧浦集落（北東下）と日平集落（北西下）がある。地椎者は、両集落を跨いで、数多いために、それぞれで集会を開き（婧浦地区：平成21年5月11日、日平地区：平成21年5月12日）、調査の主旨を説明して協力を仰いだ。

(2) 調査は、平成21年5月から開始して、平成24年1月まで実施した。足かけ、2年9ヶ月に及ぶ調査であった。

(3) 平成23年度末には、測量図を元に作成した大型室内板を、Ⅲ部の西側に設置した。

(4) 調査報告書の作成は、平成24年度に行なった。



第1図 熊本県玉名郡和水町位置図

年	月	調査内容
平成21年	5月～8月	II郭・Ⅲ郭・Ⅲ郭南斜面・IV郭・空堀2・堀切6・空堀4
	9月～10月	I郭・堀切2・V郭・堀切3
	11月～12月	I郭北西斜面・I郭東斜面・IV郭西側（堀切4・5） ※「広報なごみ」に、11月から「日平城跡」の連載を開始。 ※11月14日（土）の午後1時半～3時半まで、現地説明会を実施。40名の参加者があった。
平成22年	1月～3月	東側派生尾根F・南側主軸尾根G・堀切2
	4月～5月	堀切2・城山J・南側主軸尾根G
	6月～9月	城山J
	10月～11月	南側主軸尾根G（武者溜り）・東側派生尾根F
	12月	小山A・小山D
平成23年	1月	小山A・西側派生尾根D
	2月～3月	西側派生尾根D・小山C・南西側派生尾根C
	4月～5月	西側派生尾根D・南西側派生尾根C・小山B
	6月～7月	西側主軸尾根E・小山E
	8月～9月	小山H・井戸（Ⅲ郭-1）の清掃作業 ※井戸は、戦前まで、毎年、地元の青年団の手によって、清掃作業が行われていた。水が涸れることは無いとされる。今回の作業で、野水池であることが判明した。
	10月～12月	小山H南側追地・小山I・小山I北側谷部
平成24年	1月～2月	小森田一族墓社の調査。 日平集落・辯浦集落の調査。 ※「広報なごみ」に6月まで「日平城跡」を掲載。31回を数える。 案内板用図面作成。
	4月～12月	調査報告書の作成。
平成25年	1月～3月	調査報告書の作成。

第1表 調査の経過表



測量調査の様子（南西側派生尾根）

第3節 交通と町内の中世城跡（城跡番号は、第2図①～⑯と一致する）

1. 菊水地区

番号	城名	所在地(地名)	分類	標高(m)	沿線	備考
1	江栗城跡	大字 江栗 字 城尾	平山城	57.5	和仁・菊水線 菊池川沿岸	・文献未記載 ・「城尾」の呼称
2	志口永城跡	大字 高野 字 城尾 小名 城の山	平山城	85.6	—	・文献未記載 ・「城の山」の呼称 ・逃げ込みの城
3	燒米城跡	大字 燃米 字 飛松 小名 城山	平山城	82.6	玉名・山鹿線 菊池川沿岸	・文献未記載 ・『蒙古襲来絵詞』 ・焼米太郎の城主説
4	内田宮山城跡	大字 内田 字 宮脇	平山城	48.8	大牟田・植木線	・文献未記載 ・「城山」の呼称
5	内田今城跡	大字 内田 字 今城・古南	平山城	44.3	大牟田・植木線 玉名・立花線	・文献未記載 ・「今城」の呼称
6	和仁石山城跡	大字 内田 字 和仁石	平山城	66.3	玉名・立花線 菊池川沿岸	・文献未記載 ・城地としての伝承 ・「城山」の呼称
7	立石城跡	大字 原口 字 野付	平山城	48.9	玉名・立花線	・文献未記載 ・城跡周辺の石塔、伝承が残っている。
8	江田城跡	大字 江田 字 江光寺	平山城	42.1	大牟田・植木線	・文献未記載 ・『蒙古襲来絵詞』あたの又太郎ひでいま ・「城山」の呼称
9	惣原城跡	大字 澄川 字 惣原	平山城	63.4	玉名・山鹿線	・「古城考」
10	乙城跡	大字 江田 字 乙城	平山城	83.4	大牟田・植木線	・文献未記載 ・「乙城」の呼称
11	小乙城跡	大字 江田 字 小乙城	平山城	82.3	大牟田・植木線	・文献未記載 ・「小乙城」の呼称
12	牧野城跡	大字 江田 字 牧野	平山城	60.7	大牟田・植木線	・「古城考」 ・『肥後国誌』
13	用木城跡	大字 江田 字 上河原毛 小名 城の尾	平山城	60.6	大牟田・植木線	・『国郡一統志』
14	萩原城跡	大字 萩原 字 城内 小名 城山	山城	221.5	大牟田・植木線	・「古城考」 ・『肥後国誌』 ・『肥後地志略』
15	日平城跡	大字 日平 字 花群	山城	342.2	—	・「古城考」 ・『肥後国誌』 ・『上井覚兼日記』

第2表 和水町所在の中世城跡一覧①

2. 三加和地区

番号	城名	所在地(地名)	分類	標高(m)	沿線	備考
16	田中城跡	大字 和仁 宇 古城	平山城	104	和仁・山鹿線 玉名・八女線	・国指定史跡 ・「古城考」
17	龜裂城跡	大字 西吉地 字 龟裂	平山城	100	玉名・八女線	・「古城考」 ・城主不明
18	今古田城跡	大字 西吉地 字 竹本	平山城	100	和仁・菊水線 和仁川沿岸	・「古城考」
19	浦部の城の城跡	大字 上板橋 字 浦部	山城	286	東山中央線(町道)	・佐々成政陣跡の伝承
20	岡原城跡	大字 上板橋 字 岡原	平山城	80	和仁・山鹿線 玉名・八女線 十町川沿岸	・板橋景虎在城 (天文年間)
21	神尾城跡	大字 大田黒 字 東川	平山城	50	国道443号 玉名・立花線 十町川・和仁川合流点	・城の伝承
22	城ノ原城跡 (年の神城)	大字 平野 字 年の神 小名 城ノ原	平山城	30	玉名・立花線 十町川沿岸	・文献未記載
23	石坂城跡	大字 大田黒 字 石坂	平山城	90	国道443号 和仁・菊水線	・「玉名郡志」 ・城主不明
24	前城跡	大字 岩 字 立山	平山城	80	岩線(町道) 岩村川沿岸	・文献未記載
25	坂本城跡 (辺春城)	大字 山十町 字 坂本	山城	280	東山中央線(町道) 県境	・「古城考」 ・辺春親貢居城
26	岩村城跡	大字 岩 字 上岩	平山城	70	岩線(町道) 岩村川沿岸	・文献未記載

第3表 和水町所在の中世城跡一覧②

【既刊報告書名】

『燒米城跡・萩原城跡・用木城跡』菊水町文化財調査報告第14集 1999年

『牧野城跡・小乙城跡』菊水町文化財調査報告第15集 2001年

『乙城跡・江田城跡』菊水町文化財調査報告第16集 2003年

『立石城跡・内田宮山城跡』和水町文化財調査報告第1集 2006年

『和仁石山城跡』和水町文化財調査報告第3集 2007年

『内田今城跡』和水町文化財調査報告第5集 2009年

『田中城跡Ⅰ～XⅦ』三加和町文化財調査報告第1～2、14～17、19集 1987年～2002年

【参考文献】

『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集 1978年

『日本城郭体系18』新人物往来社 1979年

『三加和町史』1994年

『菊水町史』2007年



第2図 和水町内主要道路と中世城跡位置図



第4節 日平城跡周辺の歴史的環境

*距離は、日平城跡のⅠ郭から、地図上での直線距離。

1. 鰐集落

婧浦集落は、江戸時代末期に日平集落から分村した（『肥後国誌』）。

集落名	方向	高低差（m）	距離（m）	備考
日平	北西下	298	900	登城道を彷彿とさせる山道が通じている。集落内には、城時代に見合う金石文がある。
婧浦	北東下	285	1200	林道以前の登城道は、現在、一部が明確でない。集落内には、四つ角に「大城戸」と呼ばれる堂がある。集落からは、城山（43箇所）のみが見える。

第4表 鰐集落概要

2. 行政区域

日平城跡は、和水町の南端に所在する。

行政名	方角	距離（m）	備考
山鹿市	東	800	行政境ラインは、北方に向、婧浦集落の直ぐ東側を通る。
玉東町	南東	1000	山鹿市・玉東町・和水町の行政境が、交差する。
玉名市	西～南西	220 (最短)	南西側派生尾根と、小山Dからの西側主軸尾根の後線が、行政境の一部をなす。

第5表 行政区概要

3. 「上井覚兼日記」に出てくる地名と城名（上井覚兼は、島津氏の筆頭家老）

天正10年（1582）12月、島津氏の日比良（日平）城攻めが、日記に書かれている。

日時	城名・地名	方角	距離（m）	記事	備考
13日	安楽寺城	南西	2500～3600	落城	手前が「高城路」、先が「安楽寺城路（居館）」。
14日	箱野城	東南東	2300	城攻め計画	標高260m、間に標高388mの御見山が挟まり、日平城からは見れない。

第6表 「上井覚兼日記」に見える城跡

4. 和水町の周辺城跡

現在の主要地方道大牟田・植木線（県道3号）沿いに6城跡が並んでいます。全てが、日平城跡と同時期であるとは限らないが、方角や距離などを表示した。

城名	分類	方角	距離（m）	標高（m）	備考
萩原城	山城	北東	3300	221.5	本格的な山城。合戦の伝承あり。
用木城跡	平山城	北北東	2600	60.6	集落と一体化した結構の城。
牧野城跡	平山城	北	2500	60.7	結構の城。合戦の伝承あり。
小乙城跡	平山城	北	3100	82.3	文献未記載。
乙城跡	平山城	北	3200	83.4	文献未記載。
江田城跡	平山城	北北西	3150	42.1	文献未記載。南北朝時代の可能性あり。

第7表 日平城跡の周辺城跡

5. 高瀬の津

玉名市高瀬は港町で、戦国時代後半に竜造寺氏の支配下にあった。日平城攻めは、この地に圧力をかける意味もあった。

地名	方角	距離(m)	備考
高瀬の津	南西	6400	安楽寺城から距離2800m。この地は、南間に至る西海道の本道に繋がる。

第8表 「高瀬の津」概要

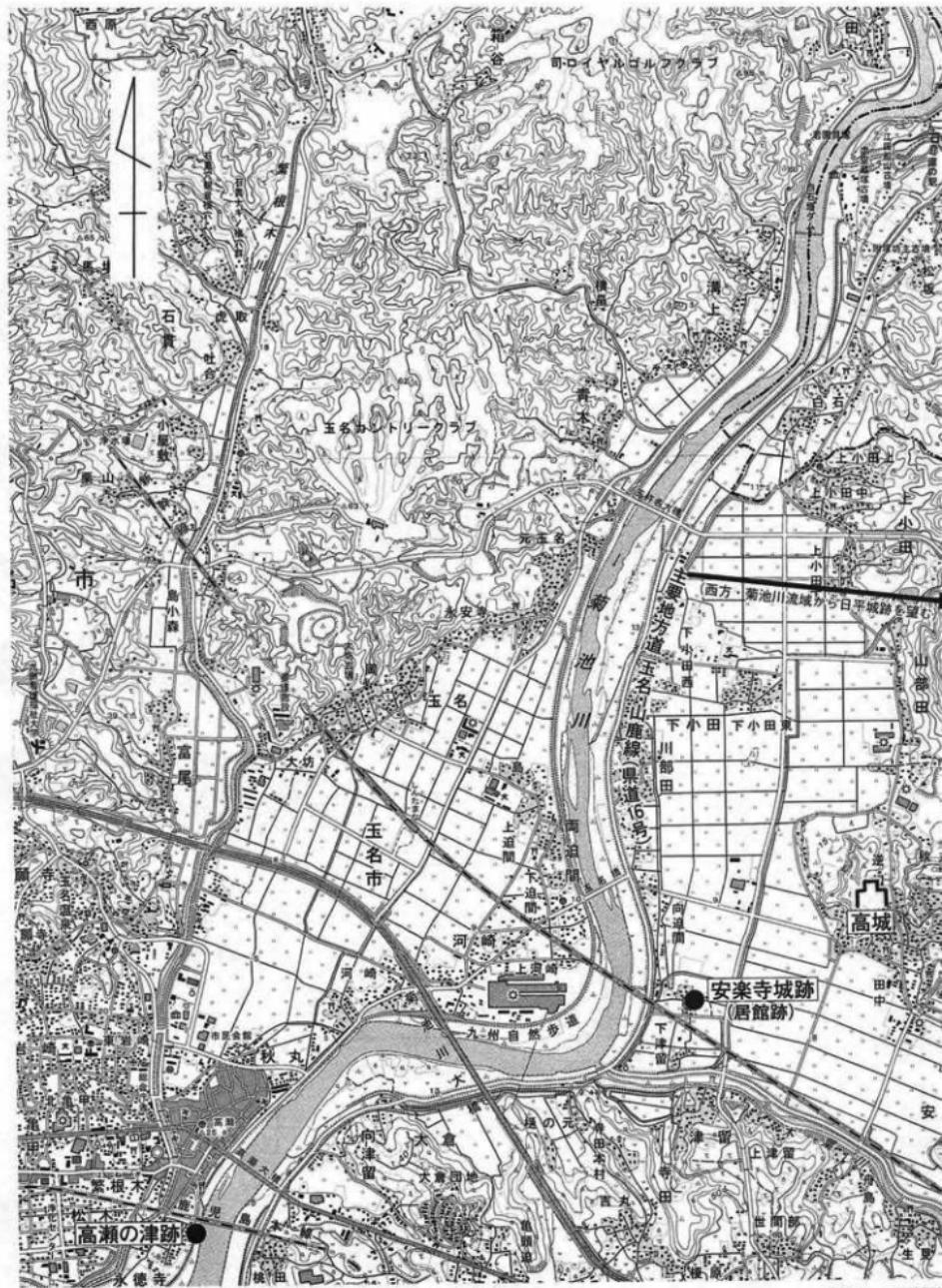
6. (イ) ~ (ロ) の山並み

長さ3100m、行政区画は、大半が玉名市、南東端が玉東町に入る。西方、菊池川流域から、日平城跡を望めば、この山並みが壁となって、いかにも奥まった山城という感じがする。さらに、南西側からは、標高383.2mの山によって、完全に隠れてしまう。西方からの眺めは、山城としての威圧感にも欠ける。あくまでも、日平城跡は菊水地区を意識した、北向きの城である。

島津勢が日平城を落とした後、本陣での会議で、「日比良（日平）は、番衆を置くに好ましい土地には見えない。山北（玉東町）に陣を構えた方が良い」という意見が出て、山北に陣を移すことになった」（『上井覚兼日記』）のも、うなづける。

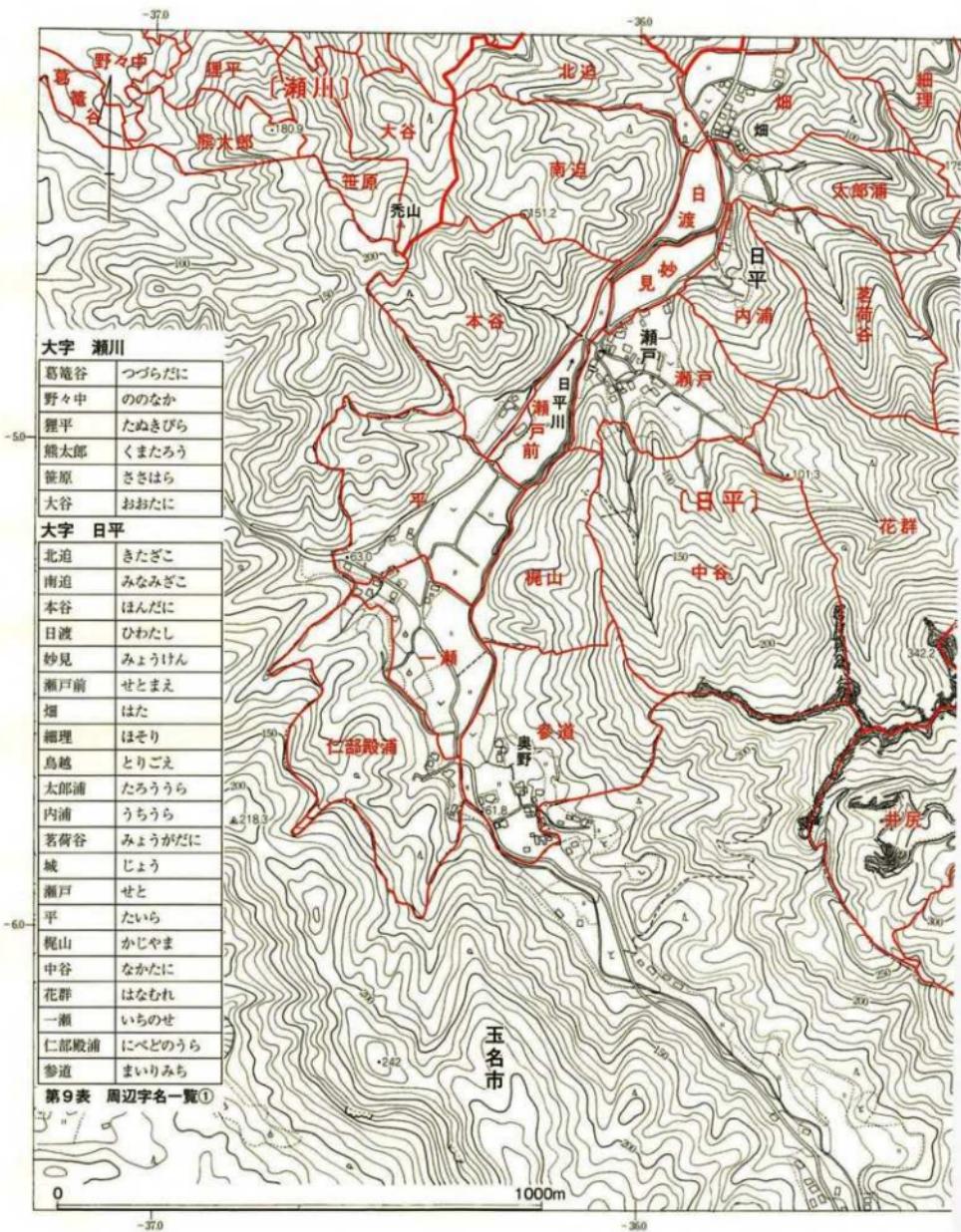


西方・菊池川流域から日平城跡を望む

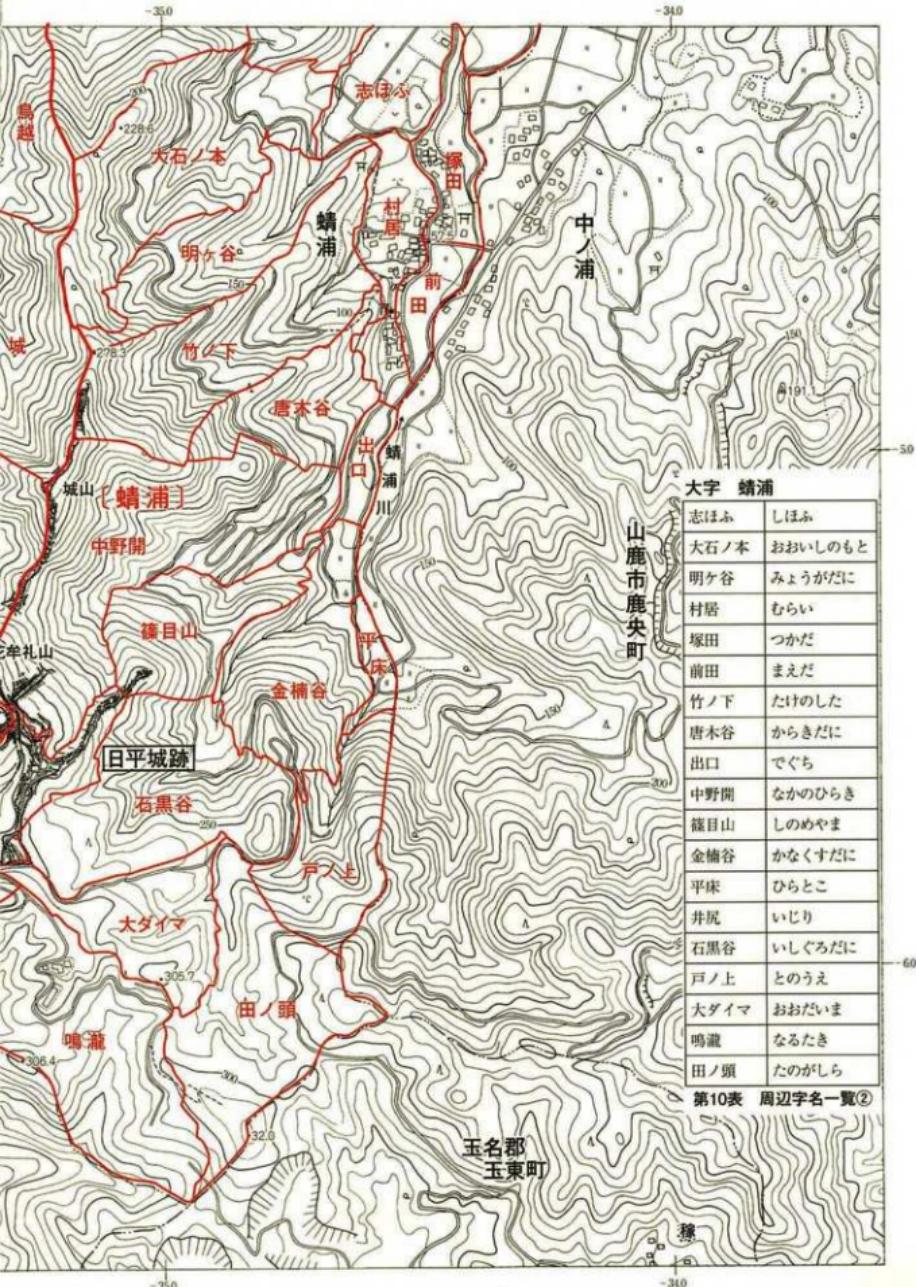


第3図 日平城跡





第4図 日平城跡周辺



第5節 日平城跡の縄張り

日平城跡の北東下に靖浦集落、北西下に日平集落があり、両集落は、中世・城下町の性格を持っていたと思われる。靖浦地区から林道靖浦線を車で10分程上ると、峠付近の道脇に城名を記した小標識がある。ここから小道が延びており、北側へ200m歩くと城跡中心地のⅢ郭に着く。

I郭は、三角点(342.2m)が設置された花卒山の山頂で、この地に立てば、下界の眺望は際立ったものがある。当時、城主の国見の場であったと想像される。山頂から幅の狭い尾根が、すさまじながら南東方向へ緩やかに下り、括り個所で堀切1を跨ぎ、II郭に至る。東斜面には、帯状削平地①～⑤が造られている。さらに東下には、やや小振りの空堀1もある。

II郭は、尾根の小山に手を加えた高台で、南端に鬼門天を納めた大型の石祠が建っている。裏面に「明治十三年靖浦日平」の彫り込みがあり、両地区で、それぞれに祀りが行われる。

III郭は、造成の度合が非常に高く、城内で最大の平場面積を有している。守備兵の生活の場であったと思われ、複数の建物遺構も予想される。天正10年(1582)12月の島津勢との合戦で、火が出たのは、この区画の建物からであろう。

IV郭は、堀切2の西側にあり、III郭の関連平場である。段下のIII郭-1は「井戸曲輪」で、雨水を湛えた(伝)井戸が今も残っている(以下、井戸と表現)。これらの区画の南側には、大規模造りの空堀2が、弧状に取り巻いており、「古城考」は「堀江曲輪」と表現して、曲輪の規模も示している。

空堀4は、II郭とIII郭の東斜面に造られている。尾根の主軸方向に走行している。

堀切6は、I郭～III郭の本体尾根と、V郭～南側主軸尾根Gとの間を、大規模に断ち切っている。さらに北端は屈曲し、堅堀2に変化して、東斜面の山腹を真一文字に下っている。堅堀2の両肩部には、土塁も積まれており、県内、最大級の堅堀である。堀切6の南端は、谷部を利用しておらず、底部に小段(15)～(20)が連なる。特に、小段(19)には、南側主軸尾根Gから小道が通じている。小道は、ここから直角のクランクを繰り返して(凹道A～H)、III郭の南縁に上がっている。

V郭は、堀切6を挟んで、III郭とII郭に対峙する場所にあり、北端が、堀切6～2の土塁に変化している。西側主軸尾根Eは、III郭～IV郭～堀切3を経て、日平集落に下る尾根筋である。A～Eは小山群で、小山Cは南西側派生尾根C、小山Dは西側派生尾根Dの基底部でもある。小山Aからは、菊池川の河口が確認できる。小山Bには、南西斜面の張り出しに小段(41)がある。

南西側派生尾根Cには山道が下り、端部に、玉東町の山並みを望める小山C-7がある。

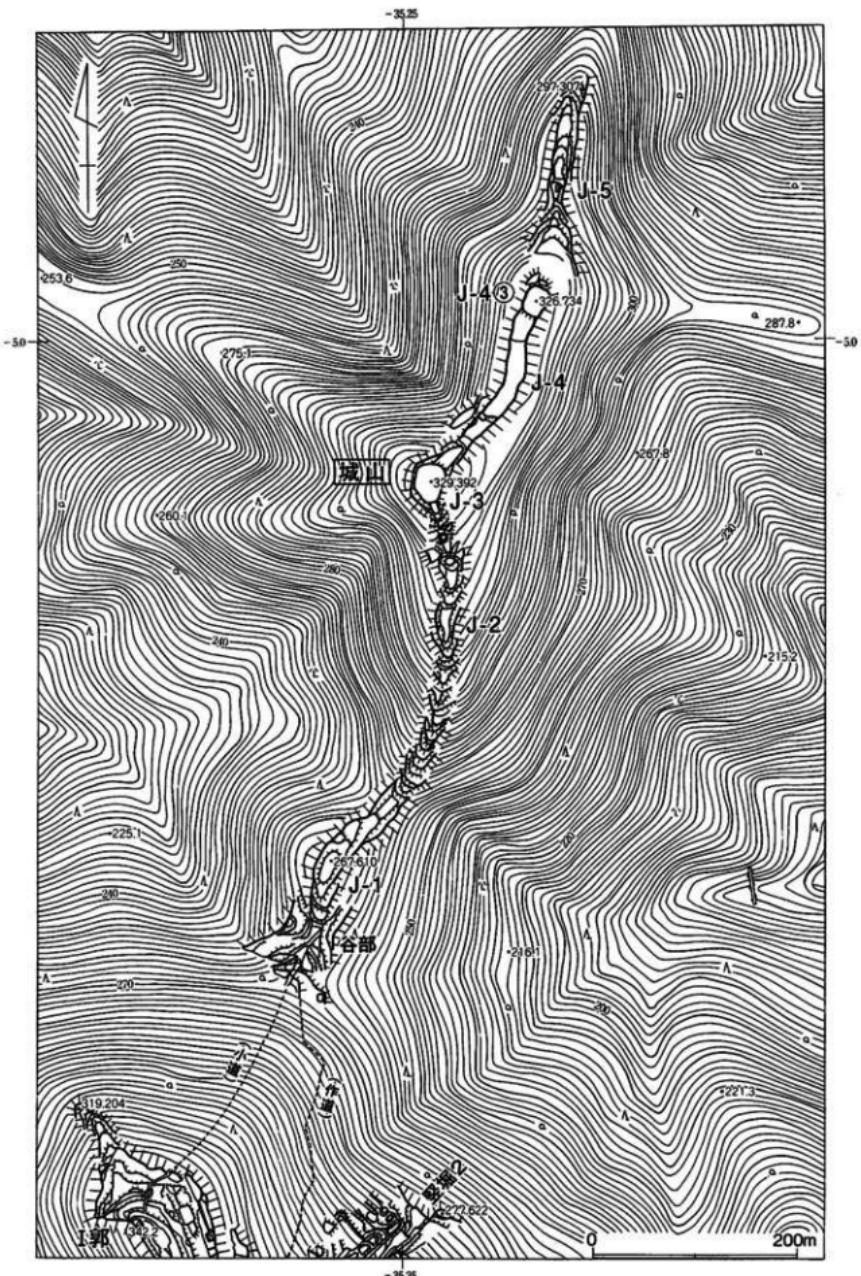
小山Dから西へ下る西側主軸尾根Eは、E-2で急傾斜した後、E-3～5を経て、端部の小山Eに至る。E-3は平場になっている。E-4・5は岩山で、裾部を狭い山道が通る。小山Eから山道は、大きく傾斜した山腹を下り始める。この箇所は、縄張りの西限となる。

東側派生尾根Fは、南側主軸尾根Gから枝分かれしたもので、基底部に、潤れているが「五郎者池」と呼ばれる大穴がある。馬に水を飲ませた所と伝えられる。東側派生尾根Fは緩傾斜の瘦せ馬地形で、山道が下っており、端部に堀切12と小山Fがある。山道は、堀底を通って靖浦集落へ向かうが、途中で崩れています。小山Fは、北谷を挟んで城山と対峙する。北斜面の小段(93)は、そのための造成と思われる。

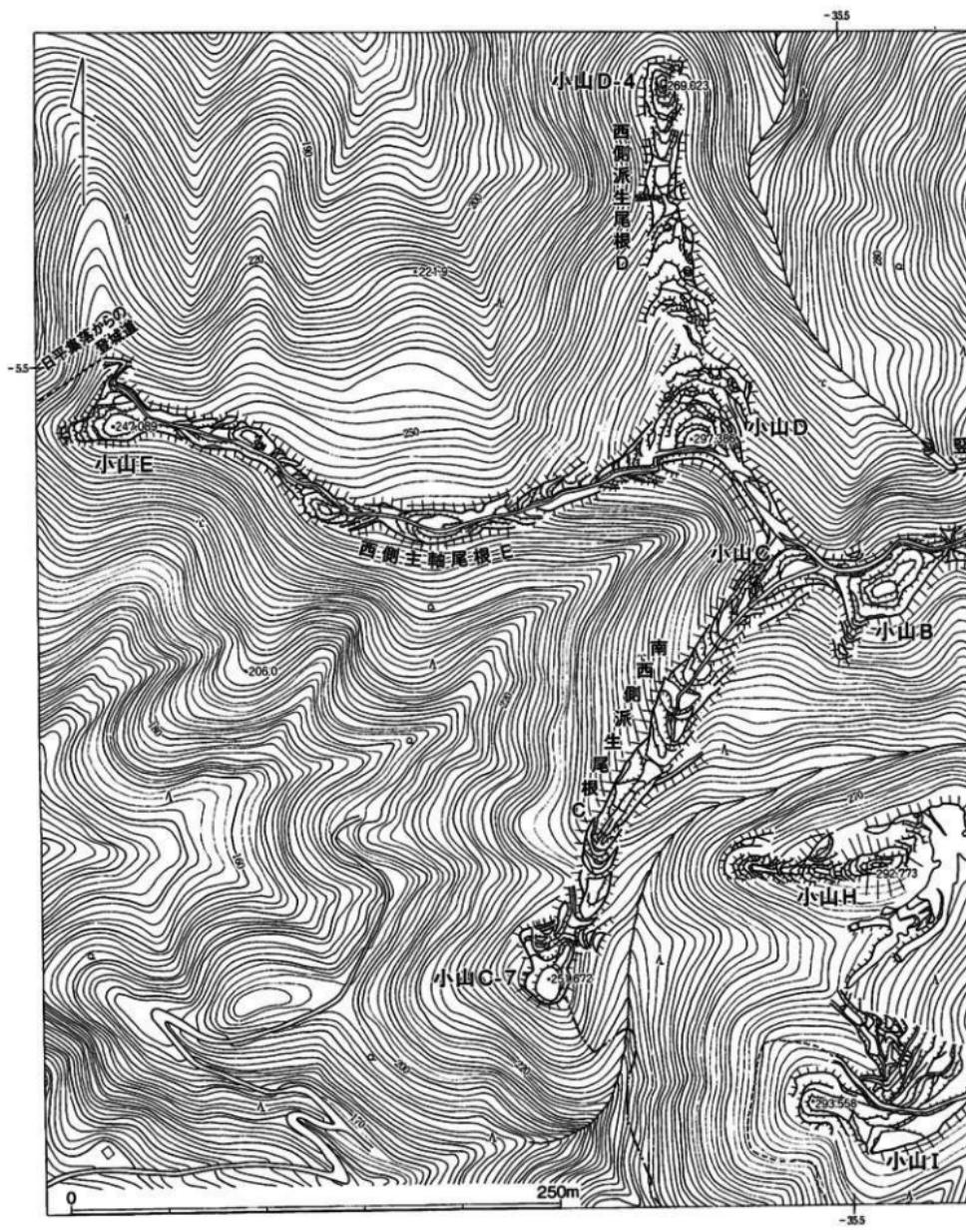
V郭南斜面から続く、南側主軸尾根Gは、城跡の掘め手側にあたり、今日、林道からの小道(通路①)が通じている。長い尾根筋であるが、途中に堀切はない。南端に位置する小山Gの東下には、斜面を切り込んだ凹地があり、「武者溜まり」と考えられる。小山G西側の通路②は、北側で拠型に屈曲している。

小山H-Iは、南域の守りを補った場所と推定される。小山Hは、谷を挟んで、真北の小山Bと、西南西側の小山C-7と対峙する。小山Hは、小山Hの南側にある。

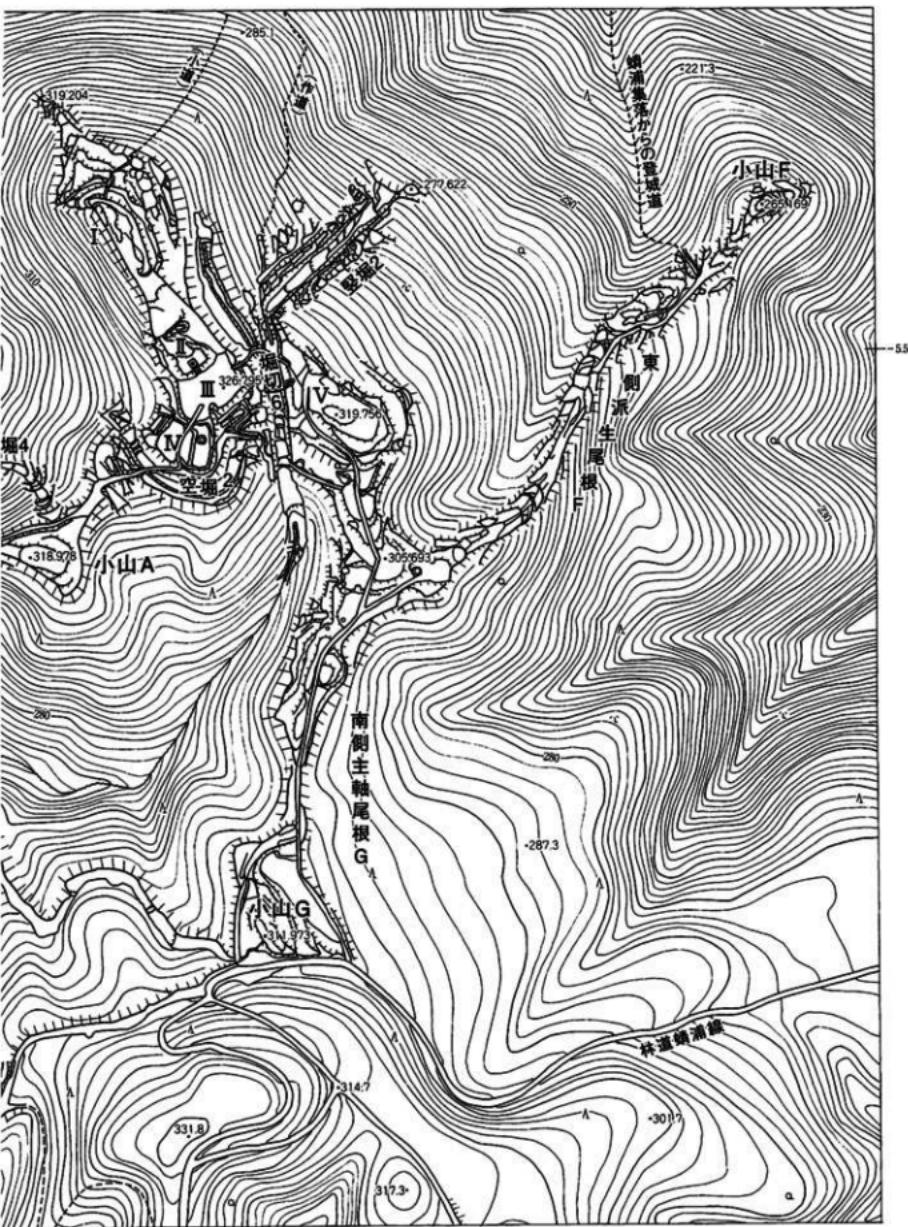
城山Jは、谷部からの上り尾根筋に2本の堀切13・14が刻まれている。山頂(J-3)と、端部の二つ目の頂き(J-4③)は平場に造成されており、「物見の場」であったと考えられる。城山は、日平城跡の北東方面の視野を妨げる位置にあり、この地を縄張りに取り入れることは、是非とも必要であった。



第5図 日平城跡 拡張図(城山)



第6図 日平城跡



第Ⅱ章 調査の成果

第1節 I郭

花串礼山の山頂で、標高342.2m（三角点）。麓集落との高低差は、北西下の日平で297.8m、北東下の靖浦で284.7m。山頂域は、岩盤が露呈する半長円形の区画で、N27°W、長さ45m、最大幅11.5m。南側への傾斜地で、端部の標高は336m。山頂からは、西方に池田川流域の平野と有明海が遠望される。北方には、筒ヶ嶽城跡の小岱山が峰を連ねている。北東方向3.3km先に萩原城跡が望め、城主にとって、格好の国見の場所になる。

〔縁部〕

西線は、岩盤の純壁で、北端に基底部のみの土壌aがある。他の三方には、帯状削平地①が這っている。全長53m、幅は北側で3~2m、南側で4.5~3m、通路であろう。

〔北西斜面〕

山頂から標高337mの範囲に、帯状削平地②・③と小段（1）があり、東端を城山への山道が下っている。尾根は、ここから緩斜面になり、やや距離をおいて、標高331~329mの範囲に、小段（2）~（4）と帯状削平地④がある。小段（2）のみが、やや上位で、他は尾根斜面を弧状に走行する一連の造成地である。統いて、標高327~325mの範囲に、尾根筋を若干、造成した小平場（あ）・（い）がある。山頂と15~17mの高低差があり、この地に立てば、靖浦地区の様子が良く分かる。

〔東斜面〕

山頂直下の標高338~334mの範囲に、帯状削平地⑤がある。走行も形状も上段の帯状削平地①と同じで、城山への山道に切られているが、元来は、帯状削平地②と同一の走りと思われる。さらに、標高330mまでに、小平場（う）と小段（5）~（7）がある。特に、小平場（う）は、特異な方形区画で、長さ8.5~8m、幅6m、標高333m。小規模な建物が存在した可能性もある。

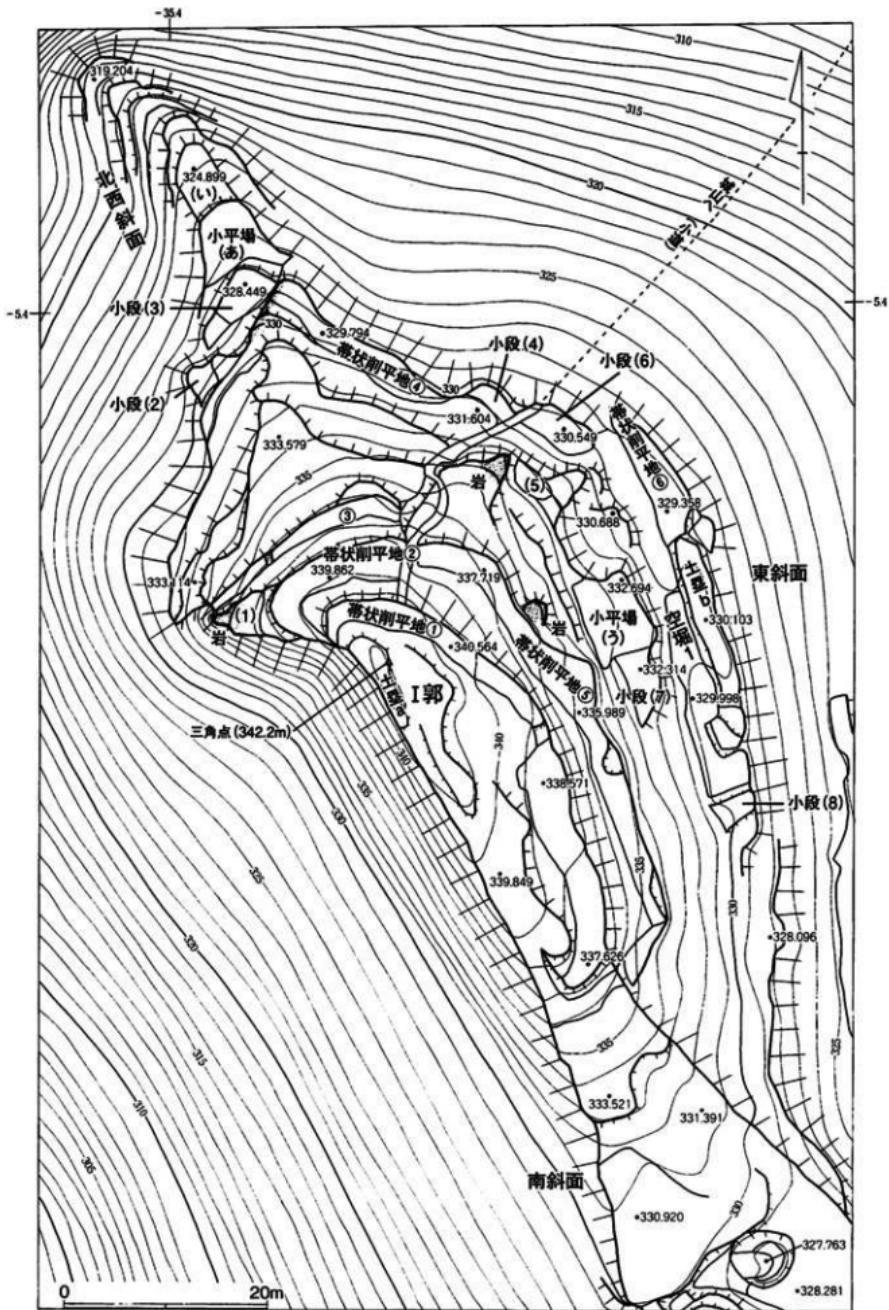
空堀1は、長さ20.5m、幅4.5m、標高330m。南側では、帯状削平地に見えるが、中央から北側へは、東側に土壌bが積まれており、空堀であることが分かる。ただし、土壌は崩壊が進み、基底部のみの残存である。南端の土壌は、わずかな高まりに過ぎない。それでも、底部が北側へ少し傾斜するので、北端では、10~20cmの深さになって、空堀らしくなる。土壌bは、長さ16.5m、上場幅3~2m。帯状削平地⑥は、土壌bの北下にあり、標高329m、長さ14m、幅4.0~1.5m。小段（8）は、長さ3~2m、幅4m、標高330m。空堀1の南下にあり、何らかの関連があろう。

〔南斜面〕

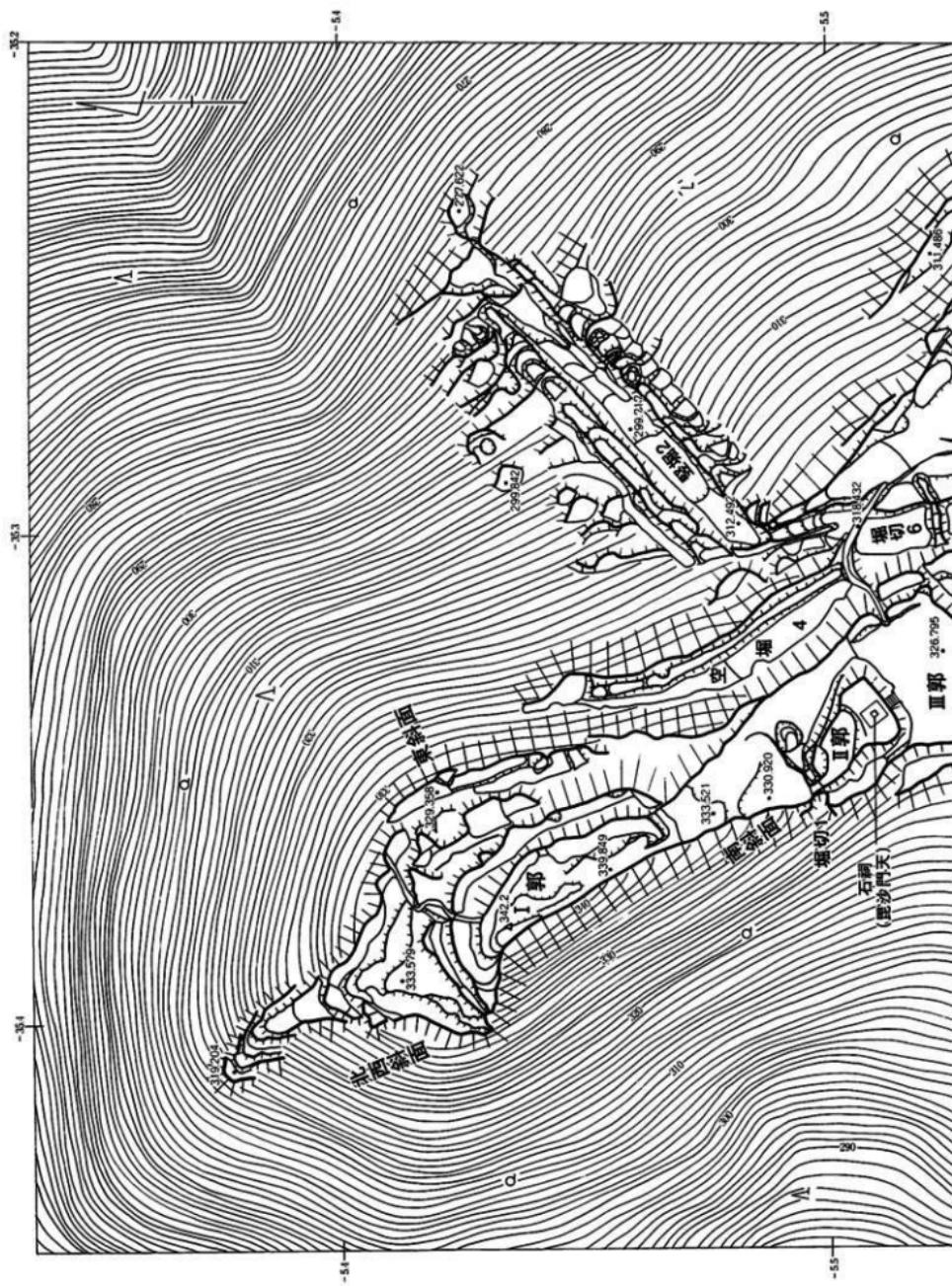
尾根の南斜面は、緩長の台形状を呈する。標高336~329m、幅は上位で8m、下位で21m、II郭の堀切1に接している。

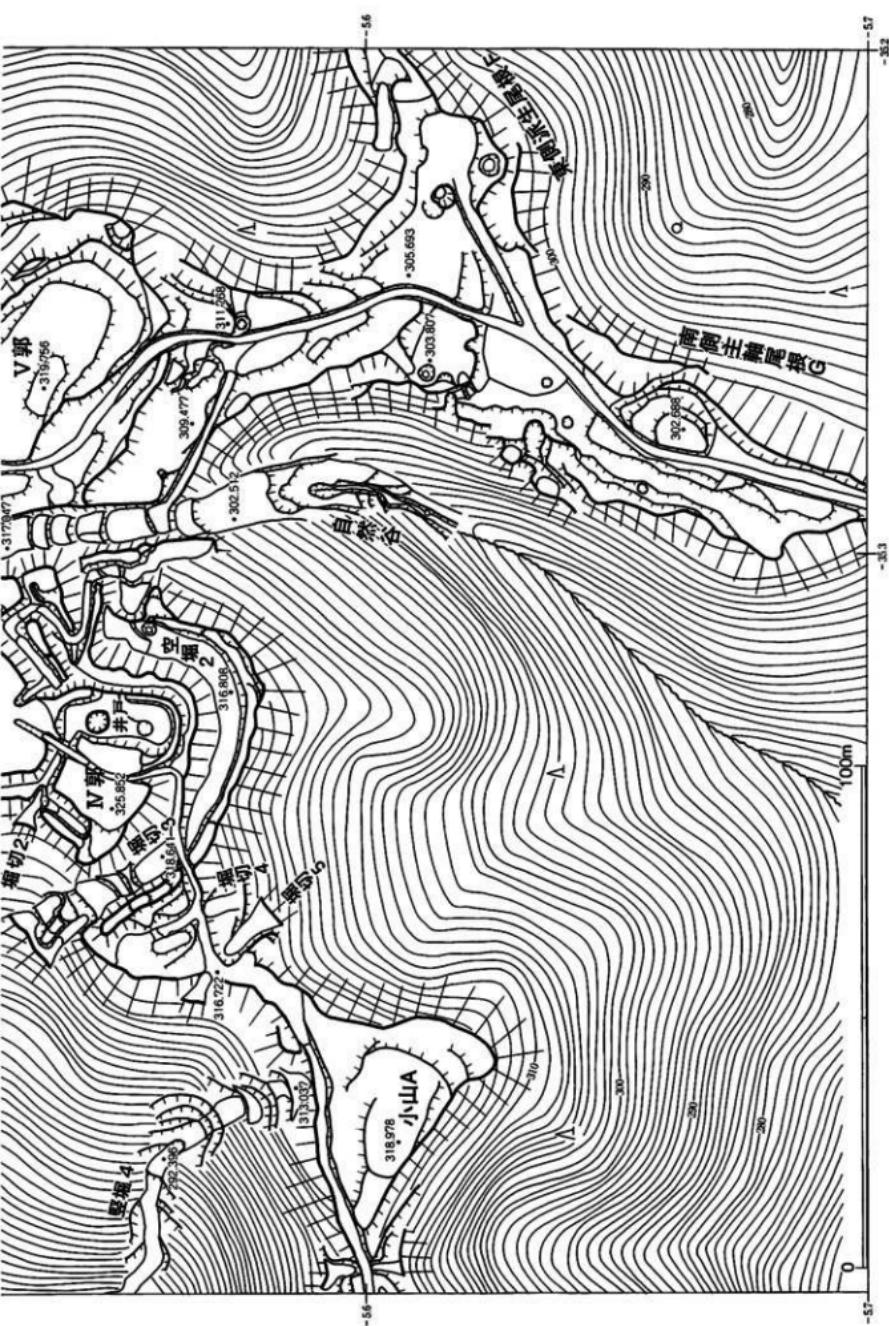
造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
土壌a	10.0	2.5~1.5	342.2
帯状削平地②	16.0	4.0(最大)	340.0~339.0
帯状削平地③	21.5	2.0~1.0	337~336
帯状削平地④	20.0	3.0	331~329
帯状削平地⑤	51.0	5.0~2.0	338~334
小段（1）	4.5	4.5(最大)	338~337
小段（2）	6.0	3.0	330
小段（3）	9.0	4.0(最大)	329~328
小段（4）	5.0	2.0	331~330
小段（5）	4.5	2.0	334~333
小段（6）	6.5	3.5	331~330
小段（7）	7.0	3.0	333~332
小平場（あ）	8.5	6.0	327~326
小平場（い）	6.5	4.0	325

第11表 I郭造構計測表



第7図 測量図① (I郭)





第8回 全体叢書 I (I 集~V 集)

第2節 Ⅱ郭

2段に分かれる。上段のⅡ郭①は、長軸方位N34°W、長さ16m、幅7~1.5m、標高330.9m。北西端ですばり、堀切1の土橋に繋がる。下段のⅡ郭②は、長さ14m、幅6~7.5m、標高330.2m。長方形の平地で、中央に毘沙門天を祀る大きな石祠がある。Ⅲ郭からは、土壇状に見える区画である。小平場（え）は、Ⅱ郭①の西下にあり、長さ14.5m、幅3~4m、標高328.3m。南端から、長さ7m、幅0.5~1.5mの通路が、Ⅲ郭へ延びている。

Ⅱ郭-1は、Ⅱ郭の東下にあり、長さ25m、幅は、標高329mの上位で10m、標高328mの下位で4m。Ⅰ郭へ上がる時に、通路として利用できる。本来ならば、堀切1の延長部分が、上位を横断している所である。東縁下は、標高324mまで急斜面になる。

第3節 Ⅲ郭

造成の度合が非常に高い平地で、長軸方位N48°E。長さ24m、幅は北縁で24m、南縁で31.5m。標高は、北縁で327.2m、南縁で326.8m。日平城跡で、最大の平地面積を有している。東縁には、通路で二分された全長17.5mの土壠cがある。北側部分は、上場幅2~1.5m、下場幅4m。Ⅲ郭北縁と石祠のあるⅡ郭②との高低差は2.6m。

遺構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
凹道A	8.5	1.0~2.0	326~324	Ⅲ郭南縁のやや西寄り箇所から、南へ直線的に下る。
凹道B	17.0	2.0~1.5	322.4	A~Bの交点は直角。Ⅲ郭と4.4mの高低差。
凹道C	5.5	2.0	322~321	B~Cの交点は直角。B~Cは、直線的な走行。
凹道D	10.0	1.5~1.0	320	C~Dの交点は、ほぼ直角。Dは、やや弧状の走行。
凹道E	4.0	1.0	321~320	帯状削平地⑥の北東端から下る。
凹道F	17.5	2.5~1.0	319~316	D~Fの交点角度は、60度。Fは、やや蛇行する。端部は、一旦切れて、下位のG個所と1.0mの高低差。崩れの可能性がある。
凹道G	4.0	2.5~2.0	314	F~Gの交点は、ほぼ直角。この箇所も、一旦、切れる。最下位のH個所とは1.0mの高低差。
凹道H	20.0	1.5~4.0	312~307	級傾斜の平地。上下で5.0mの高低差がある。
土壠c	17.5	2.0~1.5		通路で二分されている。
土壠d	14.5	2.0~1.0	323.2	尾根の斜面部に、鉤型の凹道を掘り立めることで、土壠が出来ている。上面は整形されており、凹道Bとは0.8mの高低差。
土壠e	6.5	1.5	320.3	凹道Dとの高低差は1.3m。造りは、土壠dと同じ。
土壠f	13.0	1.0~2.0	320~316	凹道Fの南肩部に積まれている。西縁で、帯状削平地⑥の北東端に繋がる。西縁から東側への級傾斜地。
土壠g	6.5	6.0~2.0	316~312	張り出し傾斜尾根を利用した土壠。
小段(9)	10.0	3.0	325	北縁下に通路。
小段(10)	5.5	5.0(端部)	324	舌状形の平地。
小平場(お)	10.0	2.5~7.0	323	凹道Cの東上にある。
小平場(か)	7.0	5.0	321	土壠eとセットをなす。

第12表 Ⅲ郭造構計測表

[東斜面]

小段(9)は、Ⅲ郭の東直下にあり、標高325m、長さ10m、幅3m。さらに6.6m東下に大堀切6がある。北縁下を通路が上がっている。

[西斜面]

帶状削平地⑦は、堀切2の西端部から、N3°Eの方位に延びる平地である。標高324m、全長21m、幅4.5~2m。本来は、堀切2と別の区画である。

[南斜面]

空堀ともいえる四道(A~H)が、上位で、端的な樹型を描きながら、南東下の大堀切6へ下っている。さらに、再下位のH個所は、小段(19)を経て、南主軸尾根Gと小道で繋がっているように見える。

土星d~gは、凹道に開通する土星である。走行の方位は、土星gのみが、緩位となる。

Ⅲ郭の南東隅下には、小段(10)・小平場(お)・(か)が造成されている。

第4節 Ⅲ郭-1

Ⅲ郭の南西隅下から張り出した長方形の平地。長軸方位N5°E、長さ21m、幅9~5m、標高323~324.2m。高低差は、Ⅲ郭と2.2m、北西上のⅣ郭と、2.1m。

真中から北寄りに井戸が残っている。地山まで掘り下げた貯水池で、清掃結果とも合わせて別記する(→87頁)。この「井戸曲輪」とも言える平地には、土星h・iがある。土星hは、北東縁の傾斜地にあり、土星iは、東縁の中央部から南縁を巡り、Ⅳ郭の南東下に至っている。Ⅳ郭から下る堀切2は、東側の一部が、わずかに確認できる。

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
土星h	9.0	3.0	326.0~323.6	Ⅲ郭からの門道と、堀切2に開通する土星であろう。
土星i	25.5	1.0	323.3	現況は、高さ30cm程度の土星である。
堀切2(東側)	2.5	2.0	325.0	土堀より東側は、僅かな窪みに過ぎない。

第13表 Ⅲ郭-1 造構計測表

[南~東斜面]

帶状削平地⑧は、Ⅲ郭-1の直下斜面を、南側から東側へ走行している。登城道から枝分かれした犬走りで、長さ37m、幅3.5~1m、標高321m。Ⅲ郭-1との高低差は2.5m。北東端は、土星jに繋がる。

第5節 空堀2

帶状削平地⑨の下位にあって、走行状態は、南肩部の土星jと同じである。造りは、豊堀2や堀切6と同様に、極めて大規模である。長さ(西側の登城道まで)63m、幅は北東側で最大6.5m、南側の中央部で4m。Ⅲ郭-1との高低差は、北東側で7.4m、南側で5.8m。土星jは、長さ(同じく登城道まで)66m、上幅は北東側で1m、南側で最大3m、下場幅は、南側で最大6m。土星から空堀の深さは、北東側寄りで1m、南側で1.1m。後後に土星を崩して、空堀が埋められている事がわかる。

第6節 IV郭

Ⅲ郭-1の北西上に並列する長方形の平地。長軸方位N27°E、長さ18m、幅17~11.5m、標高325.9~325.7m、造成の度合も、Ⅲ郭と同様に高い。東寄りを日平集落からの登城道が縱走している。北西溝には、緩傾斜地Aがある。舌状形で、長さ8.5m、幅は、上位で6.5m、標高325.1~323m。

Ⅲ郭との境に堀切2が造成されている。造りは、堀切1と同じで、土橋個所を登城道が通過する。堀切2-1は、堀切2の北西下にあり、手が加えられて、小谷が豎堀化している。南東側は、前述のように、はっきりしない。

空堀3と土壙kは、IV郭の北西下にあり、直線的な走行を示す。堀底と土壙の上面は平らで、IV郭と土壙kの高低差3m、土壙から空堀3の深さは、0.5m。

〔南西斜面〕

堀切3は、主軸尾根の鞍部を切っている。間に登城道を挟むが、空堀2とは、一連の造構である。土橋個所は、長さ1~2m、幅5m、標高319.1m、IV郭との高低差は、6.8m。土橋の南東側に堀切3-1があり、長さ9m、幅5~4m、標高318.6m。北西側には、上段に小段(11)・(12)、斜面部に豎堀1・緩傾斜地B・小段(13)・帯状削平地⑨がある。

土壙jは、堀切3の西肩部に積まれた大土壙である。土壙jとは同じ造りで、堀切の造営時の排土が積み上げられている。上場は、長さ19.5m、幅2.5~1.5m、中央部の標高321.5m。土橋との高低差は、2.4m。下場は、長さ24.5m、最大幅7.5m。

土壙mは、尾根の小山地形を土壙に仕立てている。上場幅は、長さ8m、幅2.5~2m、標高319m。土壙lとの間に堀切4、西下に堀切5があり、土橋個所を登城道が通っている。現況は、浅い掘り込みである。

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
小段(11)	2.0	5.5	319	この箇所までが、堀切3-1。
小段(12)	5.5	8.0	318~317	端部は、土壙jの端と横並びになる。
小段(13)	5.5	4.5	315~314	下位の帯状削平地⑨とは、繋がらない。
豎堀1	12.0	2.5~2.0	316~310	端部は、帯状削平地⑨に変化する。
緩傾斜地B	9.0	4.5~1.5	315~312	豎堀1の東肩部に該当する。
帯状削平地⑨	10.0	4.0~1.0	311~310	豎堀1と繋がる。

第14表 IV郭造構計測表

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
堀切4	18.0	2.0~3.0	317~315	土壙l~mに挟まれた部分は、長さ9.0m、底幅2.0m。 登城道から南下は、はっきりしない。
堀切5	24.0	2.5~6.5	316~313	登城道を挟んで、豎堀のようになっている。

第15表 堀切4・5計測表

第7節 堀切6

Ⅲ郭・Ⅲ郭-1とV郭を仕切る大規模な堀切である。北側で、同じく大規模造りの堅堀2に繋がっている。南側は、底部に小段群が連なり、端部で自然谷に接する。北側は、V郭から堀切を跨いで、Ⅲ郭へ上がる登城道が横切っている。ただし、堀切6の土橋とルートが合わないので、後世に造られることが分かる。

土橋は、小平場（お）の東下にあり、長さ8.5m、幅2~1m、中央部の標高319m、堀底からの高さ1m、ただし、土橋からの上がり道は確認出来ない。一方で、V郭側には通路が付いており、長さ6m、幅1m、標高320.5m、高さ0.5m。

堀底部は、土橋を境にして、北側に6-1・2、南側に6-3・小段群（15）～（20）・6-4がある。

6-1は、長さ21m、幅8.5~7.5m、登城道を跨いだ区画である。堀底の標高は、西縁で318.7m、東縁で318.5m、北縁で317.9m。高低差は、西上の小段（9）から6.3m、東上のV郭西縁から1.4m。北側の段下に6-2がある。この区画には、幅1.5m、長さ13mの浸食溝が継続してあり、端部から犬走り地形（長さ8.5m）に変化して、堅堀2の最上位を走行する。6-2の北西上の斜面には、小段（14）がある。

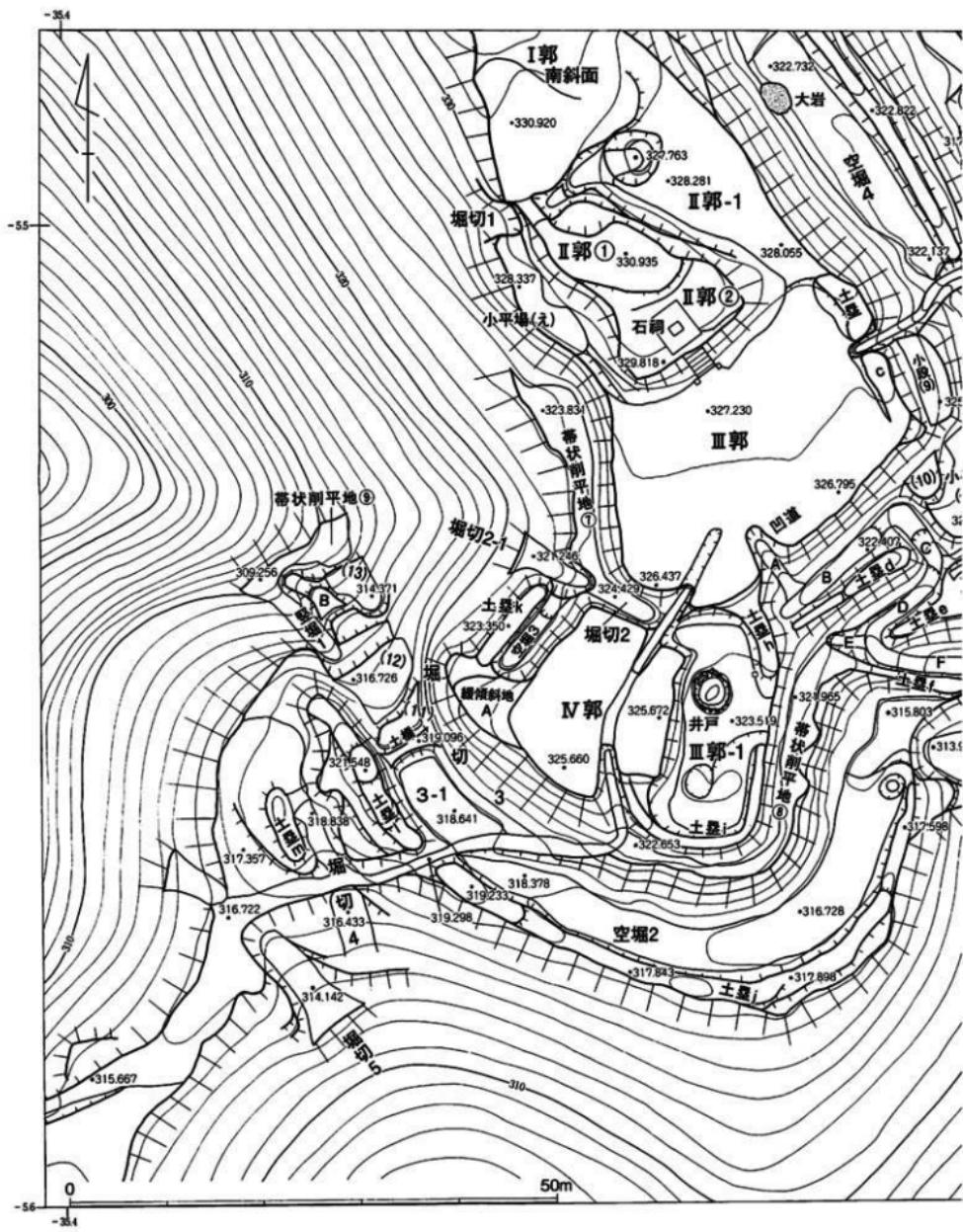
6-3は、長さ8.5m、幅6.5~6m、標高317m。この区画から、南側へ傾斜しており、6-1とは1.7mの高低差がある。段下から、底部に小段（15）～（20）が連なり、さらに、6-4の傾斜谷を経て、自然谷に接する。

道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
堀切6-2	9.0	6.5~6.0	317~315	段上の6-1との高低差は、1m。
小段（14）	4.0	2.0	318~317	舌状形の小段。幅は、最大数値
小段（15）	6.5	2.5	316.3	—
小段（16）	5.5	3.0	314.5	—
小段（17）	6.0	5.0	313~312	西上に土壠gがある。
小段（18）	6.5~5.5	8.5	311~309	西上に土壠gがある。
小段（19）	7.0	4.0	308	南西側からの小道が繋がる
小段（20）	8.0	3.5	307~306	西上に凹道田の南端部がある。
堀切6-4	18.5	7.0~10.5	305~298	小段地形はない。

第16表 堀切6計測表

第8節 V郭

堀切6の東側にある。中心城は、長方形状の平場で、長軸方位N53°E、長さ48m、幅20~17m、標高319.8m。造成の度合は、Ⅲ郭よりも低く、土壠状の僅かな高まりを2か所に残している。V郭-1は、平場の北西側・括れ部で、長さ16.5m、幅8.5~6.5m、標高320.3m。端部は、さらに括れて、この地形を利用して、土壠nが造られている。堀切6-2の東肩部にあたり、長さ13.5m、幅2.5~1m、標高320~316m。



第9図 測量図② (1)



第9節 竪堀2

堀切6-2の端部から、115度の角度で下っている。ただし、堀底が、そのまま弯曲するのでなく、一旦、途切れた状態になる。前述のように、堀底から犬走り地形が付き出て、真下の標高313mから一直線に下り始める。底部には、堀切6に見る小段群がなく、そのまま傾斜して端部に至る。山腹を直に掘り窪めた大規模な竪堀として注目される。全長71.5m、底幅4.5~6m、長軸方位N51°E、標高298mからは、東縁に雨水の浸食溝が下っている。標高285.8mから下位の堀底は、大きく崩れて形をなさない。東肩部に土壠o、西肩部に土壠pがある。

【土壠o】

標高310~284mにあり、全長64.5m、上場は、形状によって6区画（イ～ヘ）に細分されるが、下場が明確でない。上位には、土壠の代りに小段（21）～（23）がある。

道構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）	備考
土壠o-イ	3.0	2.5	310~309	舌状形の平地。下場は、小山状をなす。
土壠o-ロ	22.5	2.5~1.5	308~299	形が整って細い帯状形をなす。
土壠o-ハ	17.0	4.5~3.0	298~293	土壠を利用した、3基の炭焼き窯跡が残っている。
土壠o-ニ	3.0	4.0	292	舌状の小段地形。
土壠o-ホ	2.0	3.0	291	小段地形。
土壠o-ヘ	13.0	2.5~1.5	289~284	形が整って細い帯状形をなす。
小段（21）	1.5	4.5	315	—
小段（22）	2.5	4.0	313	—
小段（23）	7.5	2.0	310.2	土壠o-イの直上。

第17表 土壠o道構計測表

【土壠o：南東下の小段群】

標高307.2~294mの間に、小段（24）～（32）が連なっている。いずれも、小規模な造成地である。小段群から東側の山腹は、自然地形のままである。

道構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）
小段（24）	1.5	3.5	307.2
小段（25）	4.0	3.0	306.3
小段（26）	2.5	3.0	303.2
小段（27）	4.0	4.0	301.6
小段（28）	4.0	3.0	300.6
小段（29）	3.0	3.5	299.6
小段（30）	2.5	3.5	298.4
小段（31）	3.0	3.5	296.3
小段（32）	2.5	2.5	295~294

第18表 南東下小段計測表

【土壠p】

標高314.3~286mにあり、全長73m、上場は、形状によって、小段（33）～（34）と8区画（トーカ）に細分される。下場もはっきりしており、土壠oよりも、しっかりした造成がなされている。竪堀2の掘削・排

土は、主に西肩部へ積まれたことが解る。

土壘 p の西下には、標高314~297mに、堅堀3が並走している。一部、崩壊しているが、全長41m、幅2.5~2m。

さらに、山腹には、散在状態の小段(35)~(39)があり、小段(35)は堅堀3と接している。小段(39)は方形状をなす。山腹下位には、現代の炭焼き窯跡が3基ある。

道構名	長さ(m)	幅(m)	下場幅(m)	標高(m)
小段(33)	2.0	6.5	—	314.5
土壘p-ト	2.5	2.0	5.0	314~313
土壘p-チ	5.0	2.5	6.0	312~311
土壘p-リ	6.5	2.0~1.0	5.0	309~308
土壘p-ヌ	14.0	2.5~2.0	5.0	307~302
土壘p-ル	7.5	3.5~2.0	5.0~6.0	299~298
土壘p-ヲ	4.0	2.5~2.0	5.0	296~295
土壘p-ワ	3.5	3.0	—	293.4
土壘p-カ	7.0	3.0~1.5	—	289~286
小段(34)	1.5	6.0	—	290.5

第19表 土壘p造構計測表

道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
小段(35)	3.5	5.0	306.6
小段(36)	4.5	7.0	305~304
小段(37)	3.0	4.0	303~302
小段(38)	5.0	6.0	300~299
小段(39)	4.0	5.0	289

第20表 土壘p北側小段計測表

第10節 空堀4

I郭~II郭の東下にある。全長61.5m、底部は、空堀4-1~3に分かれる。4-1は、長さ30m、幅6~2m、幅広の北端に仕切りがある。この区画は、同心円状に、内側を標高322.5m、外側を標高323mの等高線が巡り、底部が凹地になっている。北上の4-2は、長さ9.5mの個所を、標高324mの等高線が横切り、幅5.5~3m、北端ですばまる。北寄りの4-3は、長さ22m、中央部で幅2m、標高324.7mの北端で1m幅になる。

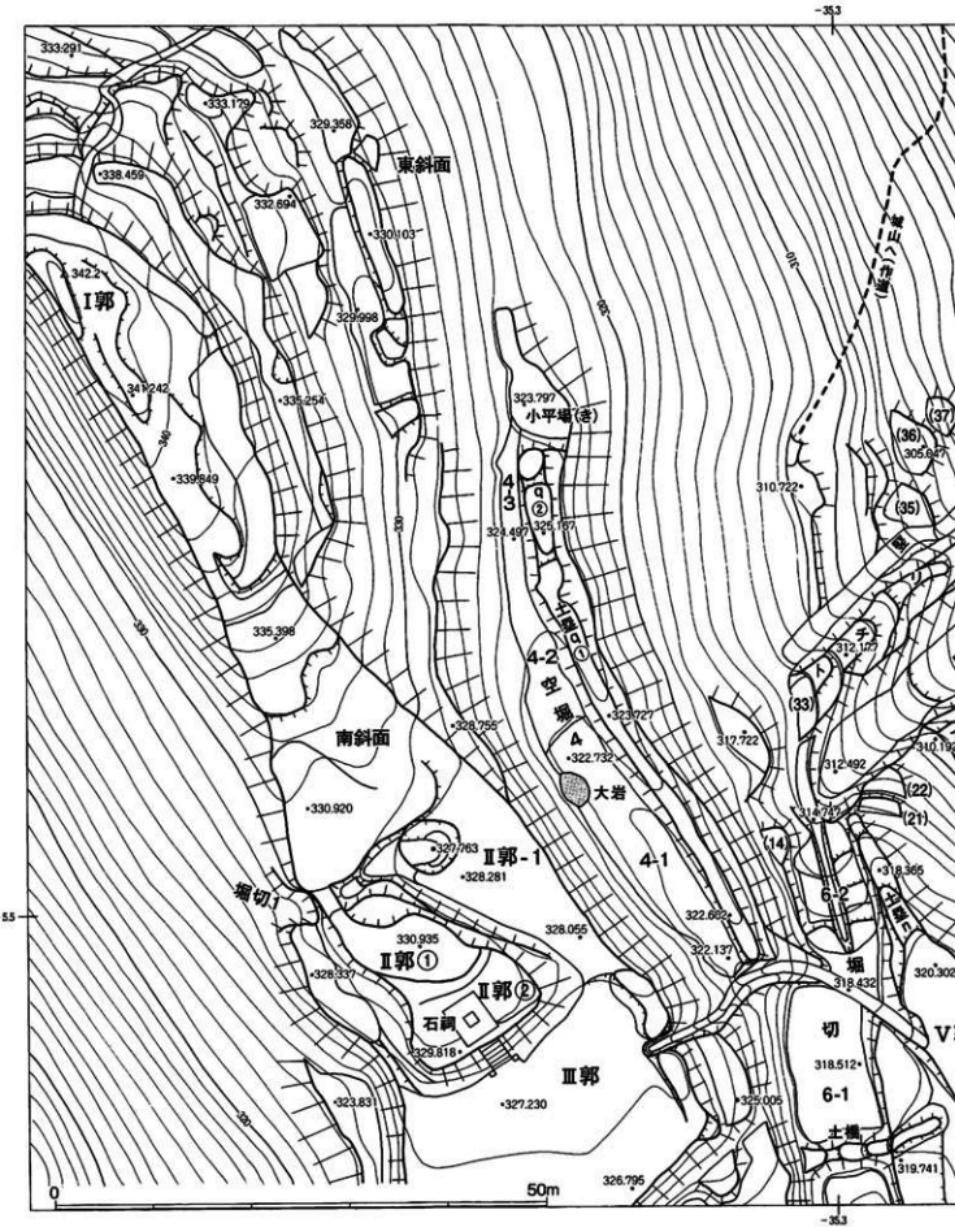
空堀4-1の中央部から南域は、東下に堅堀2、西上にII郭がある。

[土壘q]

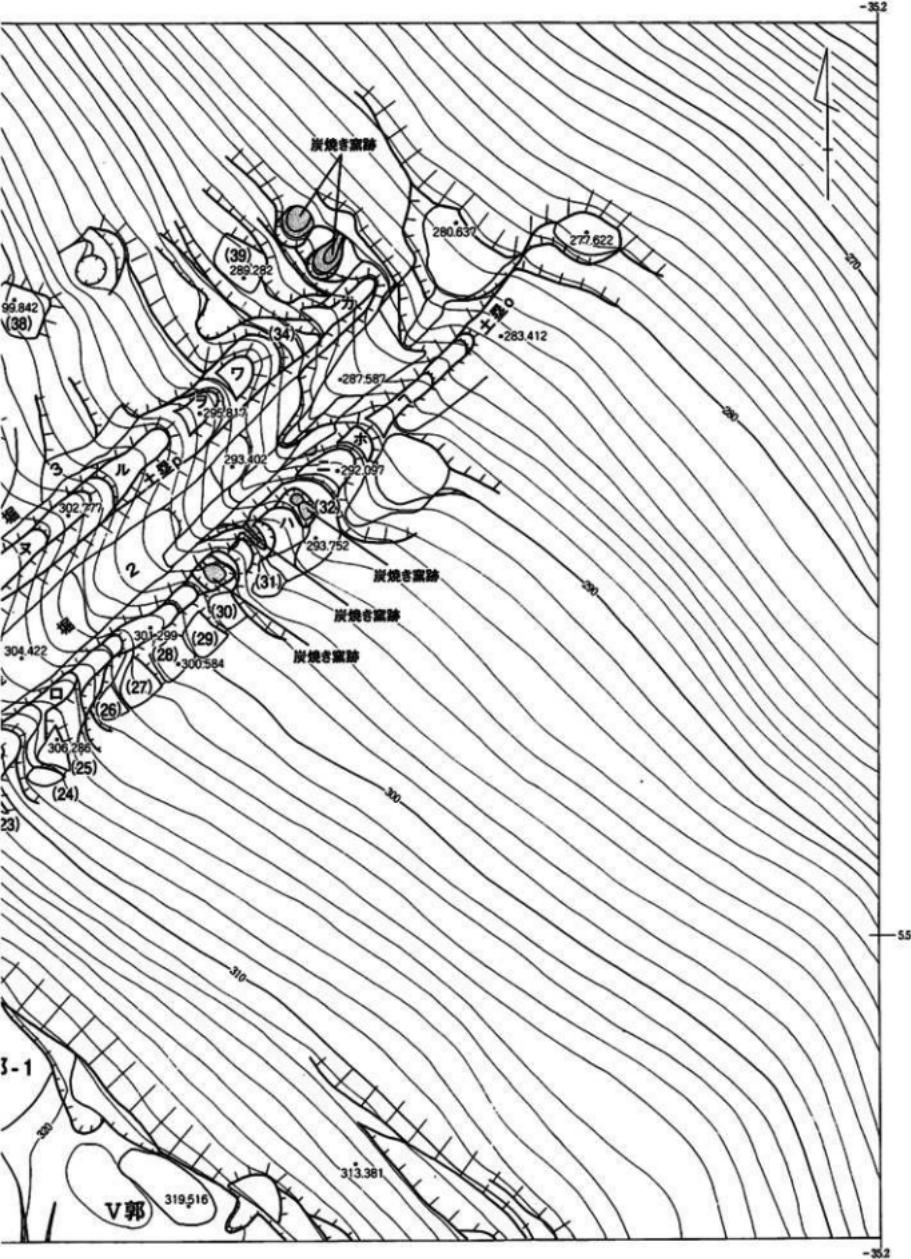
空堀4の東肩部に積まれており、全長57m、土壘q①・q②に二分される。q①は、長さ46m、幅1.5~2.5m、大方、均一で、北端で広がる。北側から南側へ緩傾斜しており、標高324~322m。底部との高低差は0.5~1.0m。q②は、長さ11m、幅2.5~1.5m。この内、7.5m分がやや、高くなっている、標高325.2m。底部との高低差は0.67mになる。

[小平場(き)]

空堀4-3と土壘q②の北下にある。長さ12.5m、幅5.5~2m。北寄りで長さ5.5m分がすばまる。標高323.8m。空堀4-3の北端との高低差は0.9m。



第10回 測量図③（豎）



第11節 小山A

最高所は、標高319m、北東下の鞍部（登城道）との高低差3.4m。堀切5からの距離は64m。上面域は、長軸方位N66°E、造成の度合が、やや低く、中央部が、高いまで残されている。西側は急斜面で、北東側だけが緩斜面をなす。北下を登城道が通り、北東下から、谷部を利用した堅堀4が下っている。さらに、西下の小鞍部に堀切7がある。堀切3に最も近い物見の場である。

標高(m)	長さ(m)	幅(m)	備考
319mライン	5.0	3.0	—
318mライン	20.0	12.5	東縁を除く三線に、切り込みがある。
317mライン	26.0	17.0(最大)	—

第21表 小山A計測表

【堅堀4】

南上の登城道は、標高314m。標高306mの小段(40)下から堅堀が下っている。谷部に手が加えられており、主軸方位によって、底部が4-1～3に分けられる。4-2からの底部は、特に形が整っている。4-4から下位は自然谷のままで、湧水個所があり、現況からは水汲み場の可能性もある。小段(40)は、長さ2.5m、幅8.5m、標高306～305m。

道構名	長さ(m)	幅(m)	主軸方位	備考
堅堀4-1	15.0	5.0～3.0	N34°E	—
堅堀4-2	9.0	3.5～2.0	N54°E	—
堅堀4-3	15.0	3.0～2.5	N82°E	—
堅堀4-4	13.0	2.5～6.0	N50°E	端部は、幅広くなっている。

第22表 堅堀4計測表

【堀切7】

堀底は、登城道を挟んで、北側(7-1)と南側(7-2)に分かれる。土橋個所を登山道が通っている。浅い掘り込みに見えるが、後世に埋め戻された可能性がある。確かに、そうしないと、通路として利用するには、不便である。

道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
堀切7-1	6.0	3.5～5.5	310～307	端部は、幅広くなっている。
堀切7-2	6.0	1.0～2.5	311～309	形の整った底部になっている。

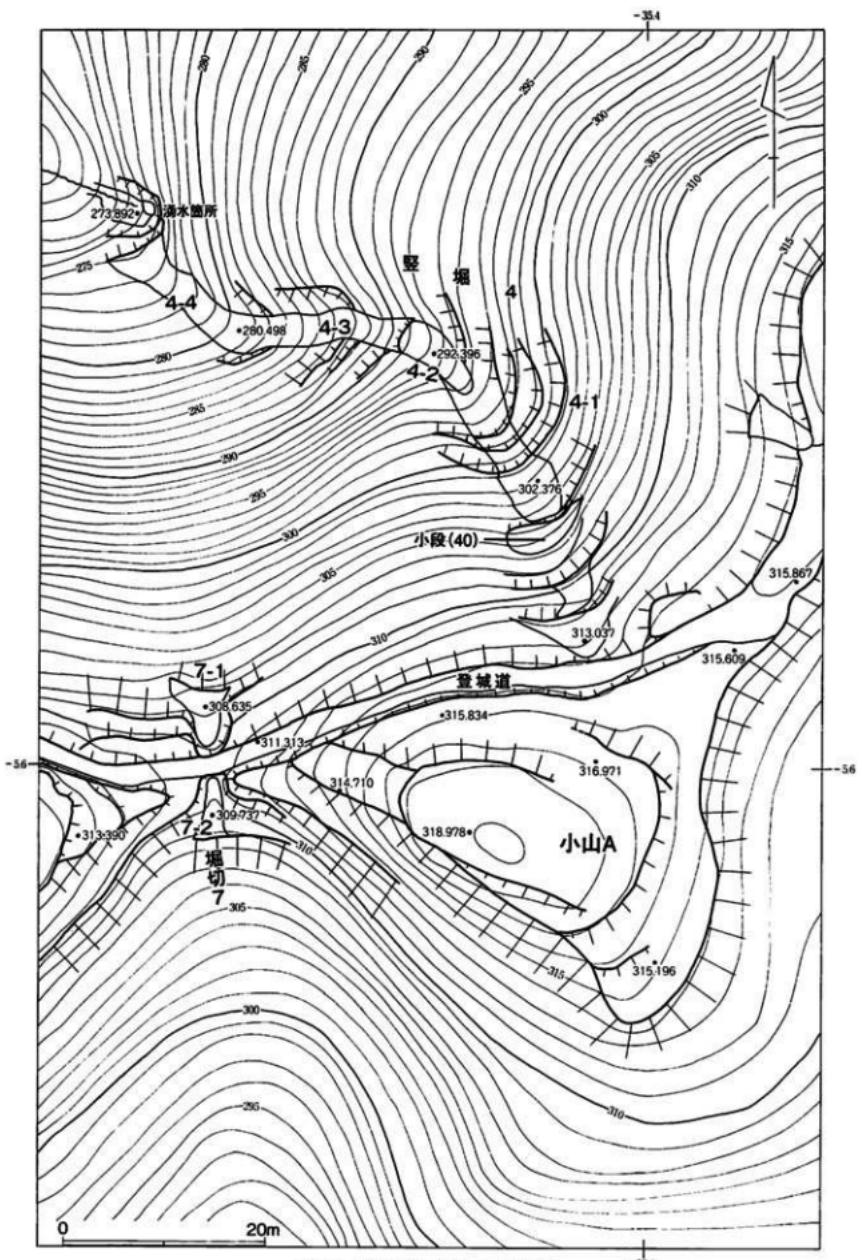
第23表 堀切7計測表

第12節 小山B

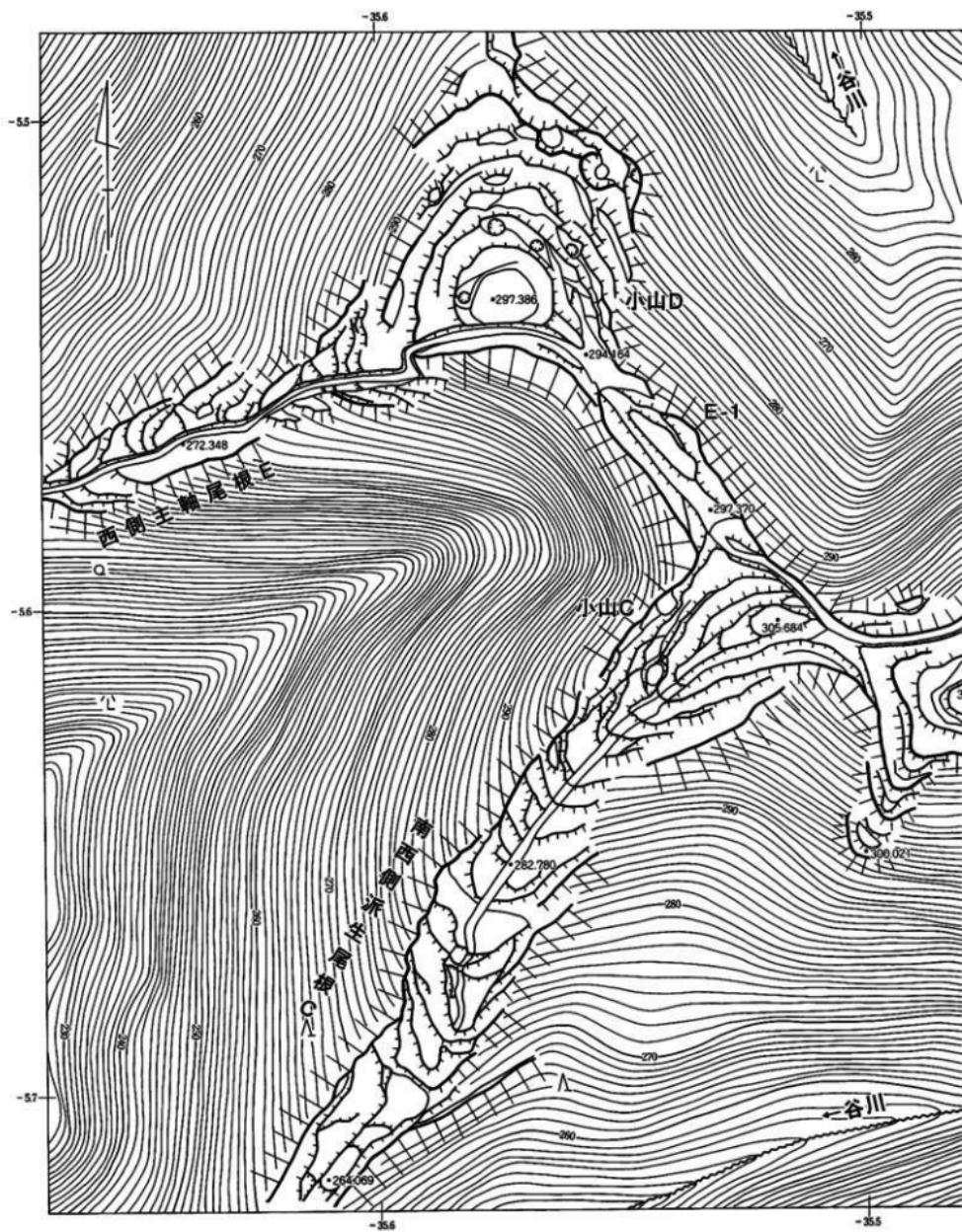
上面域は、造成の度合が高い平地である。標高は、中央部で316.4m、長さ26m、幅8.5～4m、長軸方位N55°E。縁方を316mの等高線が通っている。南西側の斜面部が張り出しており、下位に小段(41)がある。さらに、北西下・尾根の鞍部下に、小段(42)が造成されている。いずれも、その場所で、単独に存在する。

道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
小段(41)	6.0	2.5	301.0	三日月形の平地。上面域との高低差15.6m。
小段(42)	6.0	2.5	305.1	三日月形の平地。 鞍部・登山道との高低差4.6m。

第24表 小山B計測表

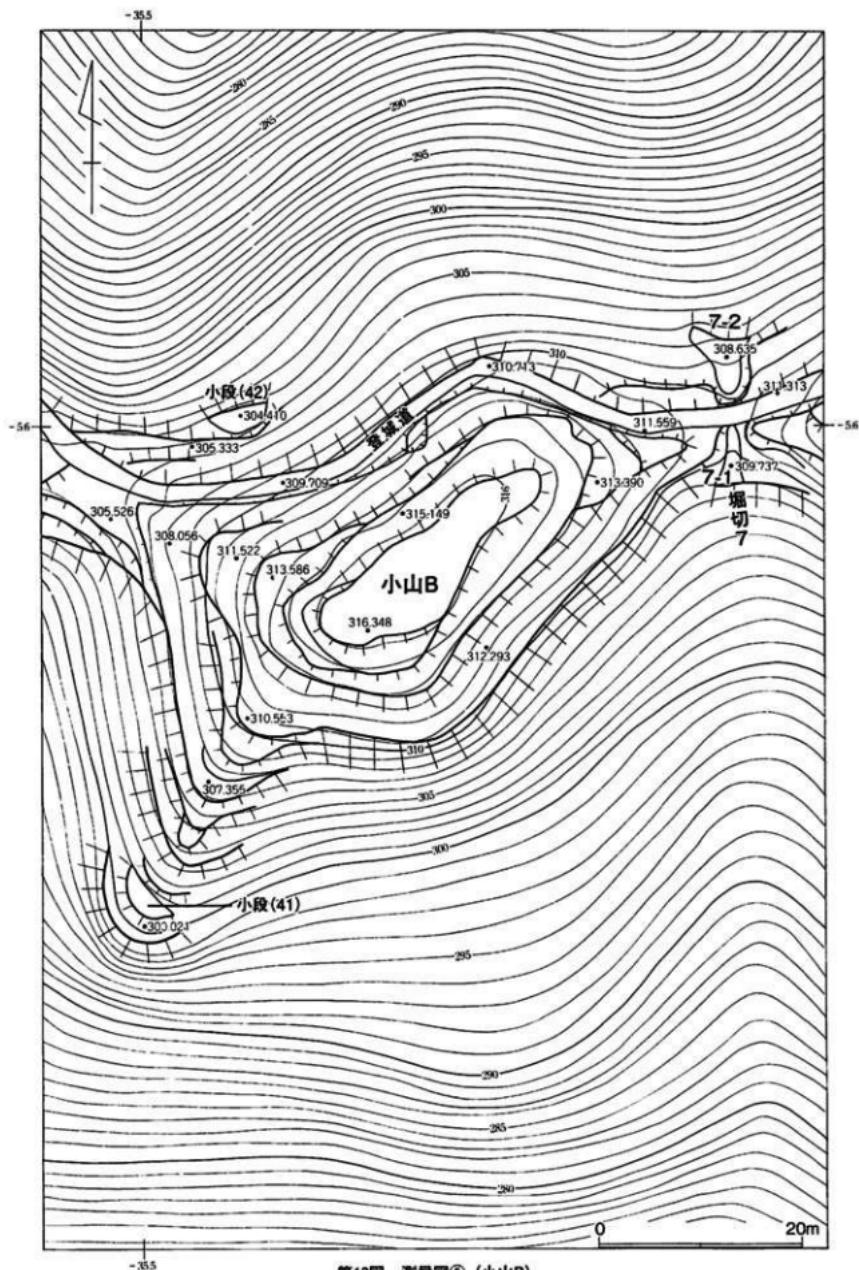


第11図 測量図④ (小山A・積堀 4)



第12図 全体造構図2





第13図 測量図⑤ (小山B)

第13節 南西側派生尾根C

小山Bの西側に位置する派生尾根である。西側主軸尾根から枝分かれしており、全長265mに及ぶ。小山C、尾根はC-1～6に分かれ、下位に堀切8と小山C-7がある。

[小山C]

造成の度合が低く、最上部は、標高305.7m、長さ12.5m、最大幅5m、長軸方位N74°E。これより2.5～1m幅の通路が尾根の中央部を下っており、和水町と玉名市の行政境をなす。

[C-1] 標高301～290m、長軸方位N52°E。北西斜面に小段(43)～(47)がある。

[C-2] 標高289～280m、長軸方位N41°E。尾根は、やや緩傾斜になる。

[C-3] 標高279～266m、長軸方位N17°E。小平場(く)・(け)があり、通路は、標高271mで切れている。

道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
小段(43)	4.0	4.0	298
小段(44)	4.0	3.0	301
小段(45)	7.0	2.5	300
小段(46)	8.0	2.0	299
小段(47)	2.0	5.5	290.6
小平場(く)	21.0	10.0～5.0	279～278
小平場(け)	12.0	3.0	277～276

第25表 C-1・C-3道構計測表

[C-4] 標高265～259m、長軸方位N39°E、長さ47m、整形された瘦せ馬地形。幅は、北東端で9m、途中から4.5～3m。

[C-5] 標高258～251m、長軸方位N10°E、急傾斜地である。

[C-6] 標高250～245m、長軸方位N18°E、尾根筋は、幅広い緩傾斜地になる。長さ23m、最大幅11m。直下に堀切8がある。

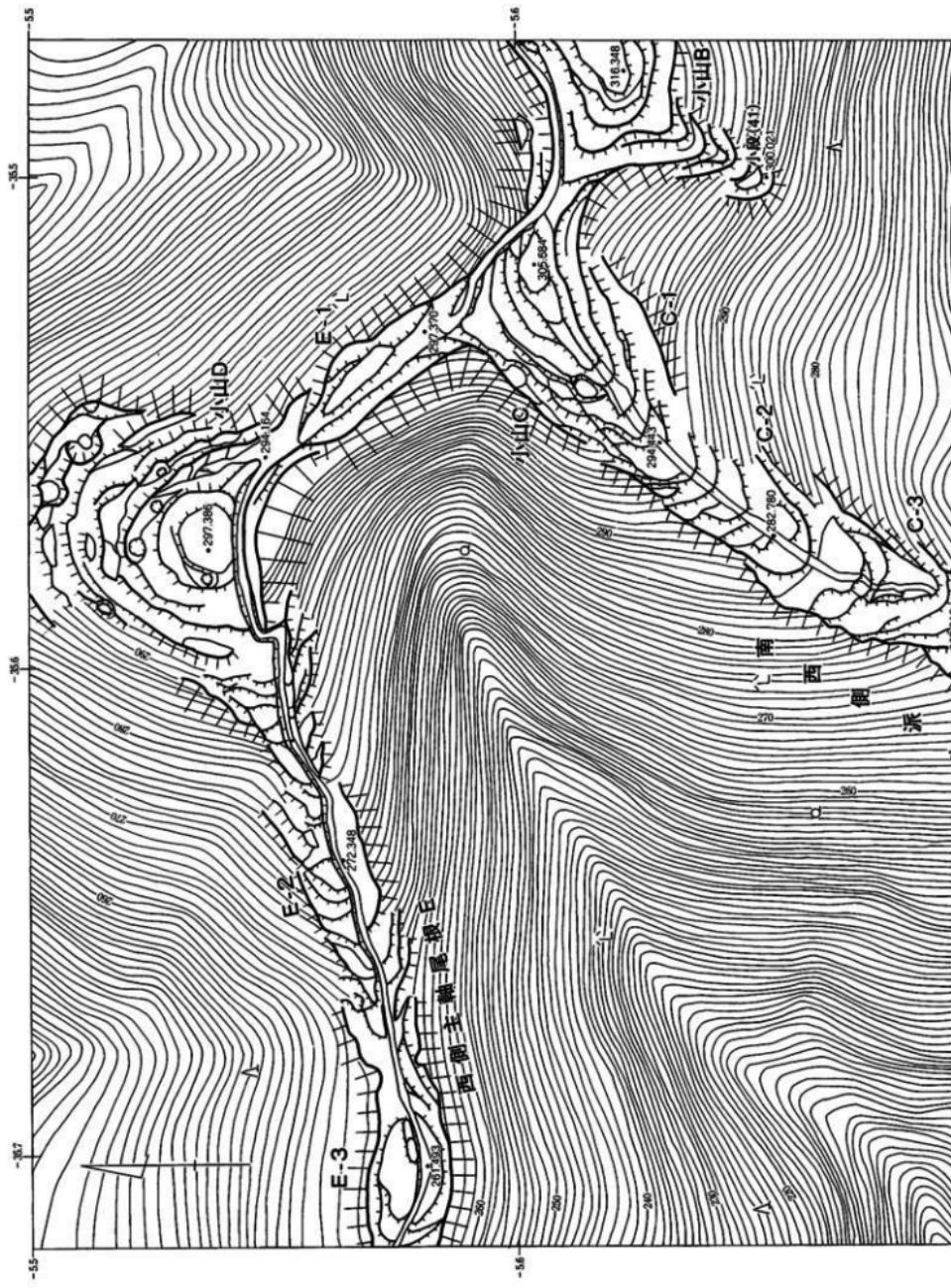
[堀切8]

底部は、長さ6.5～3.5m、幅3.5m、標高244m。段堀で、北上に小段(48)、南上に小段(49)がある。さらに、東下に小段(50)～(52)、西下に小段(53)がある。この中で、小段(48)の東西両縁は、細長の帯状削平地⑩になっている。小段(49)も、西側へ大きく延びている。

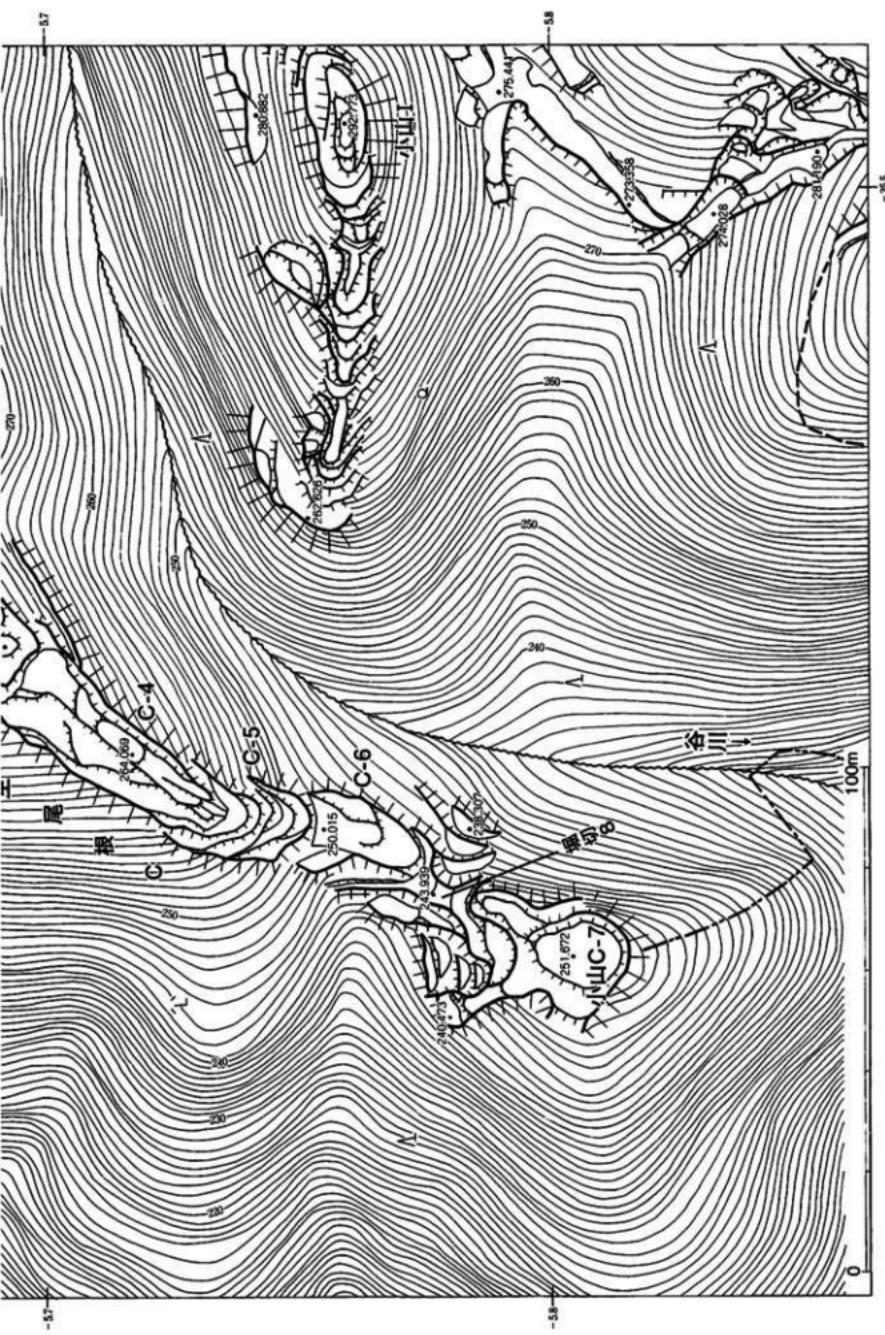
道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
小段(48)	5.0	6.0	245～244
小段(49)	22.0	3.5～3.0	246～244
小段(50)	11.0	2.0	243～242
小段(51)	9.5	3.0	241～240
小段(52)	10.5	3.0	239～238
小段(53)	18.0	4.0～1.5	243～242

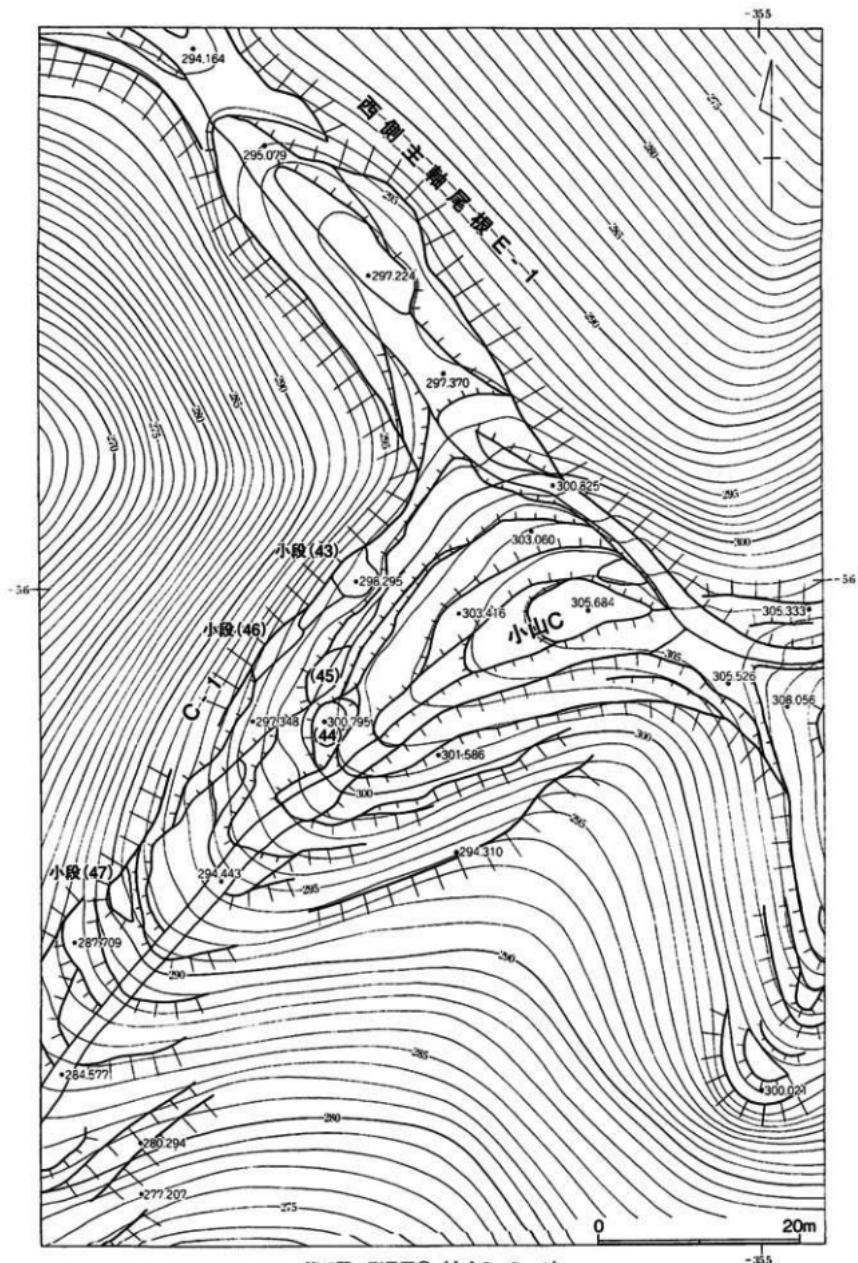
道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
帯状削平地⑩ 東側	9.0	2.0	244
帯状削平地⑩ 西側	14.0	1.0	245～244

第26表 堀切8道構計測表

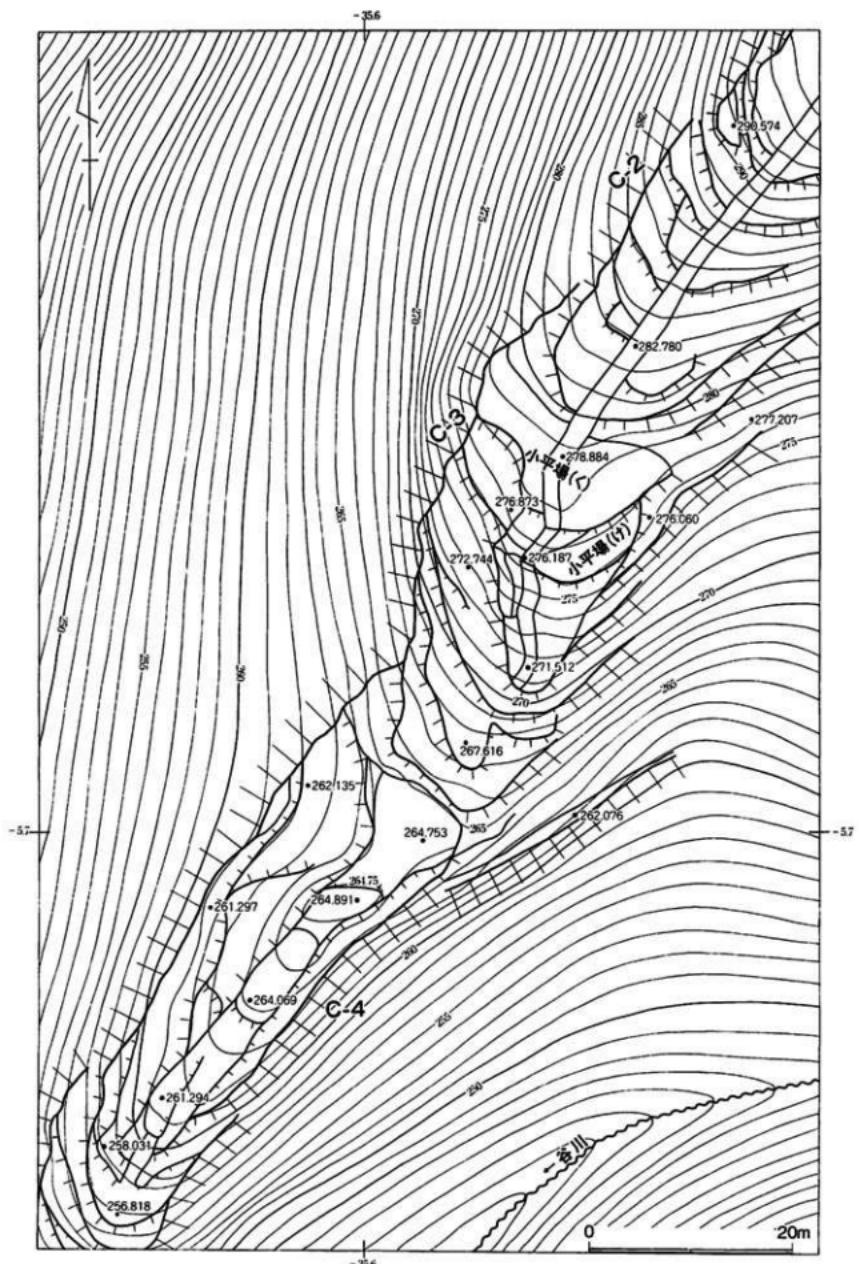


第14圖 全體地圖圖3 (南西側深生層C)

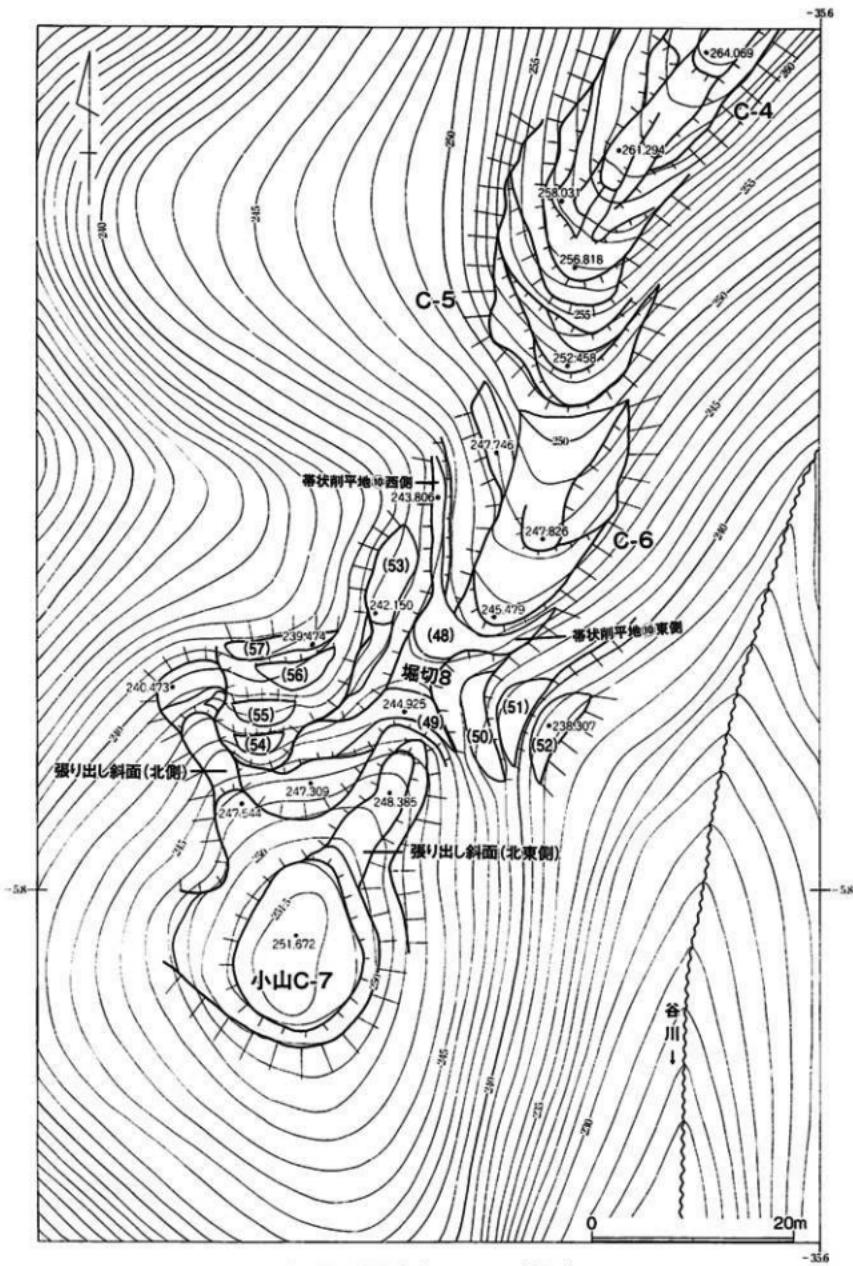




第15図 測量図⑥ (小山C・C-1)



第16図 測量図⑦ (C-2 ~ 4)



第17図 測量図⑧ (C-5~7・堀切8)

[小山C-7]

南端部の小山である。上面の標高は、251.5m、長さ16.5m、最大幅12.5m。長軸方位N40°E、堀切の底部からの高低差7.1m。北東側と北側に、張り出し斜面がある。小山からは、南方面（玉東町の山北地区）の山並みが望める。

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
張り出し斜面 北東側	12.0	4.5~2.5	250~246	上場の規模。
張り出し斜面 北側	22.0	3.0	250~240	下位の標高242~240mは、幅7mに広がる。
小段(54)	5.0	2.0	243.5	—
小段(55)	6.5	2.5	242.0	—
小段(56)	8.0	3.0	240.1	—
小段(57)	11.5	2.0~1.5	239.0	—

第27表 小山C-7 造構計測表

第14節 西側主軸尾根E-1

小山C-D間で、標高301~294m、長さ50m、幅2.5~1.5mの登城道が、ここでは7m幅まで拡大する。さらに、標高297.2~296mでは、長さ20m、最大幅4mの範囲が、やや高くなっている。北西端は、尾根の鞍部で、痕跡を確認出来ないが、本来ならば堀切9が刻まれている個所である。この区画は、北側と南東側にも延びている。

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
堀切9(推定)	8.0	6.0~5.5	294.0	両斜面にも、痕跡が認められない。
帯状削平地⑪ 北側	13.0	2.5~1.0	294.0	端部に、標高294.6m、長さ3.5m、1.5mの高まりがある。
帯状削平地⑫ 南東側	8.0	3.0(最大)	294.0	端部は、すばまる。

第28表 E-1 造構計測表

第15節 西側派生尾根D

西側主軸尾根から北側に枝分かれしており、小山Dを基底部とする。全長180m、D-1~3に分かれ、下位に堀切10・11と小山D-4がある。

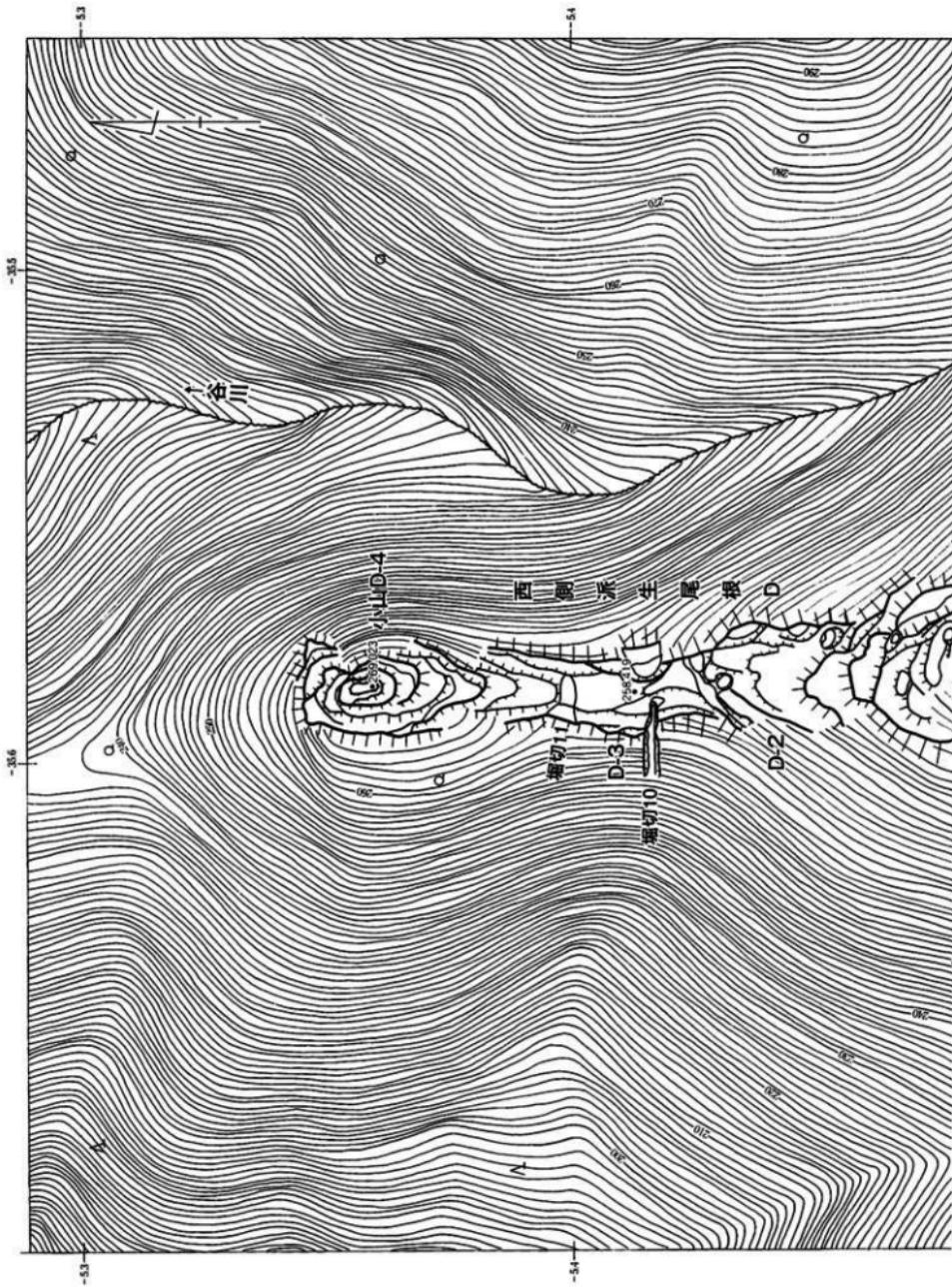
[小山D]

登城道の北肩部にある。最上域は、造成の痕跡が認められ、標高297.4m、長さ13.5m、幅11m、縁部を標高297mの等高線が巡っている。D①は、同心円状の外枠にある。幅は、北側と東側で、4.5~3m、縁部を296mの等高線が巡る。

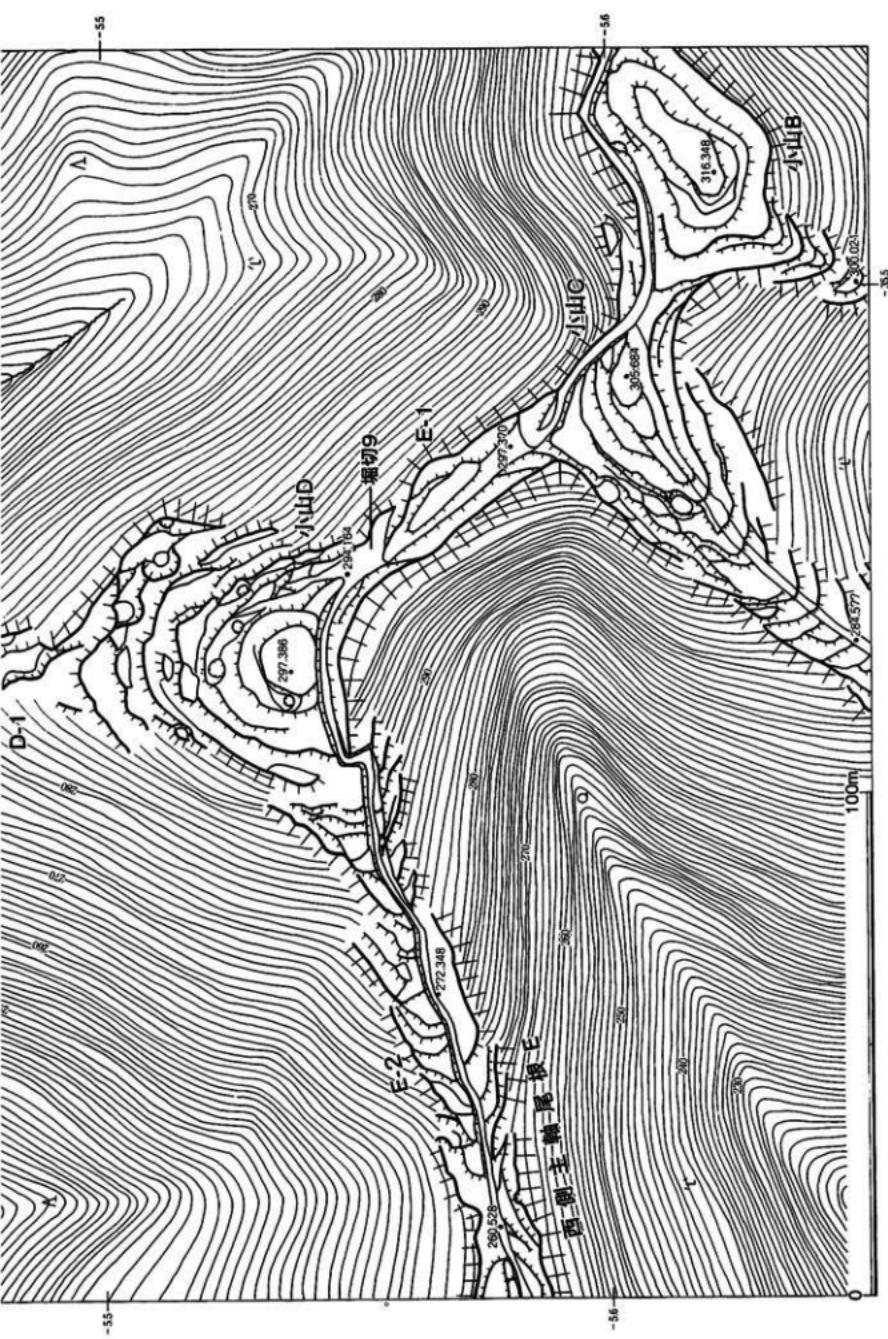
東斜面には、帯状削平地⑬~⑮と小段(58)がある。北斜面は、小平場(こ)~(し)と小段(59)~(63)があり、下位の標高は284m。西斜面には小段(64)があり、下位は西側主軸尾根E-2となる。

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
帯状削平地⑬	27.0	3.0~2.0	294.0	両端部は、すばまる。
帯状削平地⑭	16.5	2.0~0.5	291.8	北側ですばまる
帯状削平地⑮	16.5	2.0~1.0	286.2	形が整っている。
小段(58)	7.5	3.1~1.5	292.0	南側に直径1.5mの穴。
小平場(こ)	18.0	3.0	294.0	2ヶ所に直径3.0m・2.0mの穴。
小平場(さ)	22.5	5.0~1.5	291.0	東端で小段(58)に接する。
小平場(し)	18.0	5.5	282.0	西斜面から掘り込んだ直径2.5mの穴。

第29表 小山D 造構計測表



第18図 全体遺構図4 [西側派生尾根D]



道構名	長さ (m)	幅 (m)	標高 (m)
小段 (59)	5.0	2.0	289.6
小段 (60)	3.5	2.5	287.0
小段 (61)	8.0	2.5	285.7
小段 (62)	5.0	3.0	285.0
小段 (63)	4.0	3.5	281.7
小段 (64)	9.0	3.0	289.0

第30表 小山D道構計測表②

[D-1]

標高283~267m、下位に小平場(す)・(せ)と小段(65)・(66)がある。

道構名	長さ (m)	幅 (m)	標高 (m)	備考
小平場(す)	13.5	3.0~2.5	276~275	東側に直径3.0mの穴。
小平場(せ)	14.5	4.0~2.0	272~271	北端で小段(66)につながる。
小段(65)	4.5	2.5	273.0	—
小段(66)	3.5	2.0	274.8	—

第31表 D-1道構計測表

[D-2]

標高266~260m、尾根筋は、やや緩斜面で、下位に小段(67)・(68)、東斜面に小段(69)・(70)がある。

道構名	長さ (m)	幅 (m)	標高 (m)
小段(67)	3.5	2.5	261.0
小段(68)	4.0	2.5	260.3
小段(69)	8.5	2.5	261.9
小段(70)	4.5	2.5	264.5

第32表 D-2道構計測表

[D-3]

尾根筋末端の小鞍部で、長さ43m、標高は南側で259m、北側で261m。上面坡は、D-3①~③に細分され、堀切10・11がある。堀切10は東側(10-1)と西側(10-2)で形状が異なる。堀切11は、東斜面に帯状削平地がある。

道構名	長さ (m)	幅 (m)	標高 (m)	備考
D-3 1	14.0	2.5~7.5	259~258.4	中央の括れ部に、堀切10がある。
D-3 2	10.5	7.5~6.5	259.0	1/4周内を標高259mの等高線が走る。
D-3 3	8.0	6.0 (最大)	261.0	北側へ登りとなる。
堀切10-1	6.5	8.0 (最大)	258~257	東斜面に凹地。
堀切10-2	16.5	3.0~1.0	258~251	堀切の形状が残る。
堀切11	8.5	2.0~6.0	258	東下に切り込みは、なし。
帯状削平地16	23.5	3.0~1.0	258	—

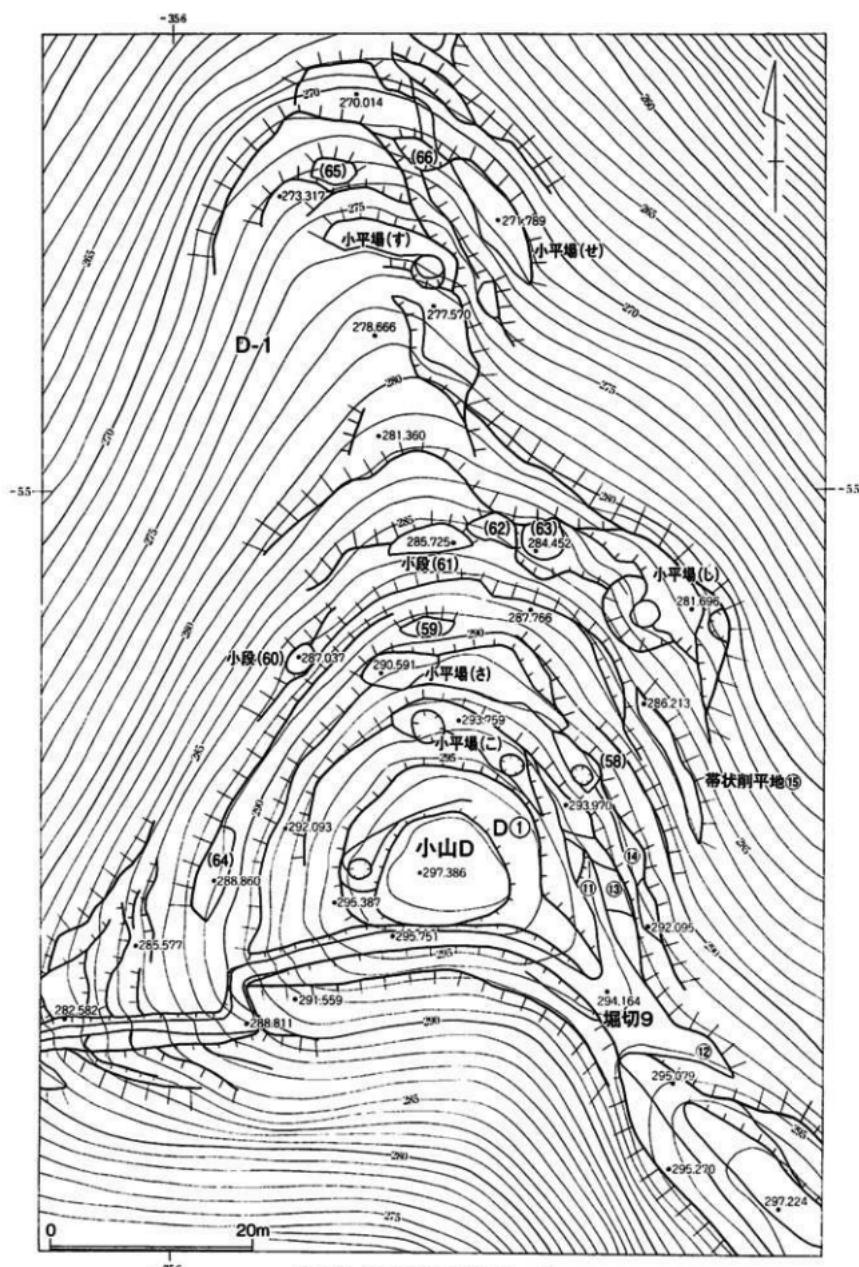
第33表 D-3道構計測表

[小山D-4]

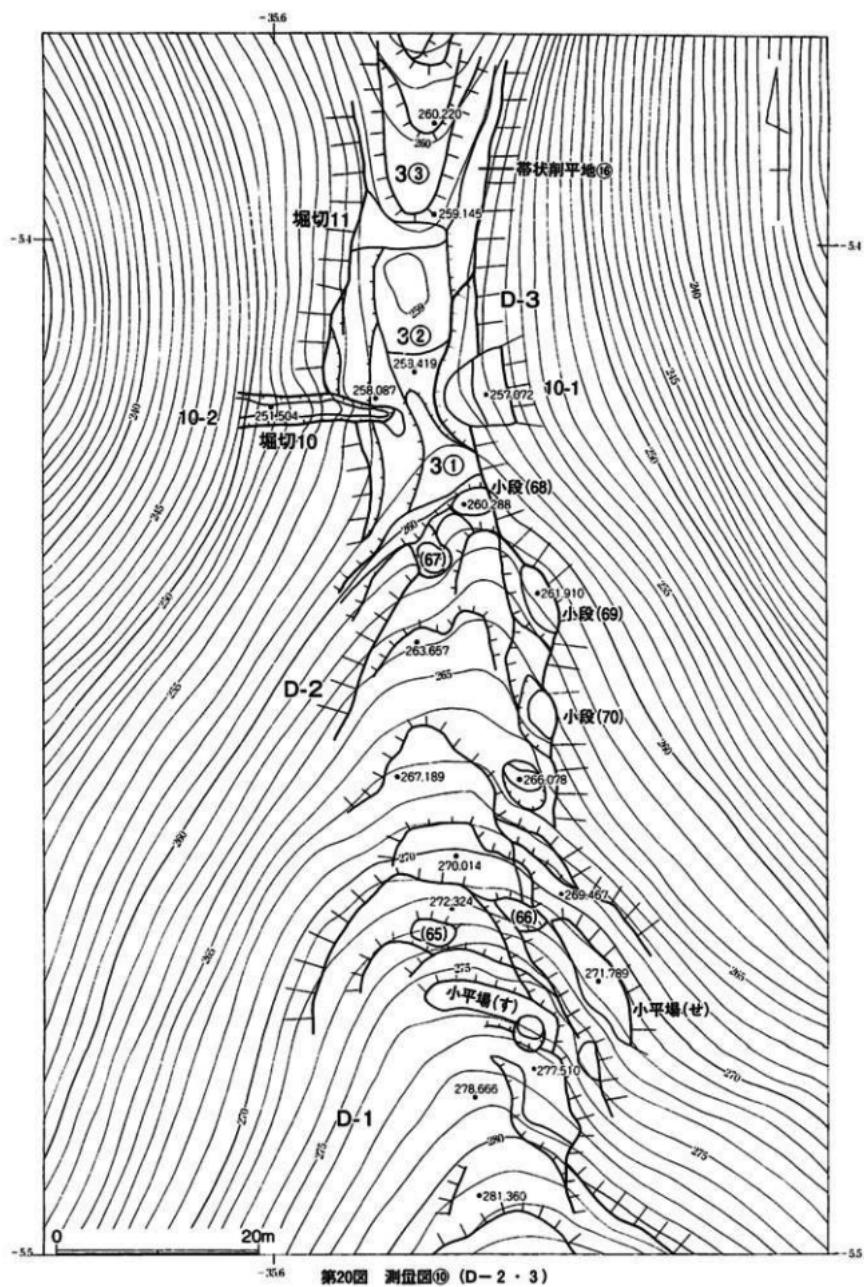
派生尾根の末端部は、小山になる。上面坡に限っては、自然地形で、標高269m、長さ5.5m、幅2.0m。北斜面に小段(71)~(73)がある。この小山からは、北方向が望める。

道構名	長さ (m)	幅 (m)	標高 (m)
小段(71)	8.0	3.0 (最大)	267.0
小段(72)	8.0	4.0	265~264
小段(73)	5.0	2.5 (最大)	262~261

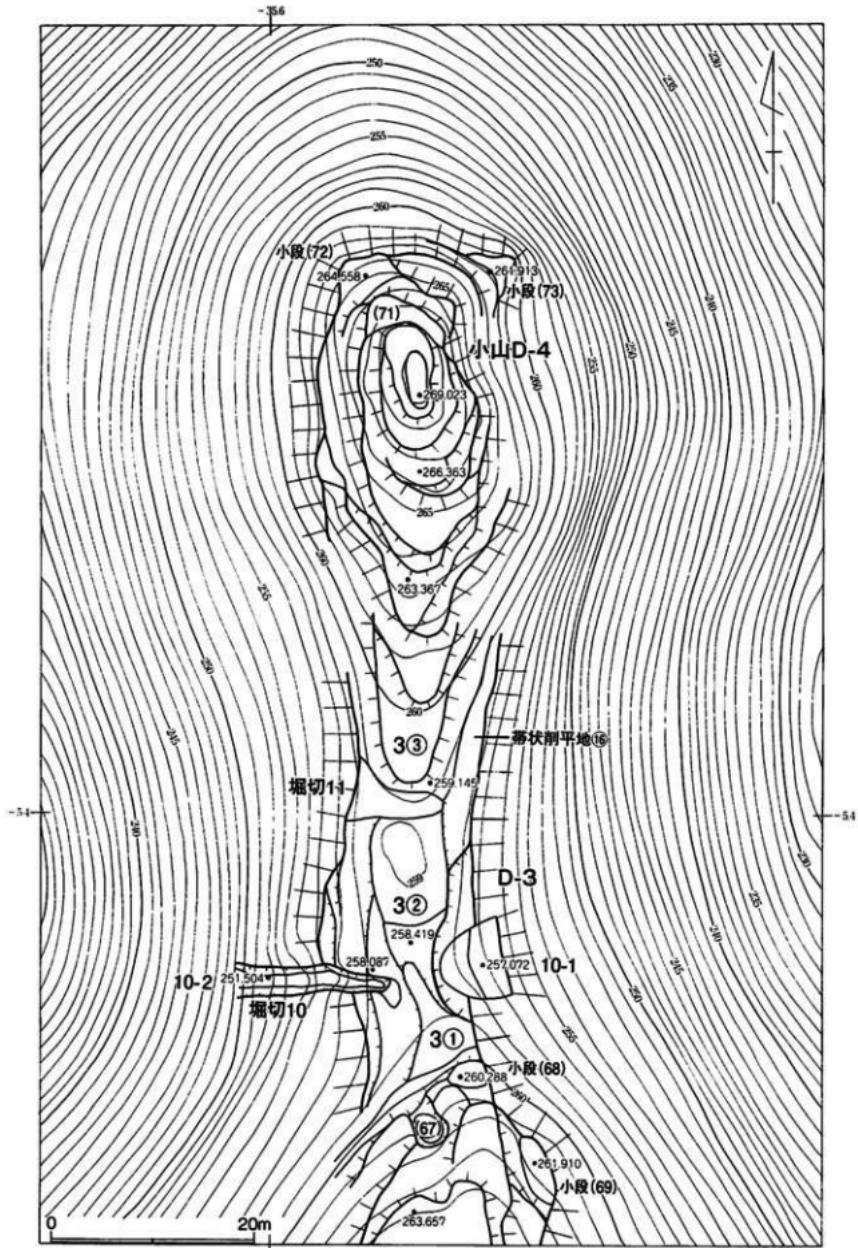
第34表 小山D-4道構計測表



第19図 測量図⑨ (小山D・D-1)



第20図 測量図⑩ (D-2 + 3)



第21図 測量図⑪ (D-3・小山D-4)

第16節 西側主軸尾根E

(E-2)

小山Dの南下を通る登城道は、標高291mで直角に折れ曲がって、急斜面の尾根筋を標高261mまで下る。城時代の登城道でもあり、屈曲個所が桿型を形成していることが分かる。登城道は、尾根筋の真中を通過しており、道を境に南北で造成の仕方が異なる。小段状の地形が、4箇所にある。

標高(m)	方位	造成状況
294~287	北側	2条の切り込みライン。小段(64)。
	南側	2条の切り込みライン。
287~276	北側	7条の切り込みライン。
	南側	4条の切り込みライン。小段(74)。
276~268	北側	6条の切り込みライン。小段(75)。
	南側	自然地形のまま。
268~261	北側	2条の切り込みライン。小段(76)・(77)。
	南側	5条の切り込みライン。

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
小段(74)	7.5	2.5	281.0~280.0
小段(75)	4.5	2.0	274.0
小段(76)	5.5	3.5	264.0
小段(77)	7.0	3.5	262.0

第35表 E-2 造構計測表

(E-3)

長さ59m、標高261~258mは、尾根の鞍部個所で、E-3①~③に分けられる。西側からは小山地形に見える。両側のE-3①・③は、本来ならば、堀切が刻まれる個所である。登城道は、中央部を通っている。

区画	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
E-3	22.0	13.0	261.0	東側からは、微高地に見える。
E-3①	17.0	6.5	260.5	中央部は、深さ0.5mに窪む。
E-3②	11.0	14.0	260.0~258.0	上面城との高低差は、3.0m。
E-3③	10.0	11.0~7.0	257.5	中央部は、深さ0.5mに窪む。

第36表 E-3 造構計測表

(E-4)

長さ60m、標高263~253mは、E-4から両側に尾根筋が下り、E-4①・②に分けられる。E-4上面城の造成度合は低く、長さ7.5m、幅3.5m、縁部を標高263mの等高線が巡る。登城道は、北下を通っている。

区画	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
E-4①	25.0	10.0	262~258	東側に下る尾根筋
E-4②	30.0	10.0	262~253	西側に下る尾根筋

第37表 E-4 造構計測表

(E-5)

長さ60m、標高252~246mは、尾根筋の緩傾斜地である。E-5とE-5①に分けられる。E-5は、造成された長方形の平地であるが、中央部の南寄りに、動かしようのない3つの大石など、まとまって存在する。大石と急崖面の僅かな間を登城道が通っている。E-5①には、帯状削平地⑦・⑧がある。

区画	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
E-5	19.0	6.0~5.0	252~251	3つの大石は、長さ6.5m、最大幅2.5mの範囲を占める。
E-5①	26.0	7.0~15.0	250~247	西側に下る尾根筋。

造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
帯状削平地⑦	12.0	2.5~2.0	250.4
帯状削平地⑧	15.5	3.5~1.5	248.3

第38表 E-5 造構計測表

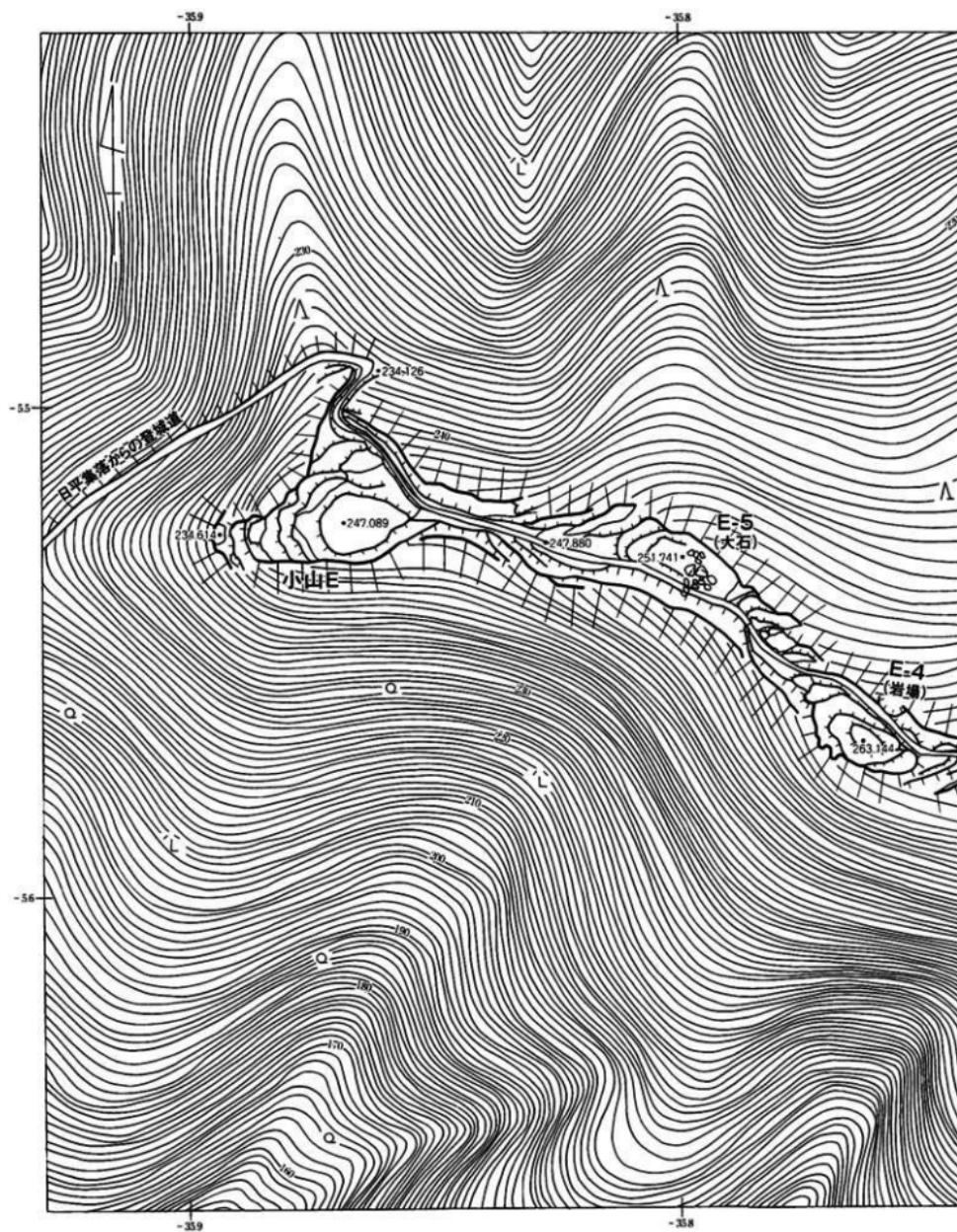
(小山E)

上面域は、長さ19m、幅12mの造成地で、最上位と縁部に標高247~246mの等高線が通り、E-①~③に分けられる。西側主軸尾根は、この区画が西端である。これより登城道は、山腹を日平集落へ下っていく。その意味から、地形の大きな変化点である。

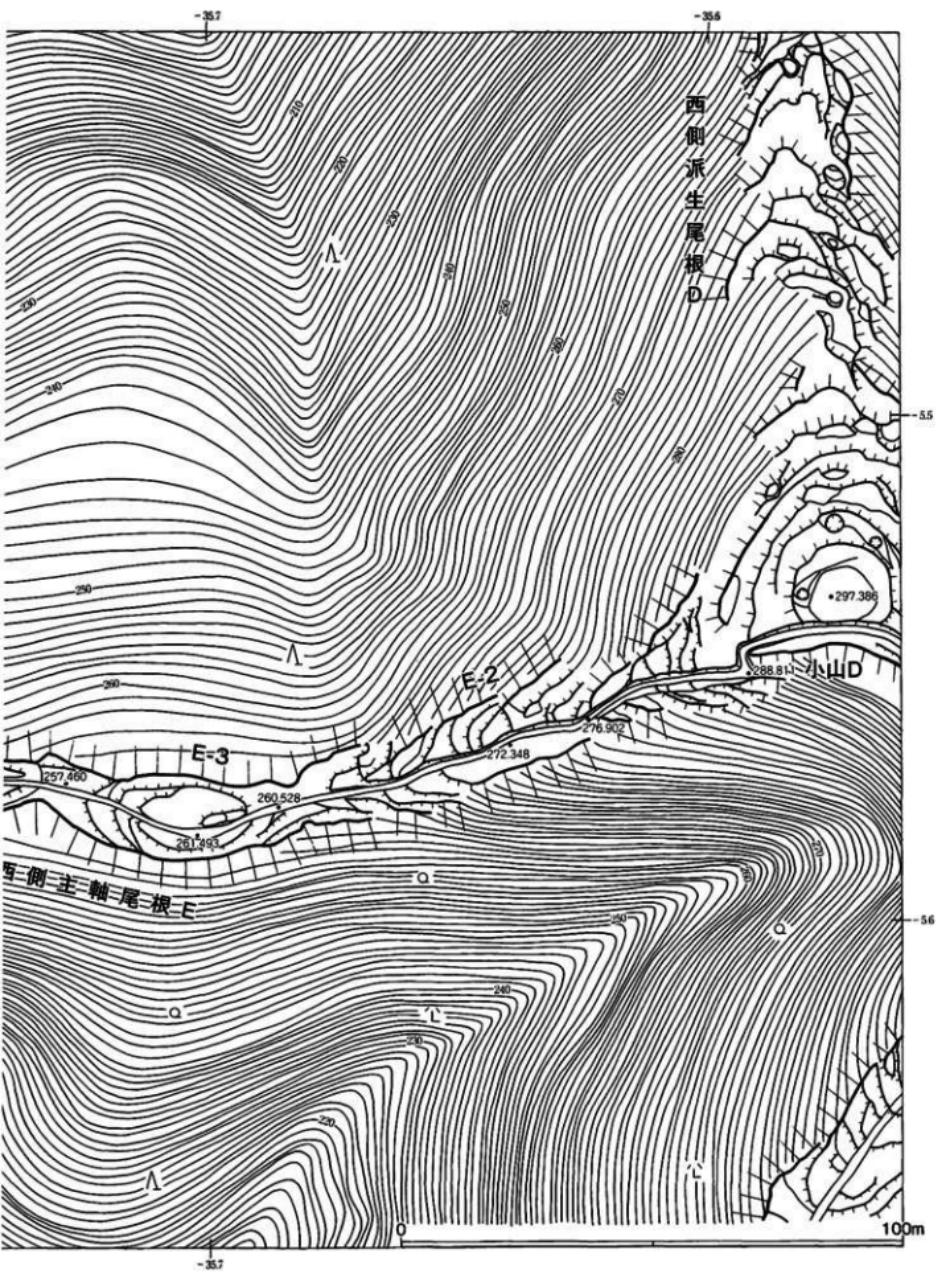
区画	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
小山E-①	13.0	10.0	245.5	東下の尾根筋で小鞍部にあたり、標高246mの等高線に挟まれる。 真中を登城道が通る。
小山E-②	16.0	13.0	245~238	小段(78)があり、北東ドを登城道が下っている。
小山E-③	22.0	15.0	245~235	小段(79)~(81)が連なる。

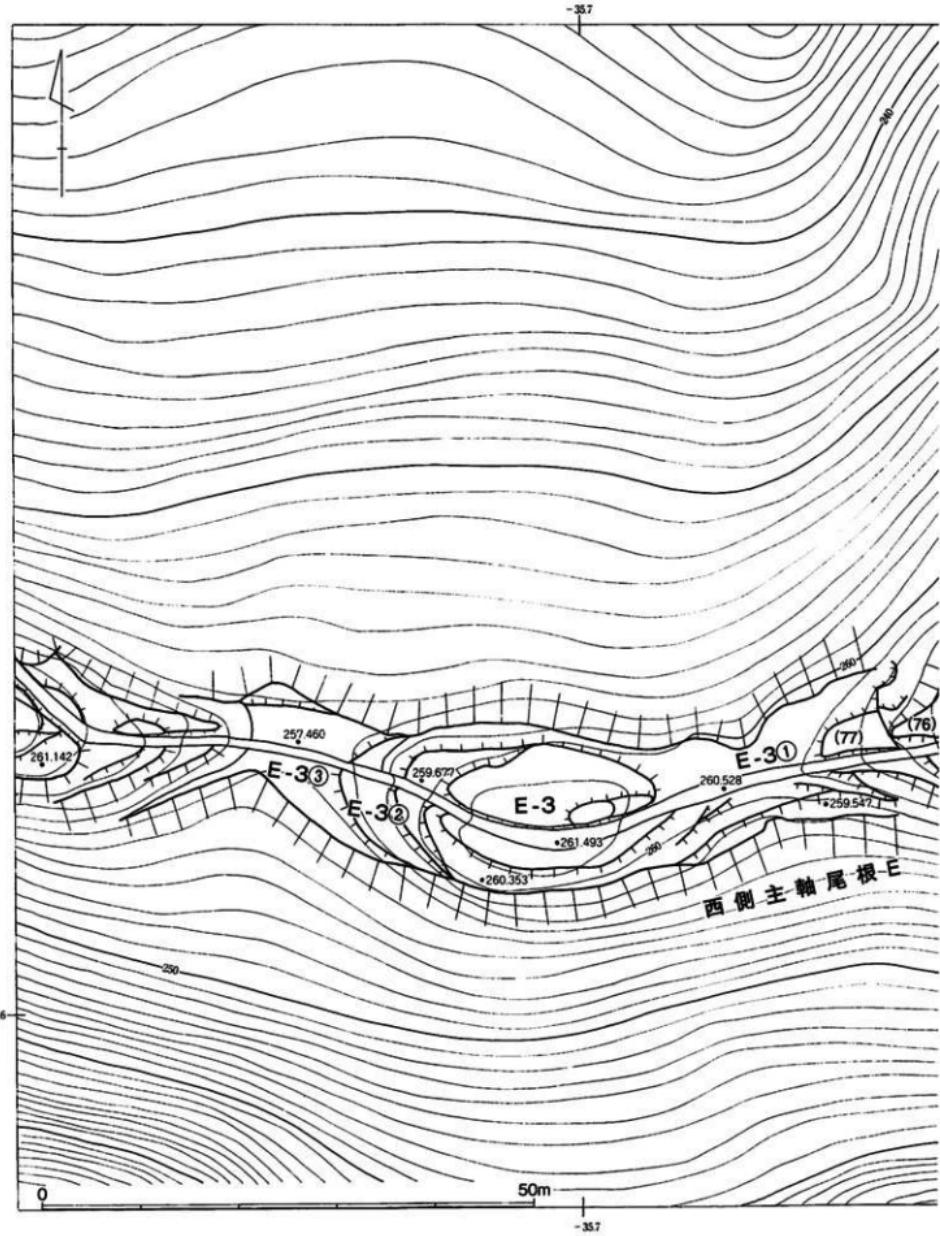
造構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)
小段(78)	9.5	4.0	243.0
小段(79)	9.0	2.0~1.5	245.0
小段(80)	5.0	3.0	239.6
小段(81)	4.0	2.5	234.6

第39表 小山E造構計測表

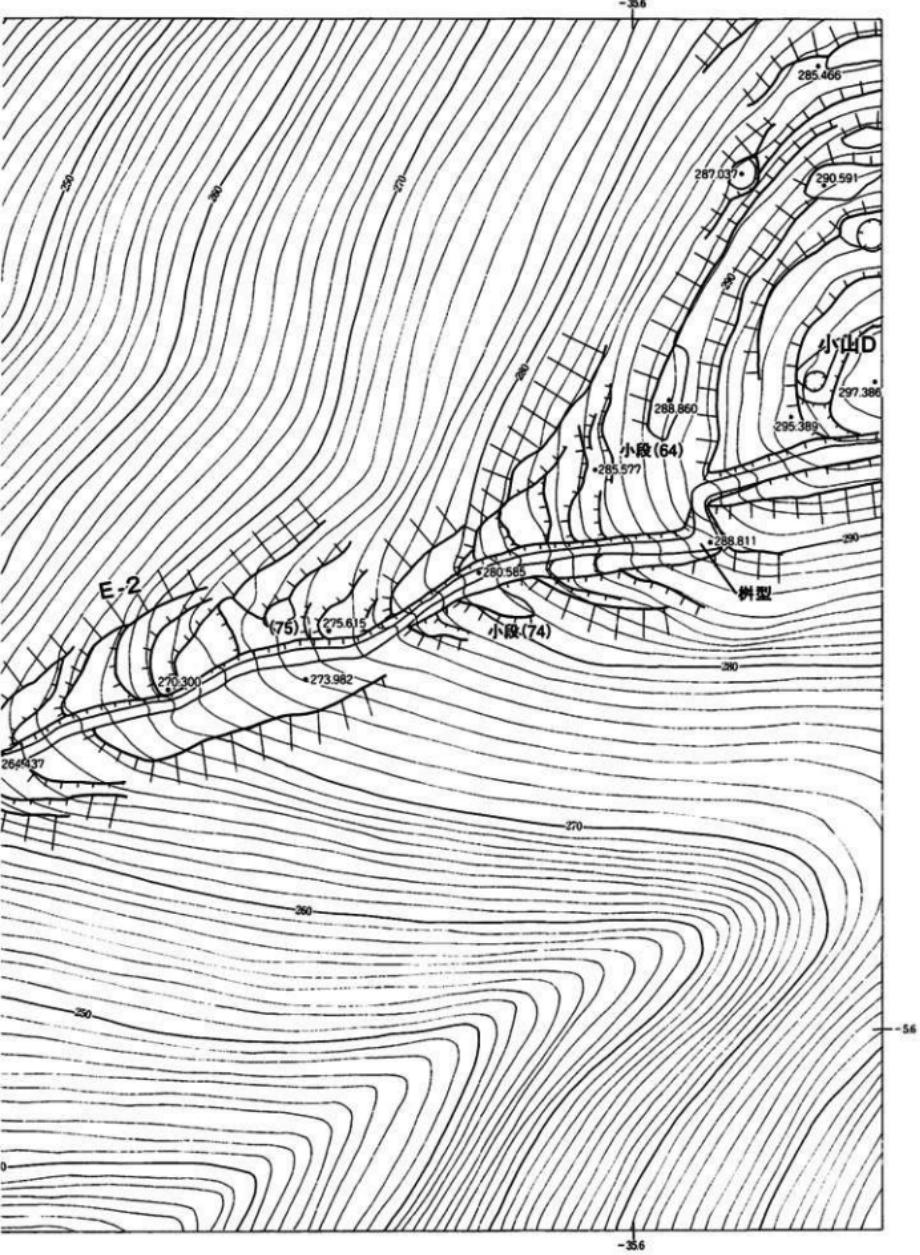


第22図 全体造構図 5



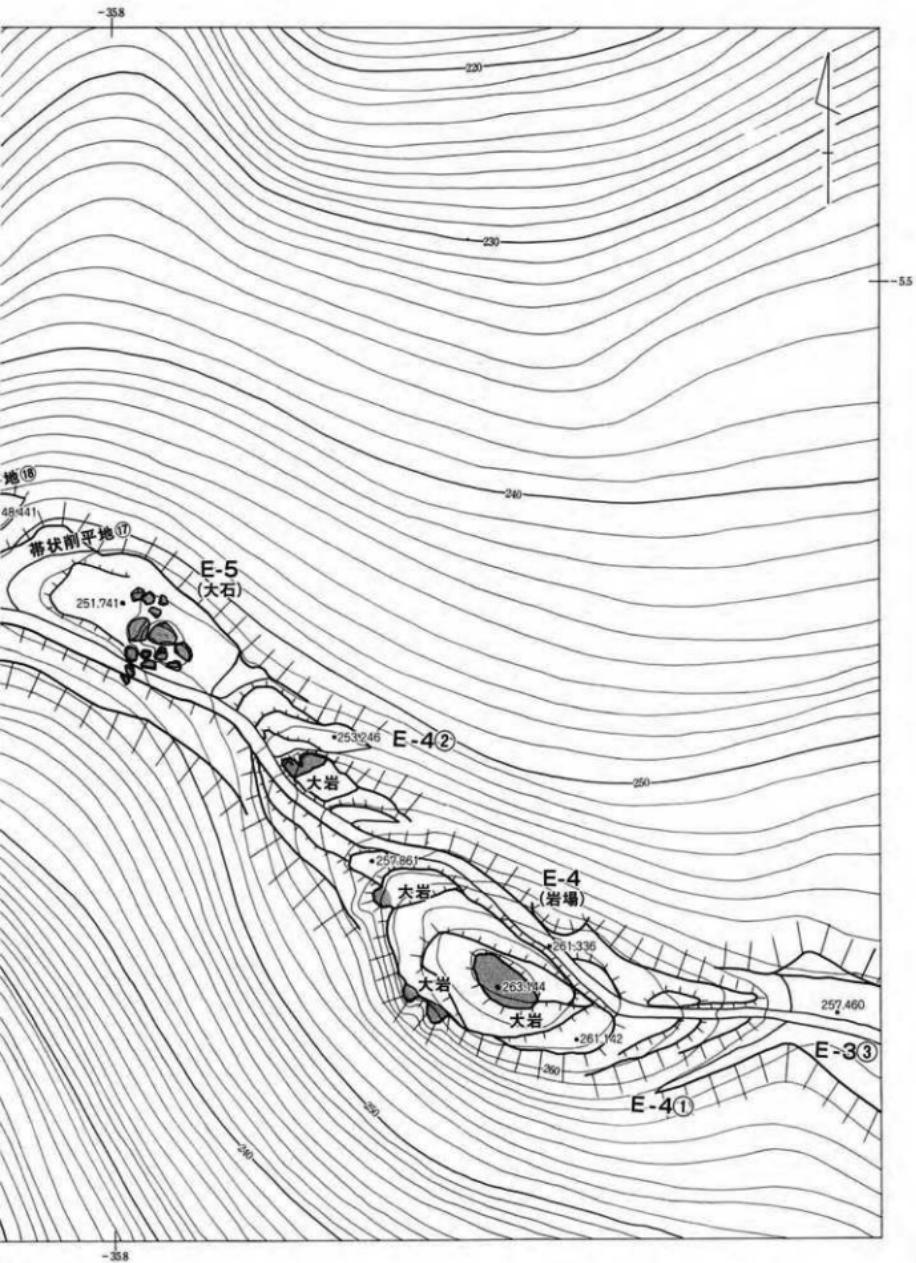


第23図 測量図⑫





第24図 測量図① (E-1)



第17節 東側派生尾根F

〔東側派生尾根FとV郭との間〕

通路から西側には、帯状削平地跡・小段（82）～（84）・小広場（そ）がある。小平場（そ）の北西側から、堀切6-3の小段（19）へ至る小道が通じている。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）	備考
帯状削平地跡	15.0	2.0～1.5	316	枝道とも思われるが、途中で消滅する。
小段（82）	4.5	2.0	313.9	—
小段（83）	7.0	3.0～1.5	311.1	—
小段（84）	6.0	2.5	307.5	—
小平場（そ）	20.0	6.0（最大）	311～310	小道に開闢した小平場と思われる。

第40表 V郭とF-1間の造構計測表

〔F-1〕

標高306～301m、南主軸尾根からの分岐点にある。尾根の上面域は、最大の長さ6m、幅35m、中心になる平地ではなく、全体的に、北側からの緩斜面である。東端は、9m幅に括れる。東寄りには大穴があり、「五郎者池」と呼ばれている。通路から西側には、小平場（た）・（ち）ある。これから、東側へ派生尾根が伸びており、F-2～5に分けられる。尾根筋の下位に、堀切12があり、底部は、蜻浦集落からの登城道になっている。尾根筋の端部は、小山Fで、格好の物見の場である。北側に大谷を挟んで、城山J-3（山頂）が対峙する。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）	備考
大穴 （五郎者池）	上場4.0 下場2.5	上場4.0 下場1.5	303.0	馬に水を飲ませた池。
小平場（た）	15.0	12.0	304.0	西端に、直径3.0mの穴。
小平場（ち）	19.5	9.0	302.0～301.0	東縁に尾根の分岐点。

第41表 F-1造構計測表

〔F-2〕

長さ51.0m、幅9.0m、標高300.0～289.0mで、尾根の真中を枝道が通り、尾根筋に小平場（つ）、北斜面に小段（85）・（86）がある。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）	備考
小平場（つ）	10.0	6.5	288.0	地形の変化点に造成されている。
小段（85）	13.0	3.5～2.0	299.5	—
小段（86）	8.5	3.5	295.1	—

第42表 F-2造構計測表

〔F-3〕

長さ71.0m、幅5.0m、標高287.0～272.0mで、上位に小段（87）、標高279mから下位に小平場（て）・（と）と、小段（88）がある。区画は、造成されており、上面域の全体が枝道になる。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）
小平場（て）	12.0	4.5（最大）	278.7
小平場（と）	8.5	4.0～3.0	275.0
小段（87）	7.5	3.0～1.5	287～286
小段（88）	5.5	2.0～1.0	285.0

第43表 F-3造構計測表

[F-4]

長さ60.0m、幅15.0~7.0、標高271.0~251.0mで、尾根筋の南縁下を枝道が通る。尾根筋は急斜面で、上位に限って、小平場（な）・（に）と、小段（89）がある。端下に堀切12がある。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）
小平場（な）	8.0	7.0（最大）	271.4~270
小平場（に）	7.5	5.5~2.5	268.6
小段（89）	6.0	2.5	270.4

第44表 F-4 造構計測表

[堀切12]

長さ15.0m、上場幅2.5~4.5m、底部幅1.5~1.0m、標高250.0~245.0mで、堀切12は、通路から北下にあり、南下は確認できない。東西両肩部に小段（90）・（91）がある。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）
小段（90）	5.5	3.0~1.5	247.0~245.0
小段（91）	6.0	2.5	251.0

第45表 小段計測表

[F-5]

長さ31.0m、幅4.0m、標高251.0~263.3mで、急傾斜の尾根が、一直線に上がっている。

[小山F]

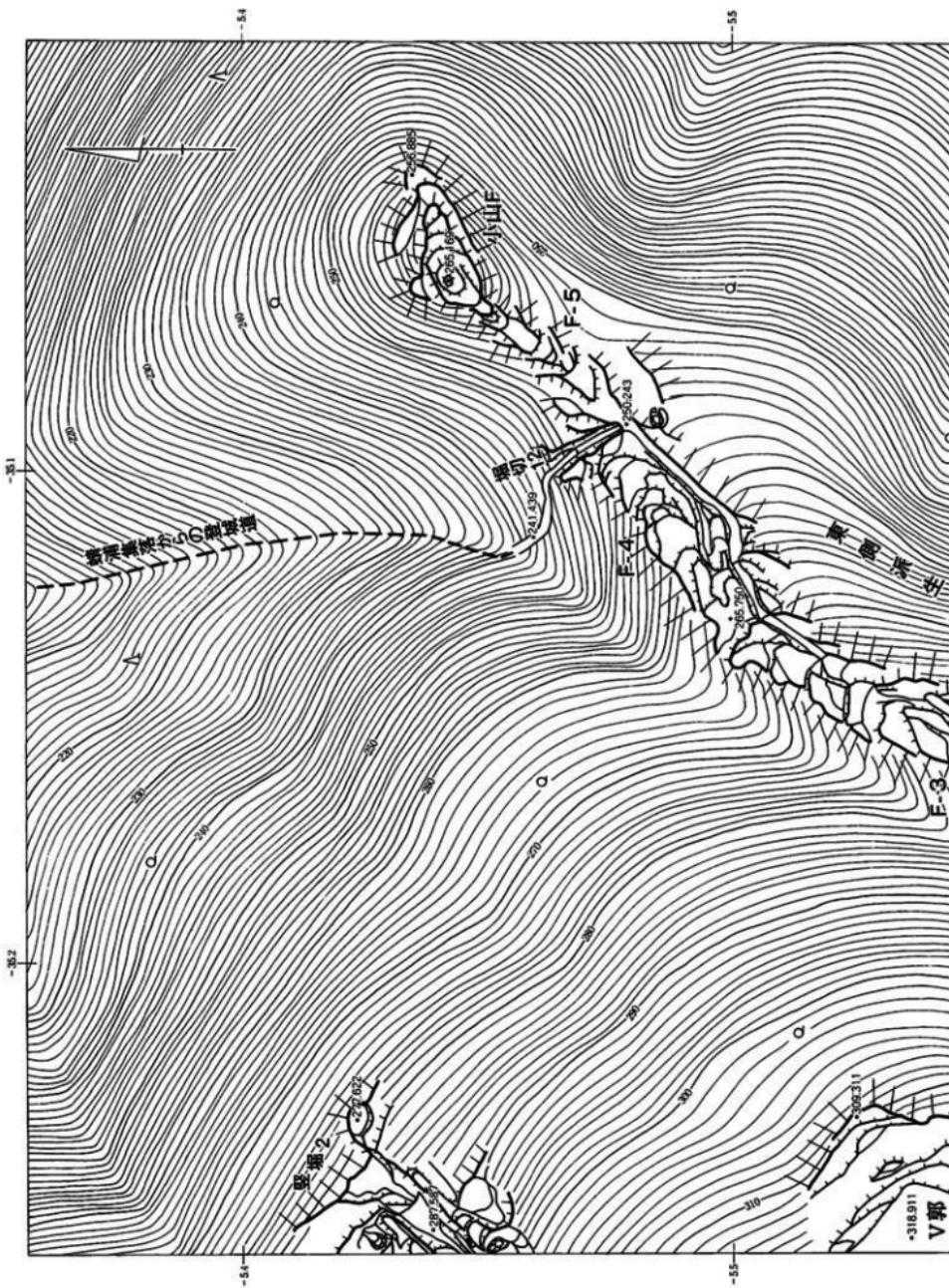
長さ7.0m、幅4.5mで、平地の中心部に、標高265.2mの高まり（1.5m範囲）がある。尾根筋に小段（92）、北斜面に小段（93）（94）がある。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）	備考
小段（92）	6.0	4.5	261.0	—
小段（93）	4.5	2.5	262.0	非常に形が整っており、城山を意識した小段と思われる。
小段（94）	12.0	2.5~1.0	259.0	—

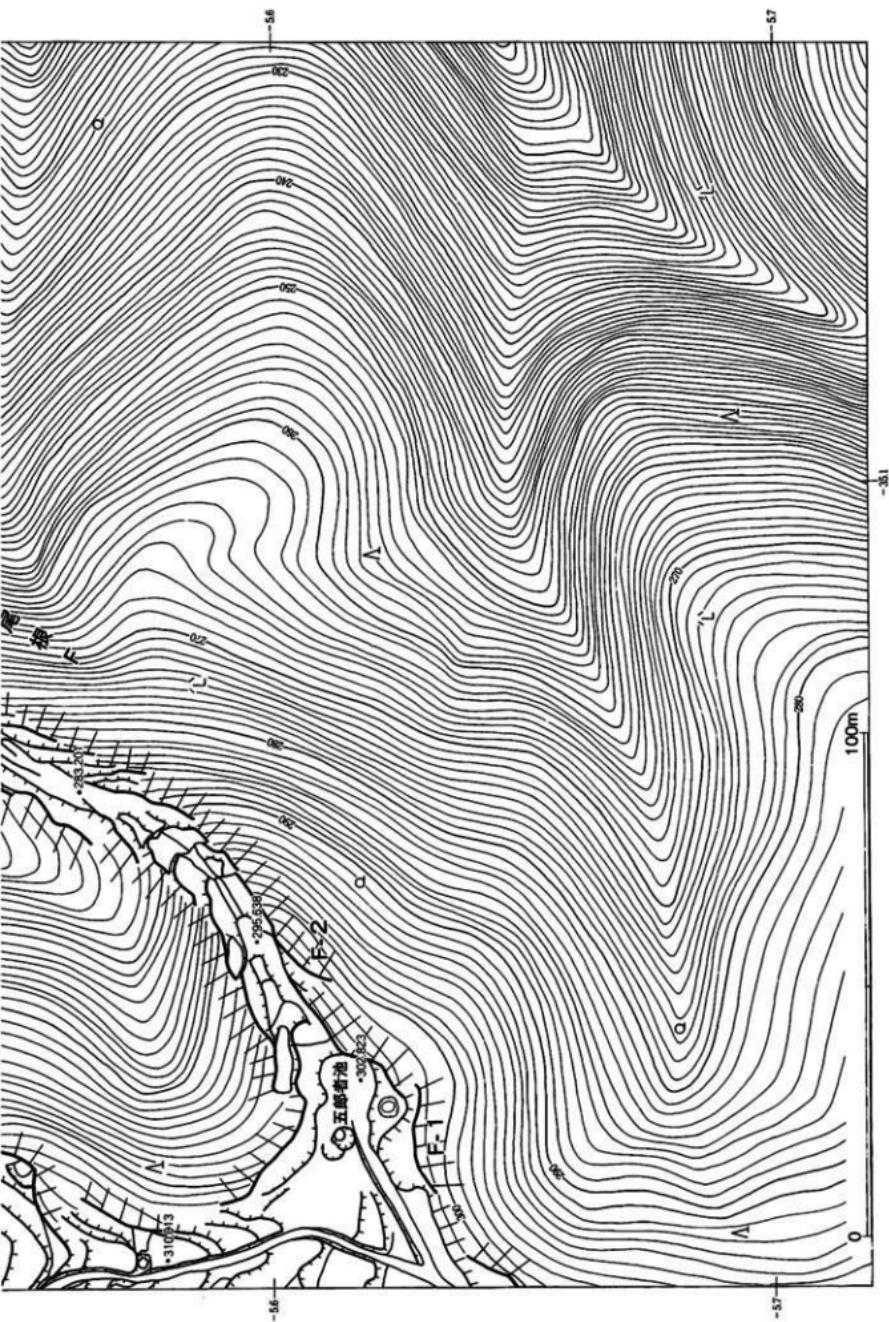
第46表 小山F造構計測表

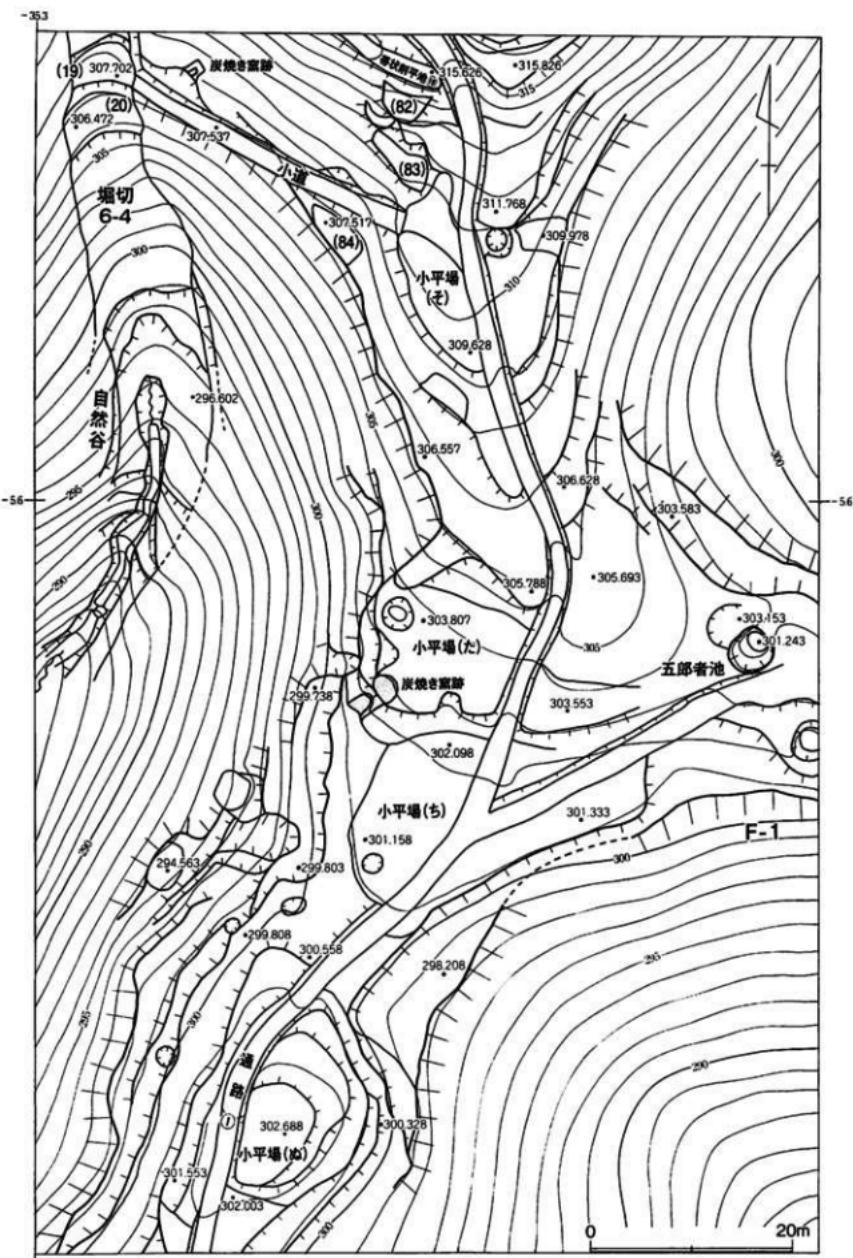


東側派生尾根 F-2 (西→東)

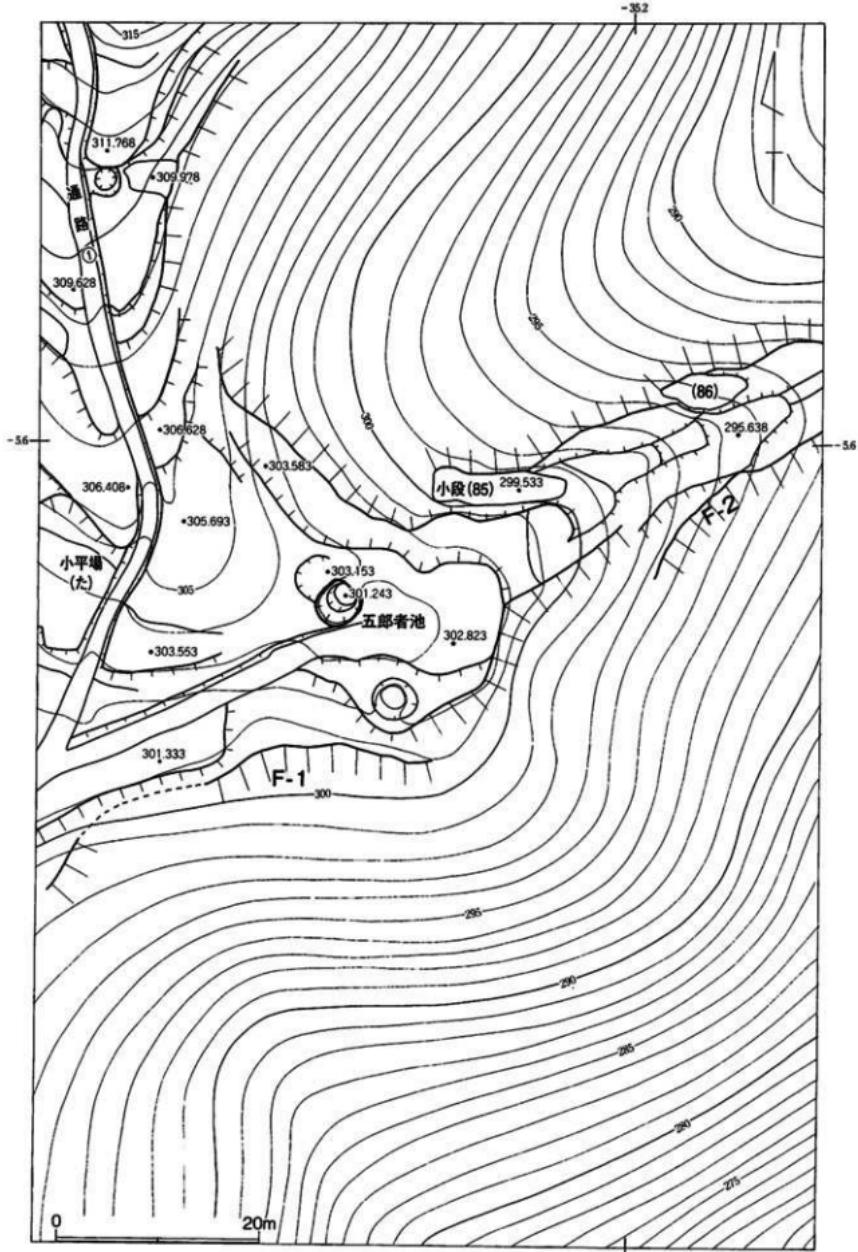


第25圖 全体地圖圖6 (東側深生尾模F)

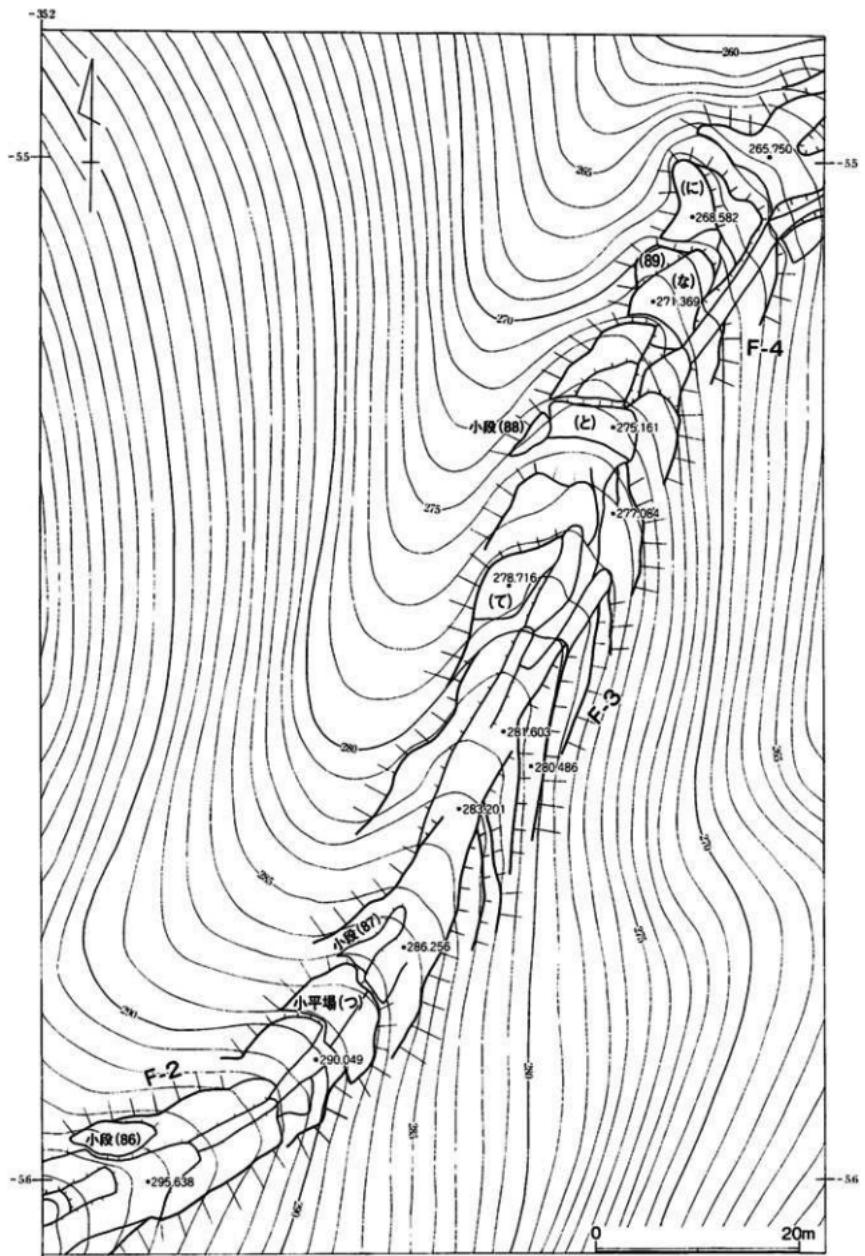




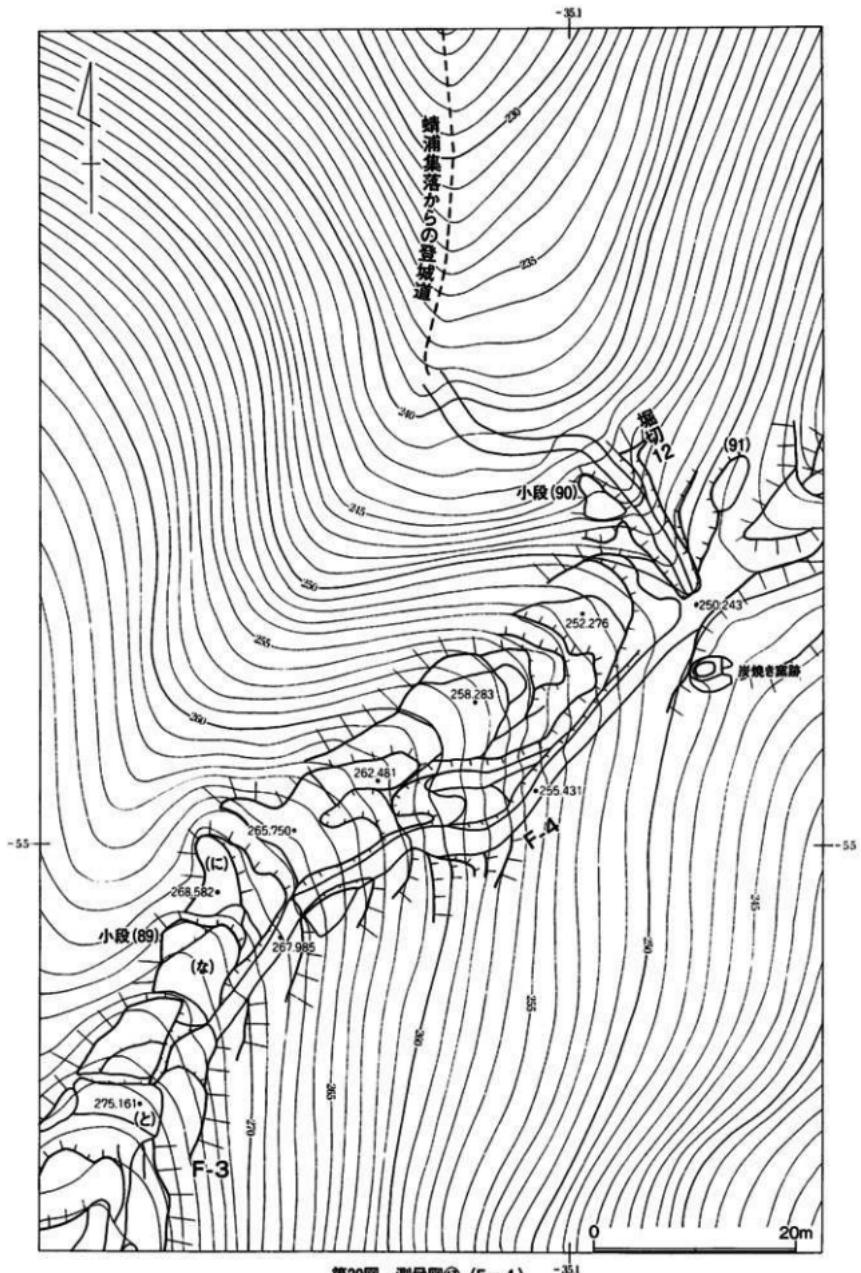
第26図 測量図⑭ (V郭~F-1の尾根)



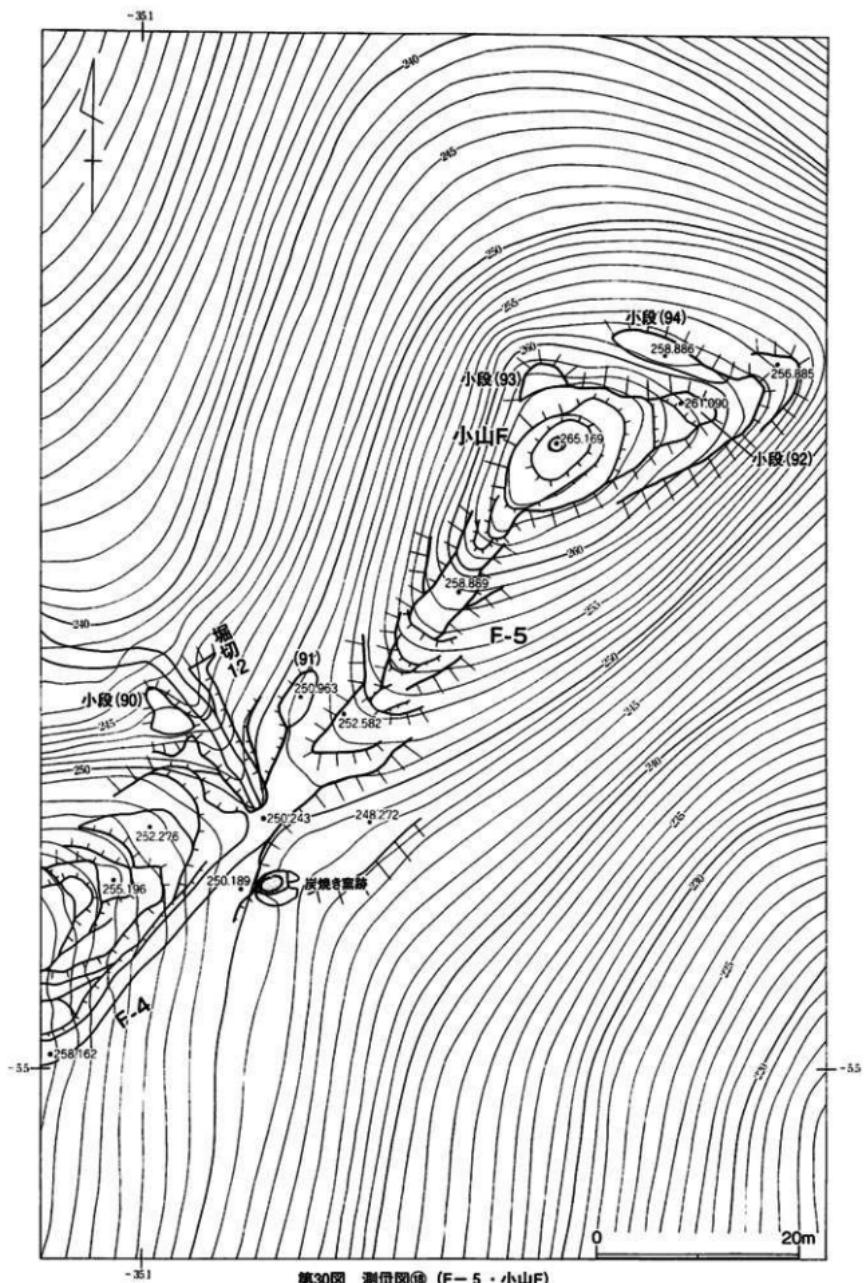
第27図 測量図⑮ (F-1・2)



第28図 測量図⑯ (F-2 ~ 4)



第29圖 測量圖⑯ (F- 4)



第30図 測量図⑩ (F-5・小山F)

第18節 南側主軸尾根G

東側派生尾根の分岐点から、南側の林道まで延びる尾根道である。長さ192m、標高は分岐点で302m、林道との交差点で301m、G-1～3に分かれ、南端に小山Gがある。途中に、堀切などの防禦施設はない。

道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
G-1	24.0	18.0	301.0	南北両側を標高301.0mに挟まれた小鞍部である。本來は、堀切個所であるが、それらしきものは見当たらない。
G-2	57.0	30~20	302.7	微高地の小平場(ぬ)・(ね)がある。
G-3	23.0	6.0~3.5	302.0	—
小平場(ぬ)	10.5	7.0~3.0	302.7	同心円状の区画が、北側と東側に広がる。幅は北側で5.5m、東側で1.5m、北側を標高302mの等高線が巡る
小平場(ね)	17.5	4.0(最大)	302.0	—

第47表 G-1～3道構計測表

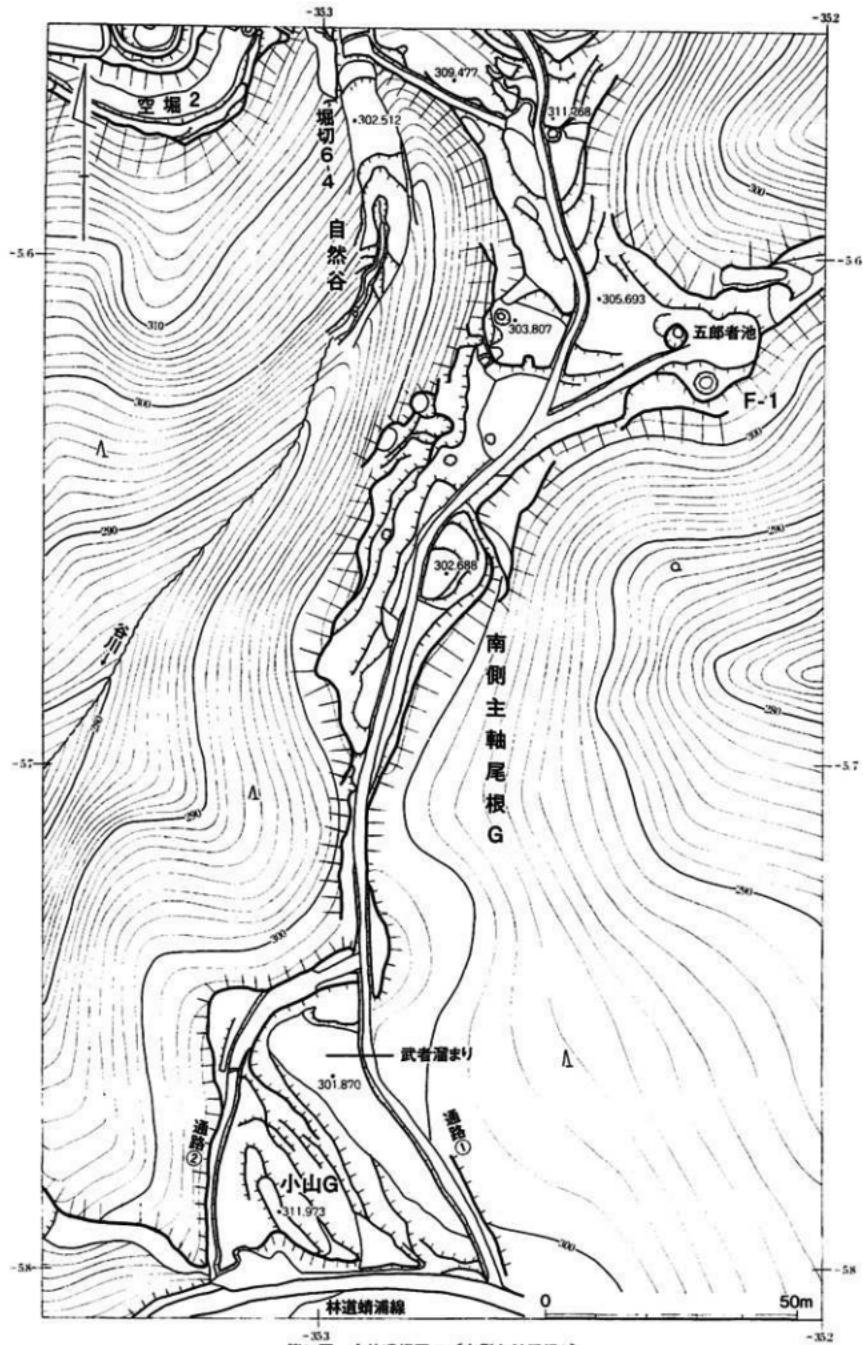
道構名	長さ(m)	幅(m)	標高(m)	備考
小山G	52.0	23.0~52.0	312.2	上面城に土塁地形のG-①と、北へ傾斜するG-②がある。 東下は、帯状地形のG-③になっている。 両地形の東西側に通路①・②があり、南下に、林道筋浦線が通る。
小山G-①	19.0	3.0~1.5	312.2~311.6	長さ10mの範囲に、標高312mの等高線が巡る。
小山G-②	21.0	17.0	311.0~305.3	G-①の北端からの長さ。先端で、すばまる。
小山G-③	61.0	18.0~13.0	303.0~301.0	北上の通路との高低差は、1.8m。この凹区画は、武者溜まりと推定される。
通路①	69.0	2.5~2.0	301.0~303.0	V郭を経て、Ⅲ郭に至る通路である。
通路②	69.0	1.5~4.0	306.0~304.0	北側で、幅広くなっている。登城道としては、通路②の方が古いと思われる。
林道	—	—	303.0~307.0	小山Gの南斜面を切っている。

第48表 小山G道構計測表

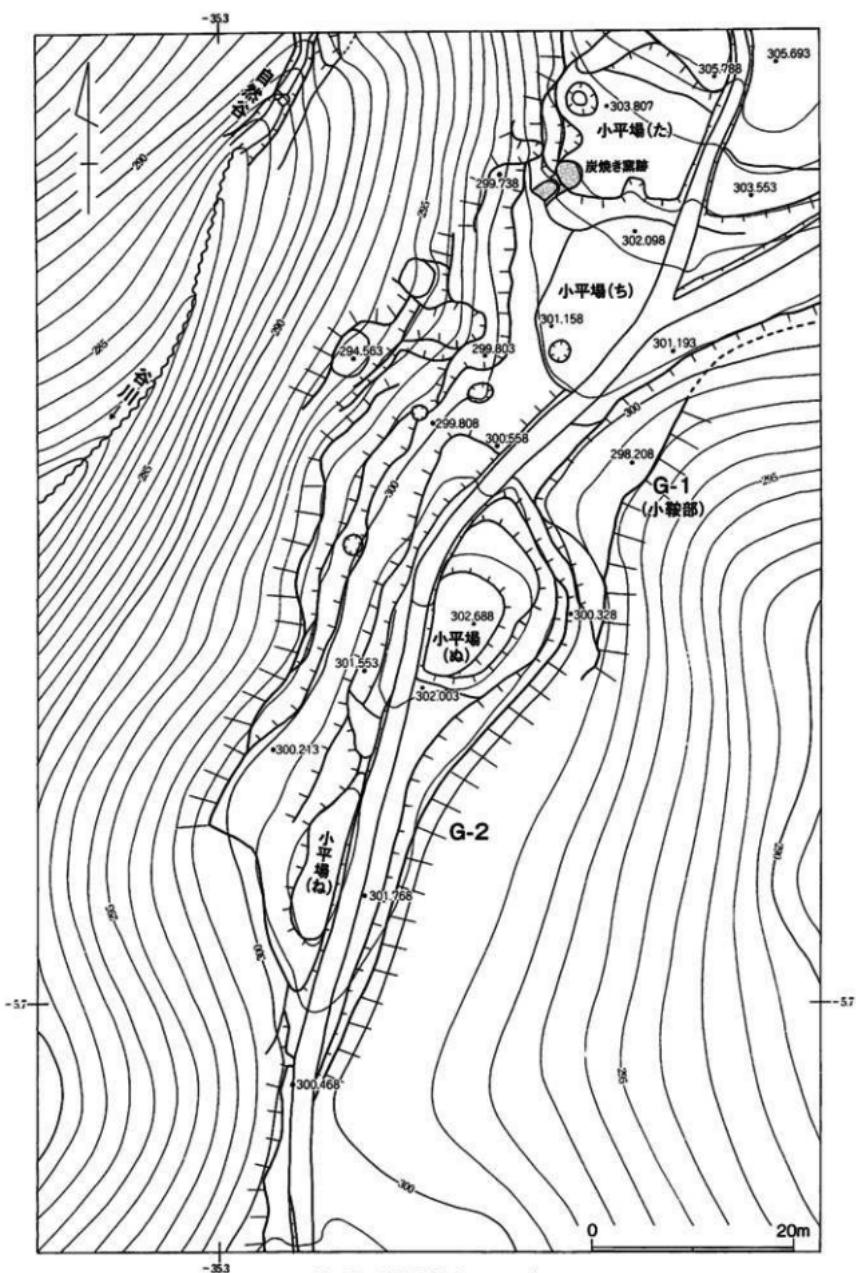
【武者溜まり】

南側主軸尾根では、唯一の防禦施設である。小山Gの東下は帶状の凹区画で、武者溜まりとして格好の場所になっている。敵方が、南側の尾根筋から城内の中心部へ攻め入ることを阻止するために置かれた施設と思われる。戦況によっては、敵方をこの区画に追い込んで、小山の上から矢を射ることも可能である。自然地形をうまく取り込んだ縄張りである。この尾根に堀切が見当たらないのは、そのためであろう。

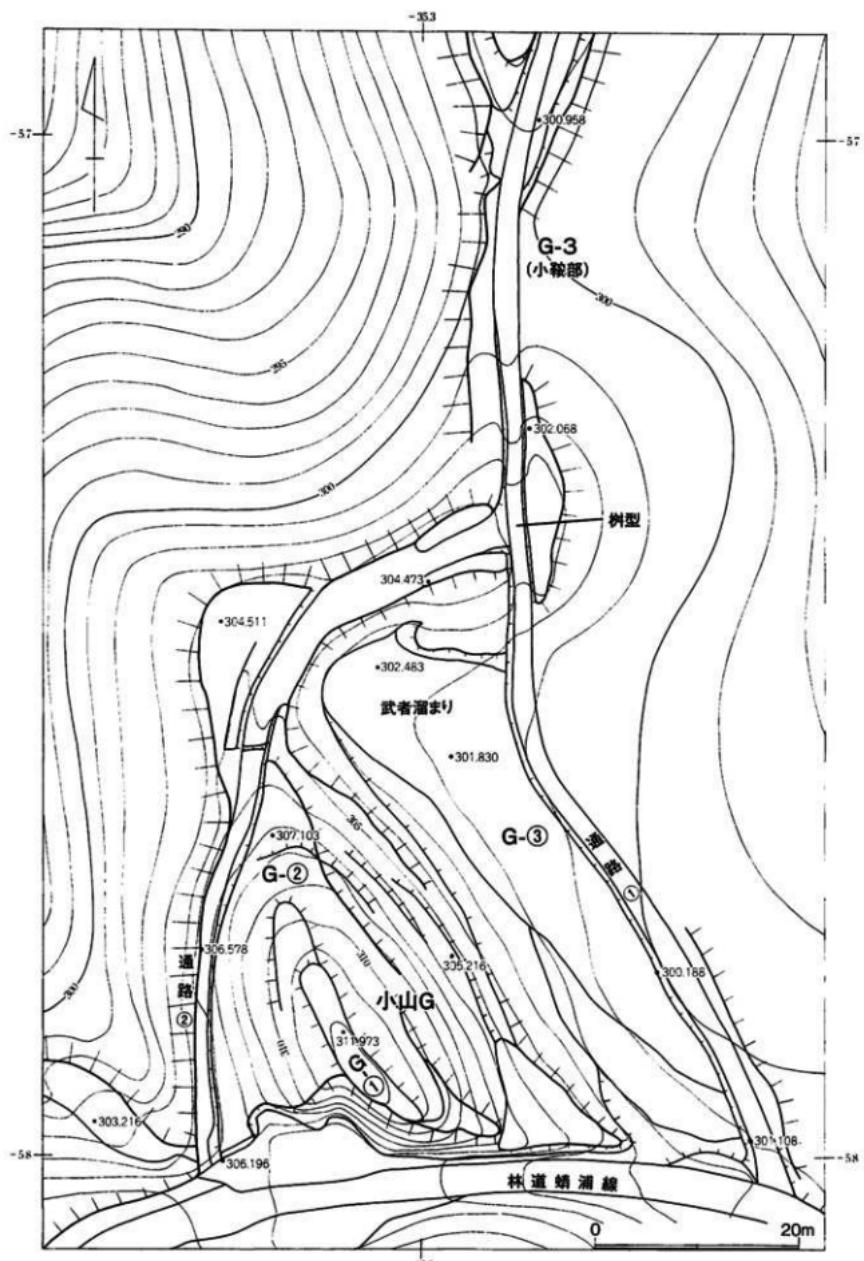
通路②と①が交差する箇所が樹型になっているのも、注意しなければならない。西側主軸尾根E-2の登城道に見られる屈曲箇所と同じ造りである。



第31図 全体造構図7【南側主軸尾根G】



第32図 測量図⑩ (G-1 ~ 3)



第33図 測量図◎ (小山G: 武者溜まり)

第19節 小山H

通路③は、小山Gの南西下から西側の小山Hへ向かう小道である。以前に、重機で押し広げられている。小山Hは、最上位のH-①から西側へ尾根が下り、小平場（の）と小段（95）～（97）がある。さらに、北斜面に小平場（は）・（ひ）と小段（98）・（99）が残る。南側は、小谷が南西側へ下っている。この谷にも南縁上に重機が入っている。北縁上に小段（100）、谷底に小段（101）・（102）がある。

縦張り的には、小山H-①の真北に、小山Bがある。さらに、西南西側に小山C-7の小山があり、いずれも谷を挟んでいる。各小山とは、小山Bで140m、小山C-7で120m、小山Gで180m離れている。さらに真南に、これも谷を挟んで小山Iがある。城跡の縦張りの南限にあたり、今回の調査は、ここまでとした。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）	備考
通路③	170	8.0～2.0	305.0～282.0	—
小山H-①	6.5	2.5	292.9	狭い平場で、造成の度合は、低い。
小平場（の）	15.0	3.5	290.0～289.0	三日月形をなす。
小平場（は）	15.0	4.0	282.0	—
小平場（ひ）	14.0	4.0	280.9	—

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）
小段（95）	4.5	2.5	276.9
小段（96）	4.5	3.0	269.4
小段（97）	3.0	2.0	268.0
小段（98）	7.0	3.0	277.0
小段（99）	8.0	3.0	261.0
小段（100）	7.0	4.0	276.7
小段（101）	8.0	3.0	278.0
小段（102）	5.0	2.5	279.0

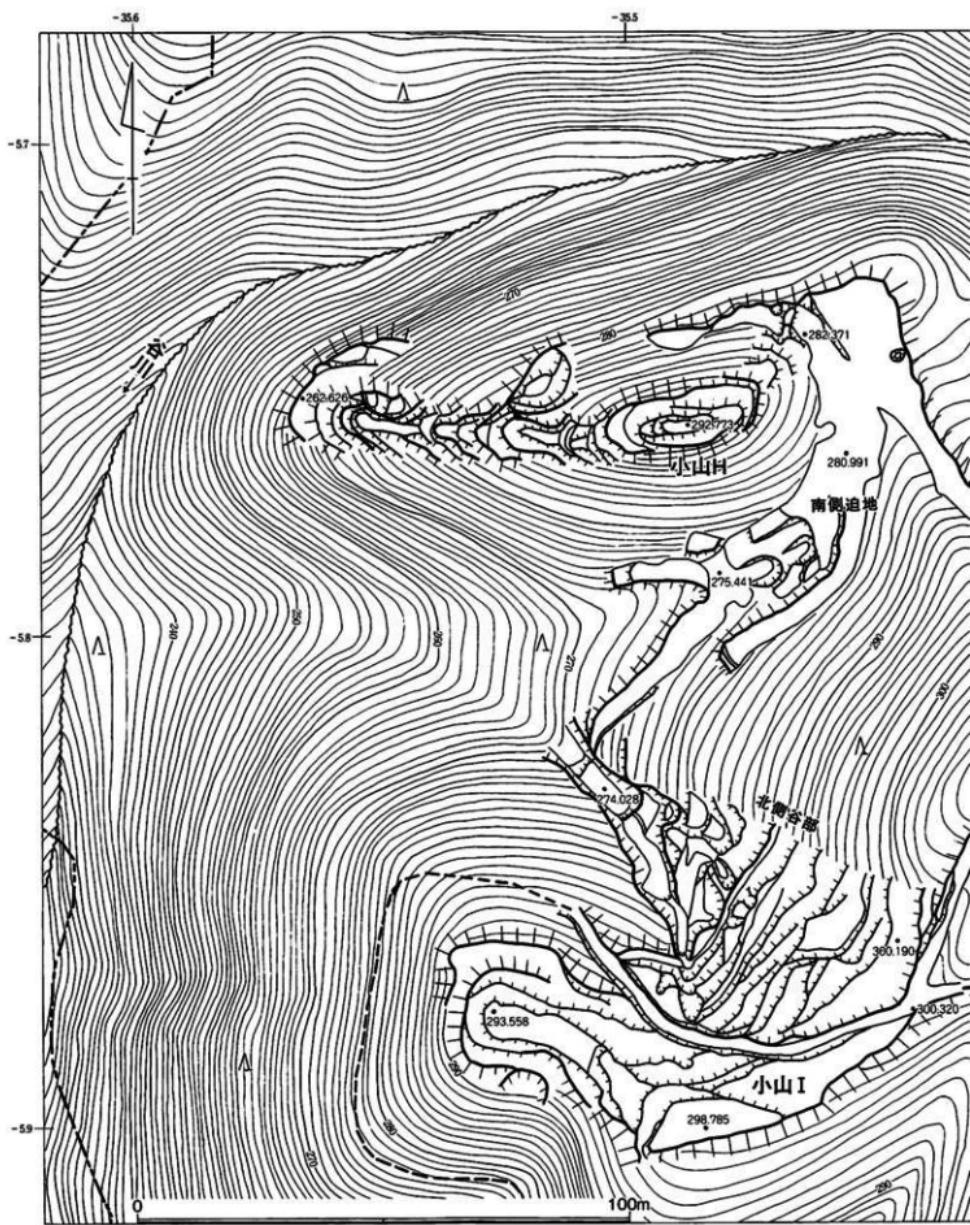
第49表 小山H造構計測表

第20節 小山I

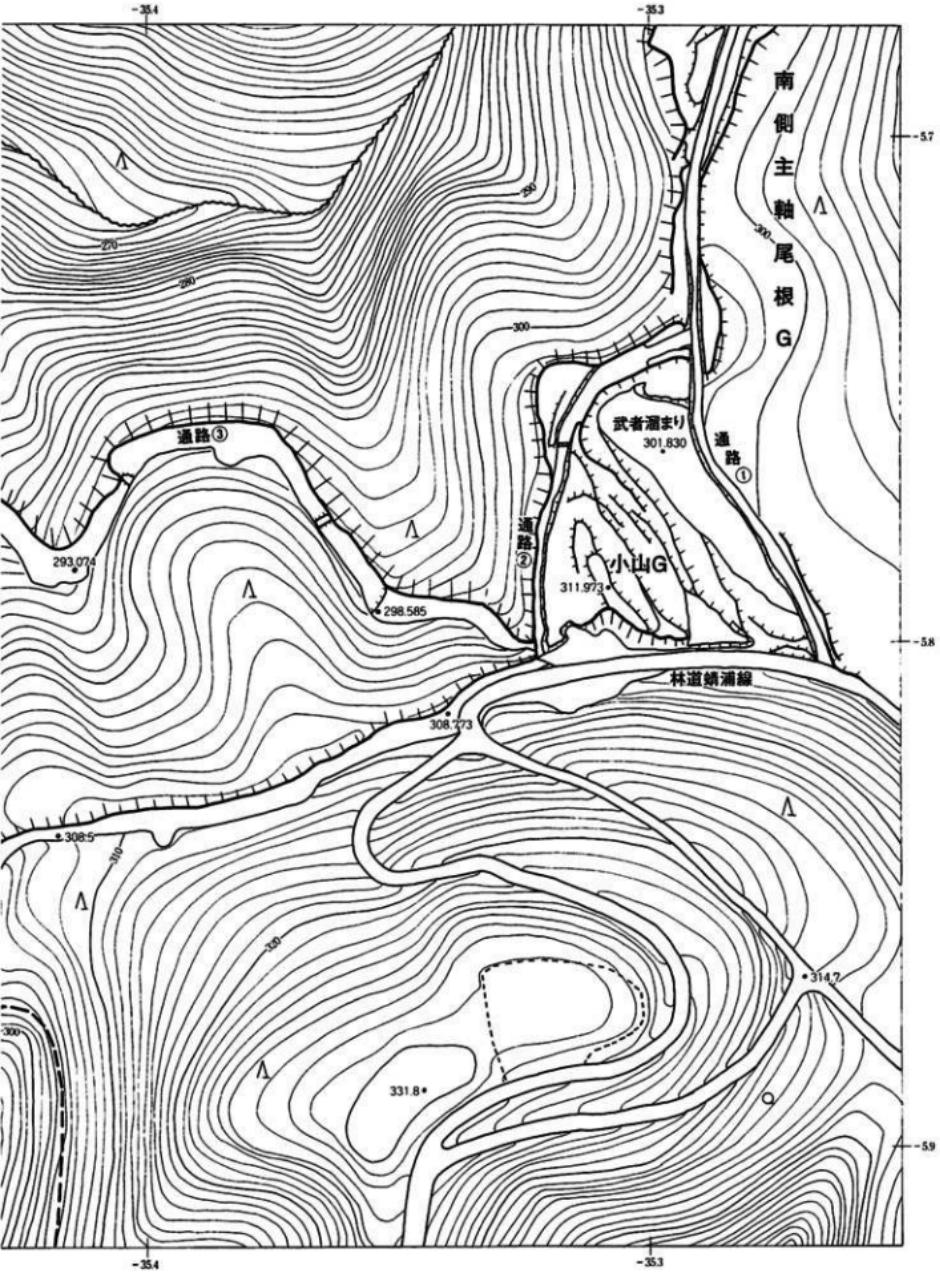
上面坡は、最上位の小山I-①と、北西の尾根筋にI-②に分かれる。北側の谷部には、帯状削平地③と小段（103）～（105）がある。

造構名	長さ（m）	幅（m）	標高（m）	備考
小山I-①	28.0	9.0（最大）	298.8	三角形状の平場。縁部を、標高298.5mの等高線が巡る。 東側の平場（長さ44.0m、最大幅12.0m、標高299.0m）は、後世の造成地と思われる。
小山I-②	24.0	6.5～5.5	294.4～293.5	形の整った平場である。
帯状削平地③	16.0	1.5	290.0	—
小段（103）	4.0	4.0	283.0	—
小段（104）	4.0	6.5	282.0～281.0	—
小段（105）	4.0	5.5～4.5	277.0	—

第50表 小山I造構計測表

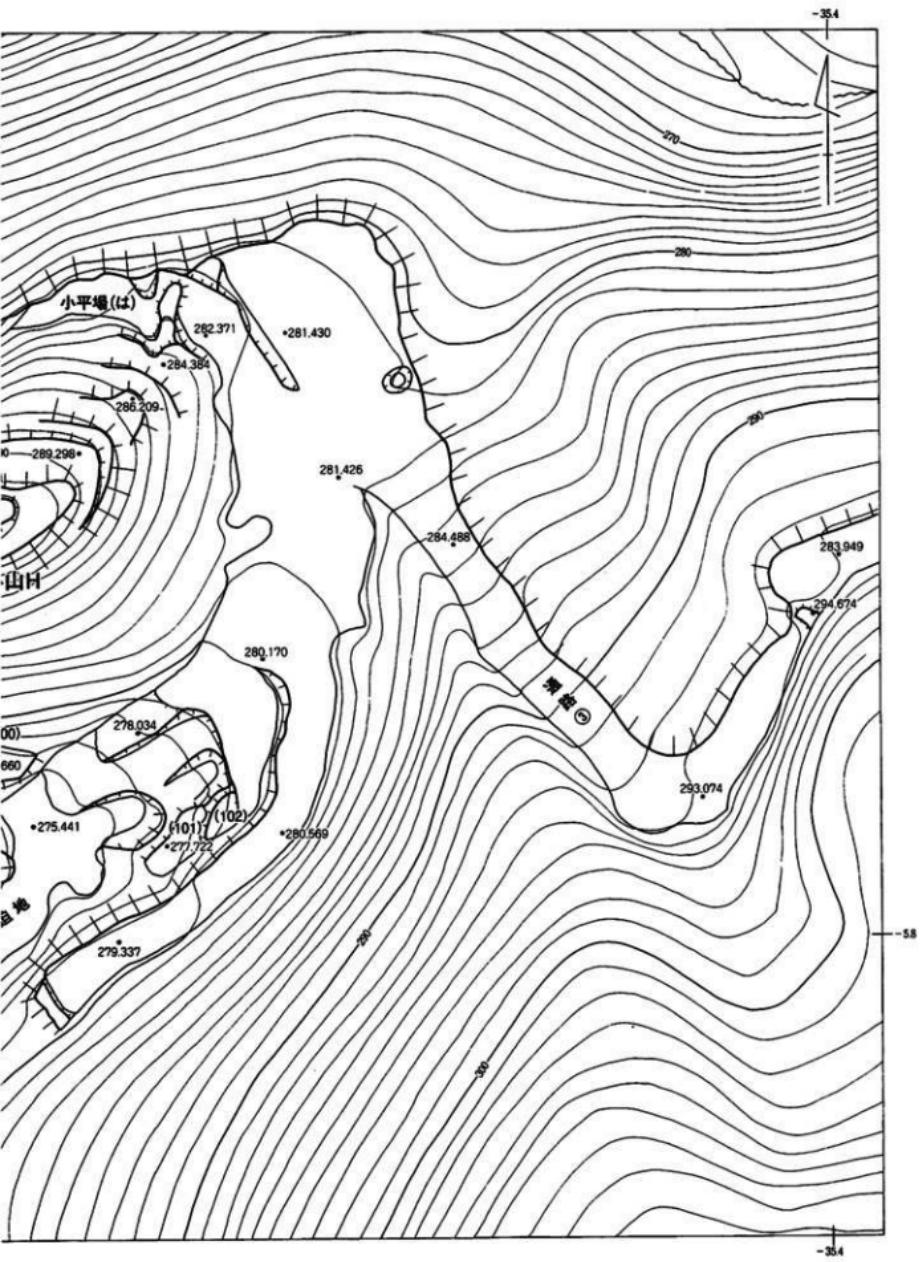


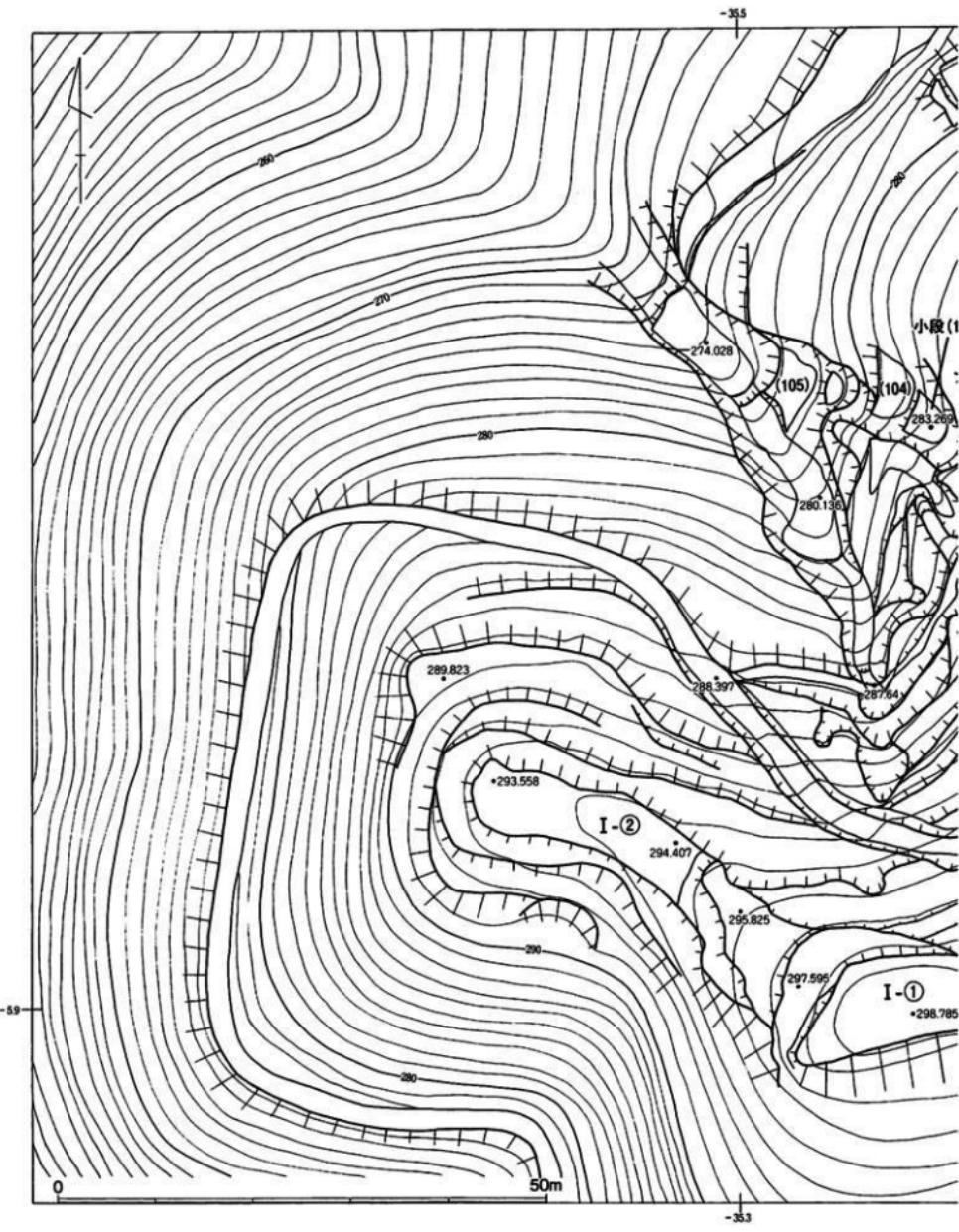
第34図 全体造構図 8



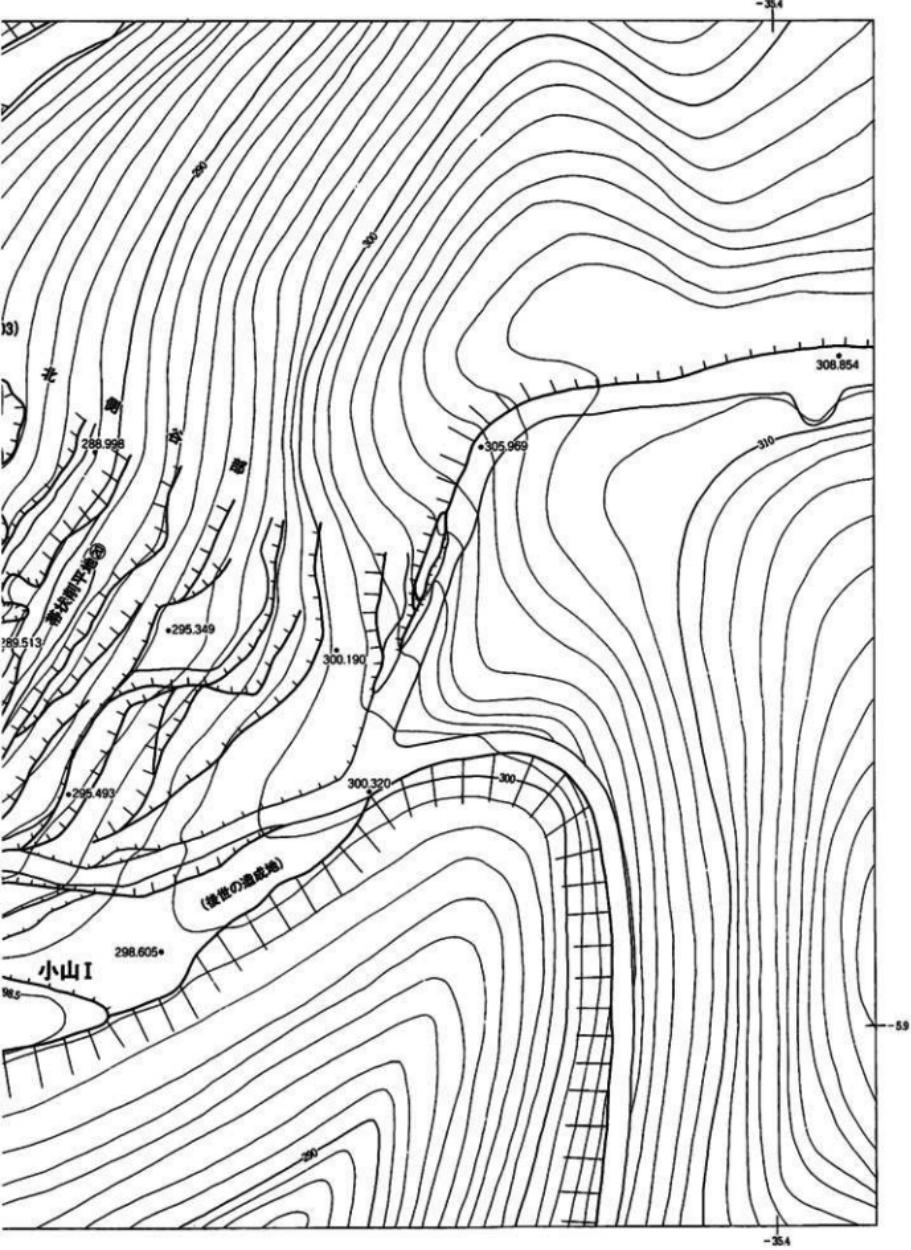


第35図 測量図② (小山)





第36図 測量図②（小山）



第21節 城山J

【ルート】

城山の起点となる谷部へは、日平城跡の山頂からの山腹を、そのまま下る方法がある。山腹に小道が残っている。しかし、下りはともかく、堀路の登りが大変なので、調査に際して別のルートを探した。新たに作道したのは、V郭から堀切6-2を北に進んで、堅堀2の最上位を横切り、そこから山腹を斜めに下って、谷部を目指すルートである。測量図面に記したので、見学の際に利用することも可能である。

【谷部】

小段（106）は、この作道と、日平城跡の山頂からの下り道が交差する箇所にある。長さ8.5m、最大幅4m（西端ですほまる）、標高266m、日平城跡の本体側から、谷部を監視するための小段かもしれない。谷底は、長さ10m、主軸方位N22°E、幅5m、標高261m、堀切のような地形になっている。

【J-1】

尾根が立ち上がる北端には、ステップ状の小段（107）がある。舌状形の平地で、長さ5.5m、最大幅9.5m、標高261.4m。

小平場（ふ）は、長さ16m、主軸方位N35°E、幅6.5m、標高267.6m、尾根の小山が造成されている。城山側から谷部を見降ろせる場所にある。この先、尾根は、標高263mまで緩傾斜の下りとなって、そこから本格的に立ち上がっている。凹地のA区は、長さ12m、主軸方位N44°E、幅4.5m、堀切の地形となる。

【J-2】

小平場（へ）は、急傾斜の尾根を登り切った所にある。長さ16.5m、幅2.5~6m、標高306.4m。小平場（ほ）は、上段の標高308.4mに造成されている。舌状形で、長さ7m、最大幅10m、いずれも造成の度合が高い。小平場（ま）は、標高310~311mの範囲で、長さ9m、最大幅5mの緩傾斜地である。小平場（へ）～（ま）の主軸方位は、ほぼ南北で、一直線に並んでいる。

小平場（ま）の上位には、わずかな高まりがある。標高312m、長さ4m、幅5.5mの範囲は、堀切13に付随する土壌rの残存部である。この地には、土壌rからの流土が堆積しているのであろう。

堀切13は、標高312mの尾根筋を切っている。中央部は、狭く掘り残され、両端が堅堀の様になっている。現況は、非常に浅く、中央の底幅1m、東側で長さ5m止まりである。西側は、はっきりしない。しかし、土壌を復原すれば、しっかりした堀切になるはずである。

堀切14は、標高317mの尾根筋を切っている。土壌sを挟んで、堀切13とは、12mの距離がある。堀切13と同じ造りで、残存状態はこちらの方が良い。中央部は、底幅2m、長さ2.5~4.5m、両端も堅堀の形状を保っている。土壌sは、高さ1mで、標高317mに積まれている。上場は、長さ1.5m、幅2.5m、下場は、長さ4m、幅3.5m。

【J-3】

城山と呼ばれる山頂は、標高329.4m、長さ18.5m、最大幅15m、造成の度合が非常に高い円形平場である。西縁直下の斜面も、端的に削り落されている。西側麓の日平集落からの眺めを意識した造成であろう。今日、周囲の樹木が視野を遮っているが、城時代は、最良の「物見の場」であったと思われる。この地に立つことで、城山が遙る日平城の北東方向の展望が、初めて可能となる。

【J-4】

小段（108）は、J-3（山頂）の北東斜面下にあり、標高321m、長さ4m、幅6.5~4.5m。堀切地形J-4①の南西側肩部にあたる。標高321m、尾根の凹地部分で、長さ13m、主軸方位N54°E、幅7~5m。J-4②は標高321~323mの範囲にあり、全長42m、幅10~7m、主軸方位N23°E。緩傾斜の帯状平地で、

形状から、他城跡のように「馬攻場」とも呼べる区画である。

小段（109）は、J-4①の西下にあり、標高316~315m、長さ16m、最大幅4.5m。城山では、斜面に造成された唯一の小段である。

J-4③は、尾根の北東端に位置する平場で、標高326.7m、長さ14m、最大幅11.5m。隅丸方形の平場であるが、造成の度合は、I郭よりも、やや低い。J-4②に続く南西斜面は、高低差4mの緩斜面になっている。

J-4③の北側直下に小段（110）・（111）がある。小段（110）は、長さ3.5m、幅1.5m、標高325m。小段（111）は、長さ7m、幅2.5m、標高324m。

[J-5]

J-4③の北東斜面下にあり、13mの高低差がある。間の法面は、急峻に削り落されている。J-5①は、舌状形をしており、下位に向かってすぼまる。山腹の横方向に、順次、粗く造成されている。端部の標高は305mで、岩場のJ-5②に繋がる。凝灰岩の高さ1mの岩場で、長さ8m、幅5~2.5m。

堀切154は、底部は幅1m、長さ1.5m。J-5②を北壁とする。北側からの高低差は0.56m。

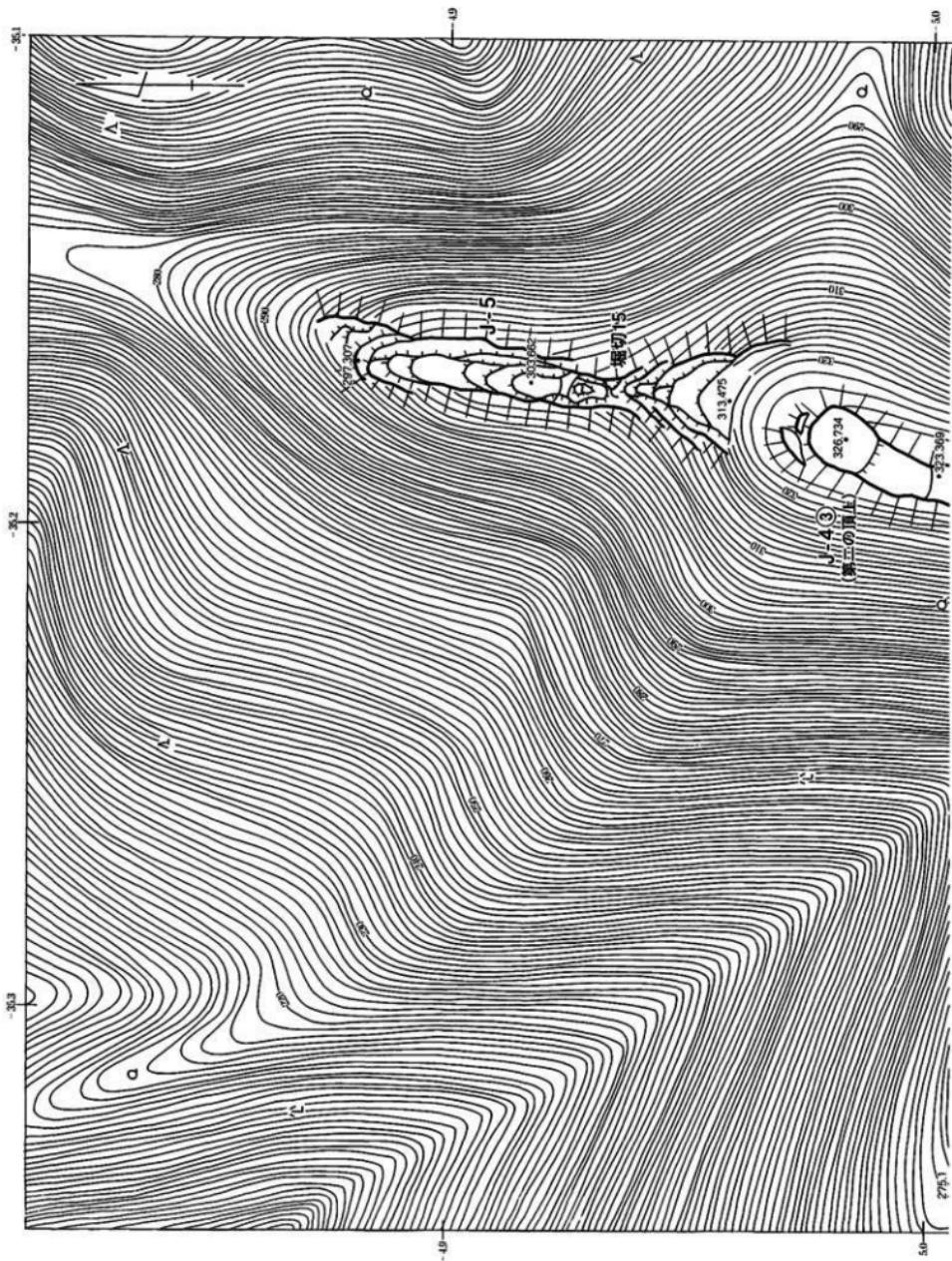
J-5③は、痩せ馬地形の尾根で、長さ40.5m、主軸方位N10°E、幅7~5.5m。尾根は、標高304~298mの範囲が、J-5①と同様に横方向へ、順次、粗く造成されている。この先は、痩せ馬地形の傾斜尾根となり、麓へ下っていく。城山の縄張りは、J-5③が北東端となる。

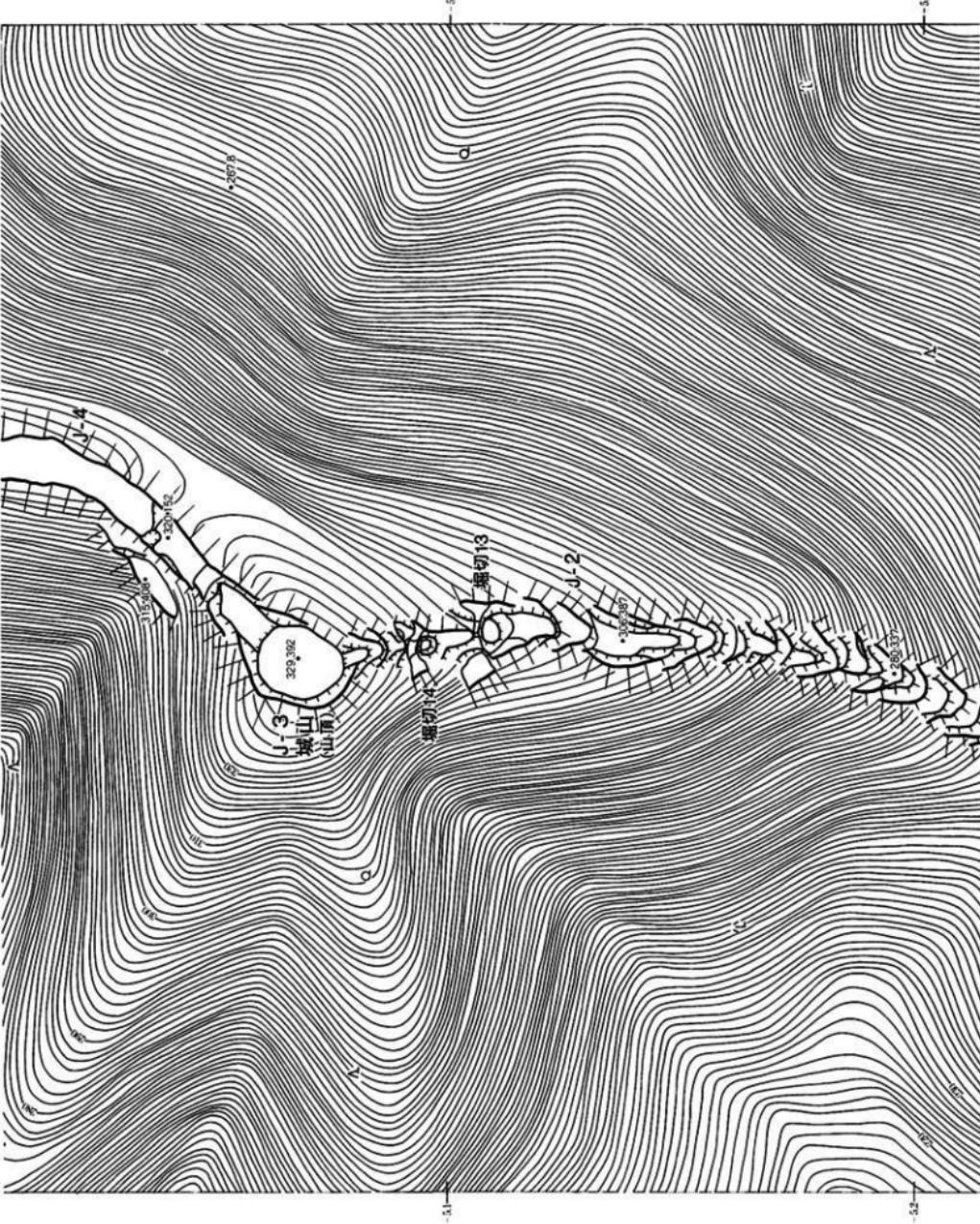


J-4①西下にある小段（109）

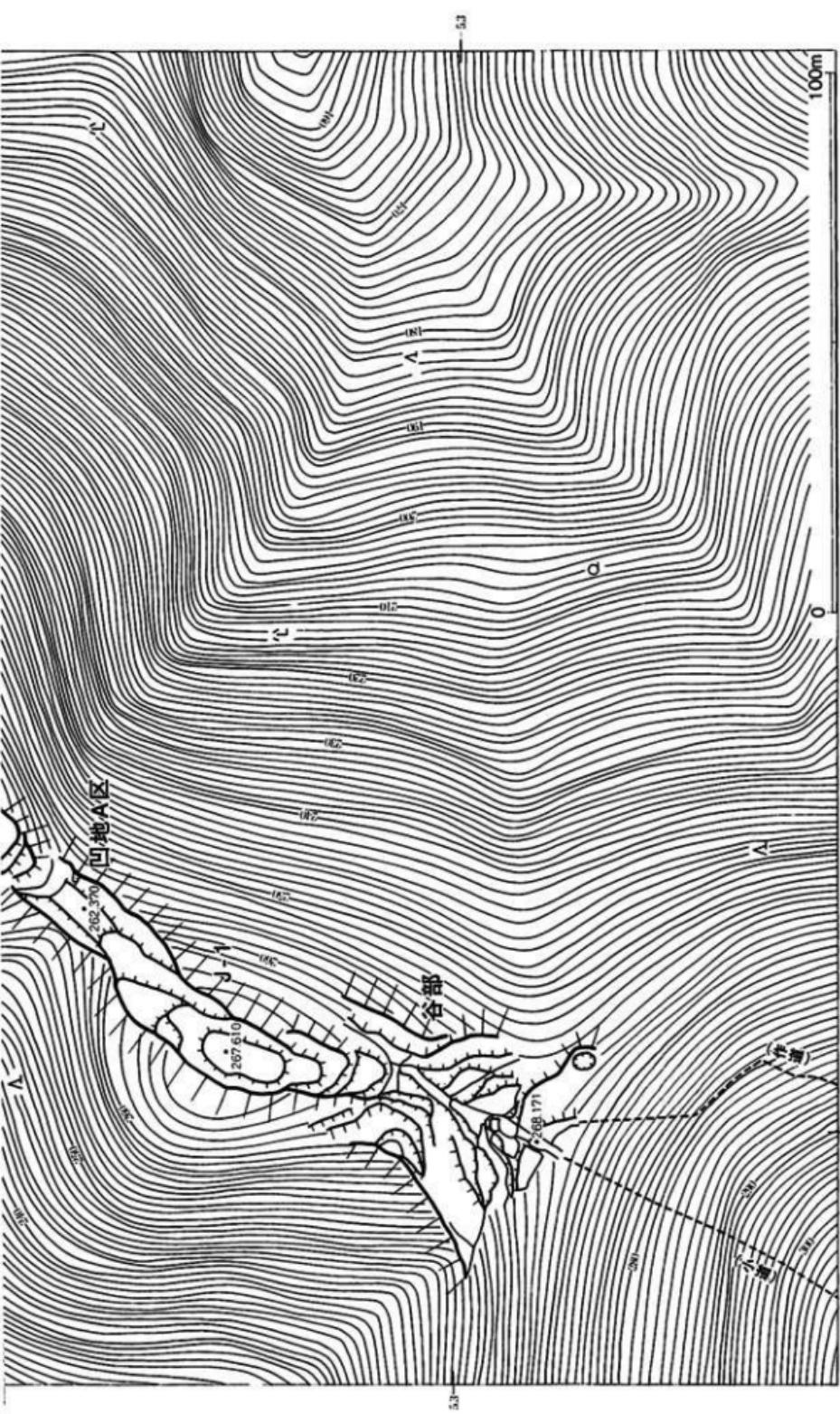


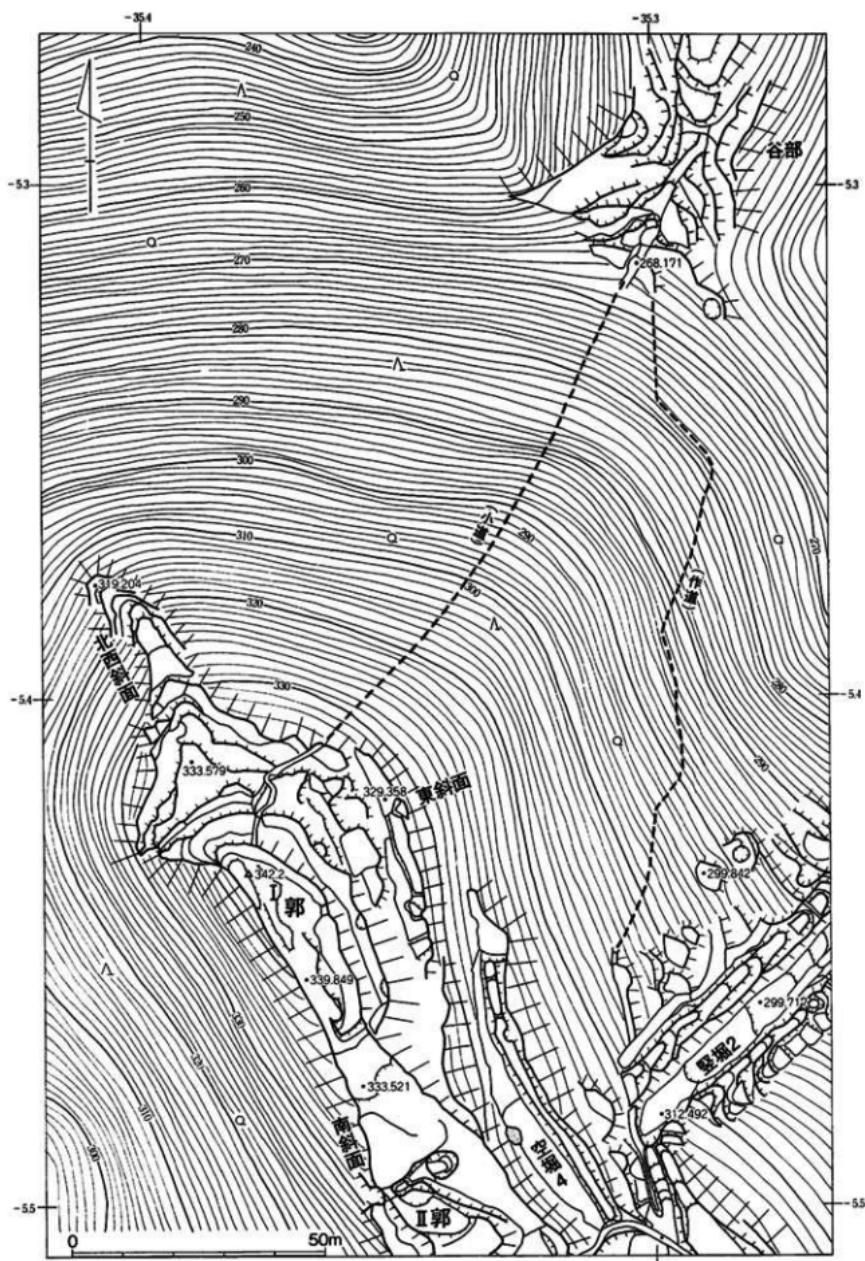
J-5 ②の岩場 (北→南)



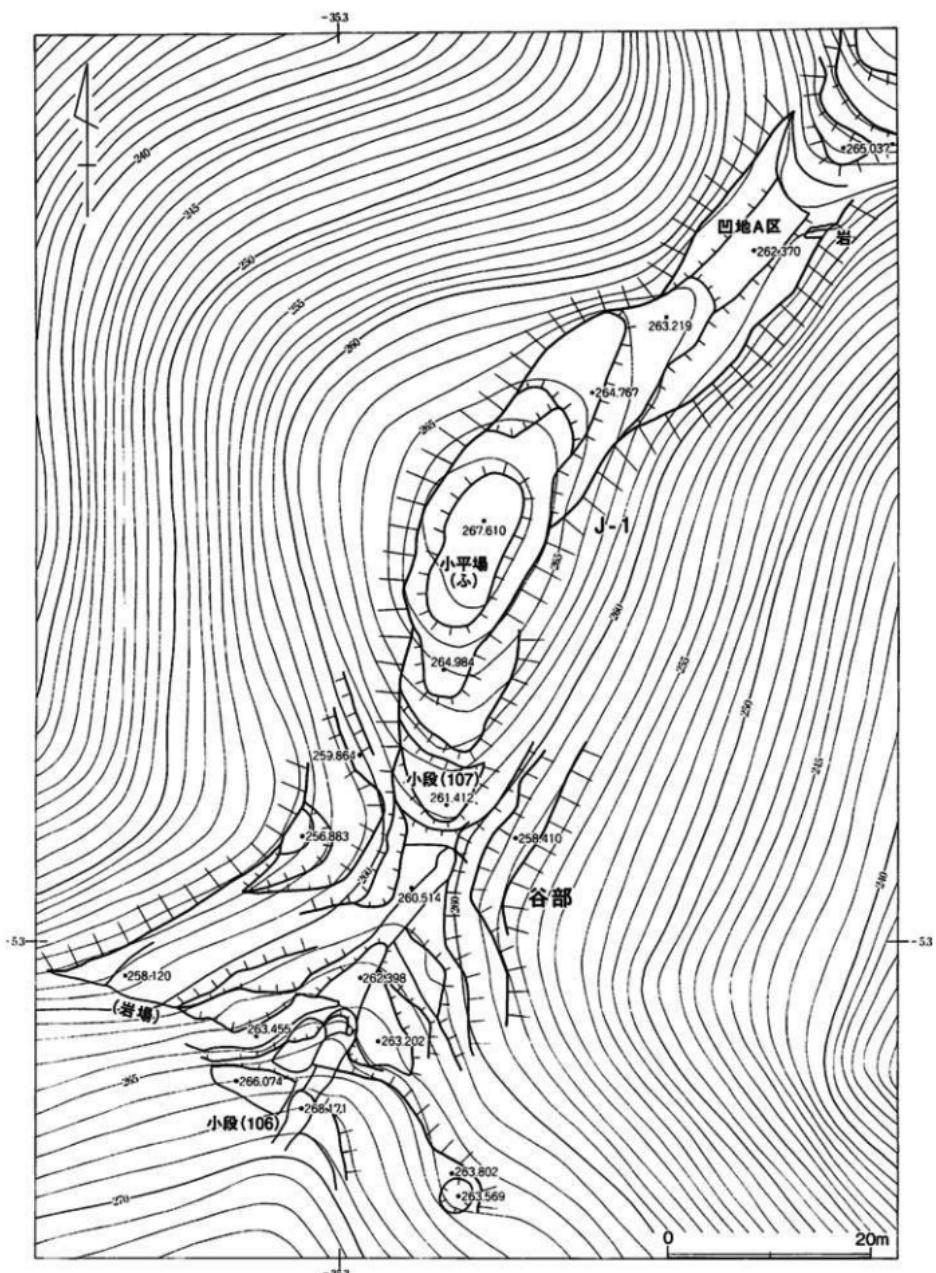


第37図 全体地盤図 9 [城山]

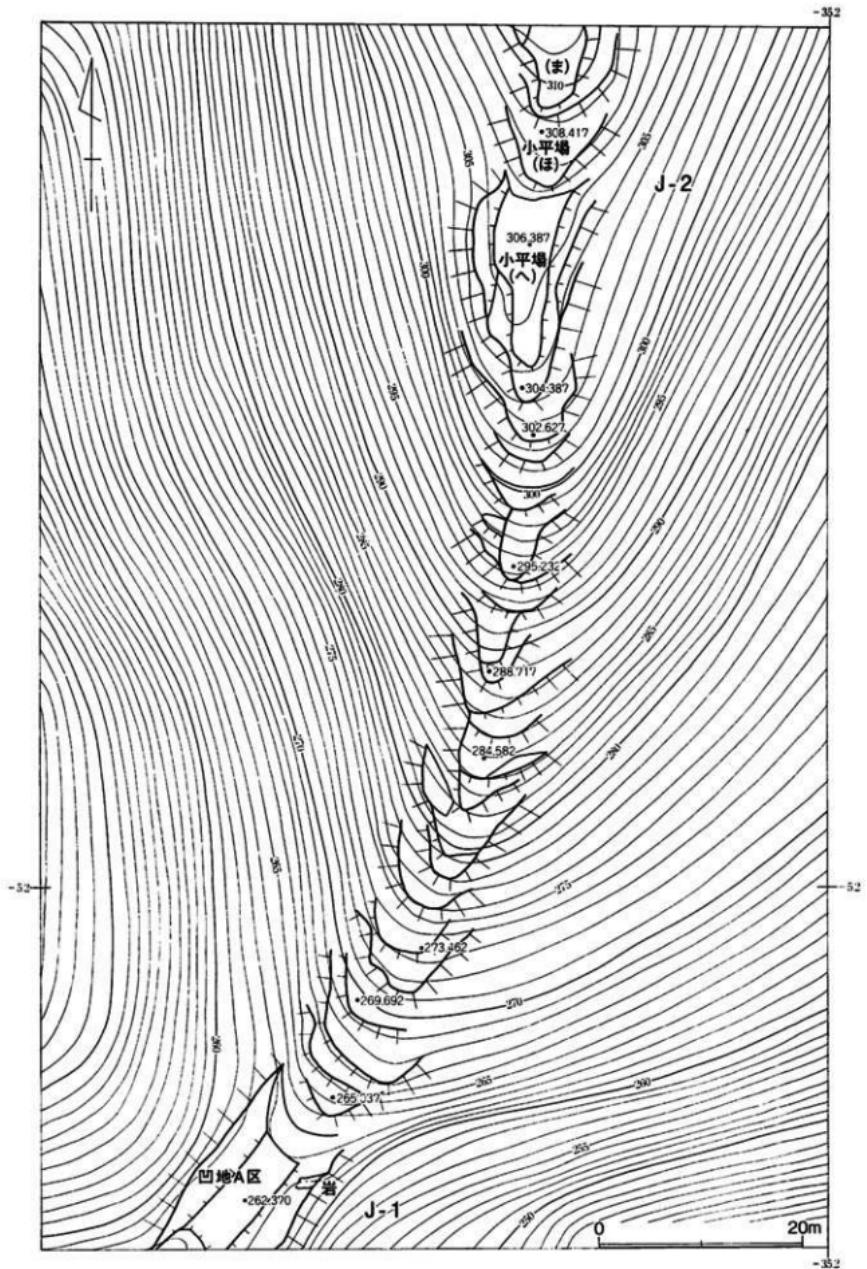




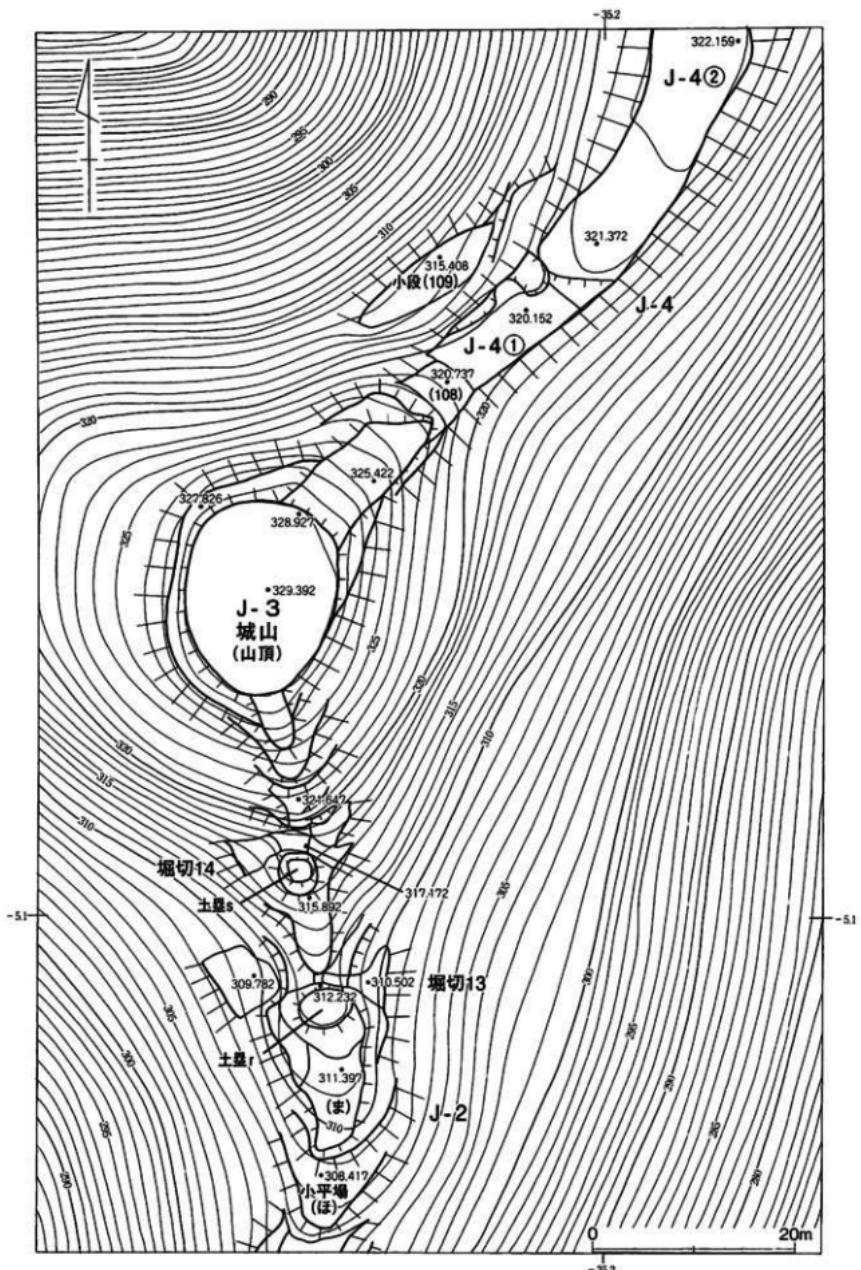
第38図 全体造構図10 [I郭・堅堀2から城山谷部へ]



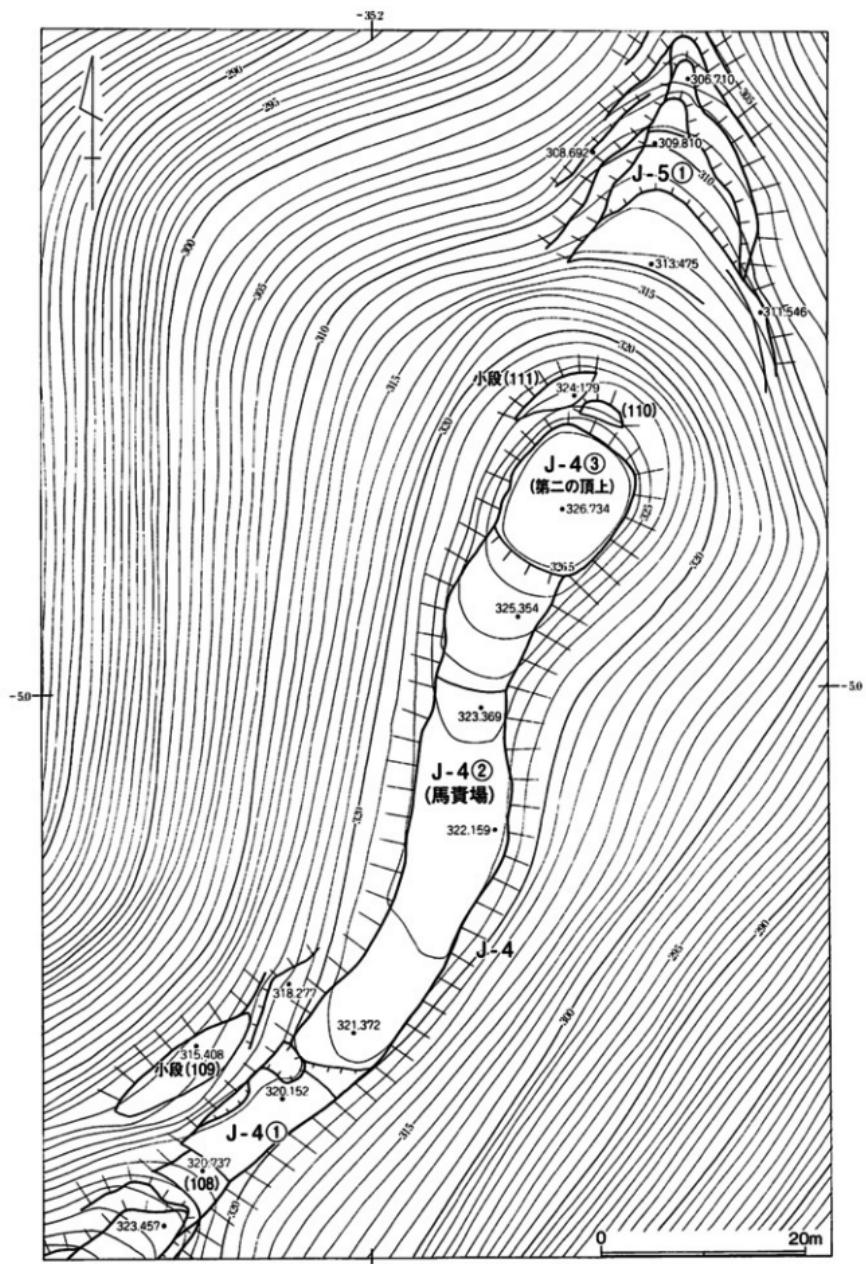
第39図 測量図② (城山谷部・J-1)



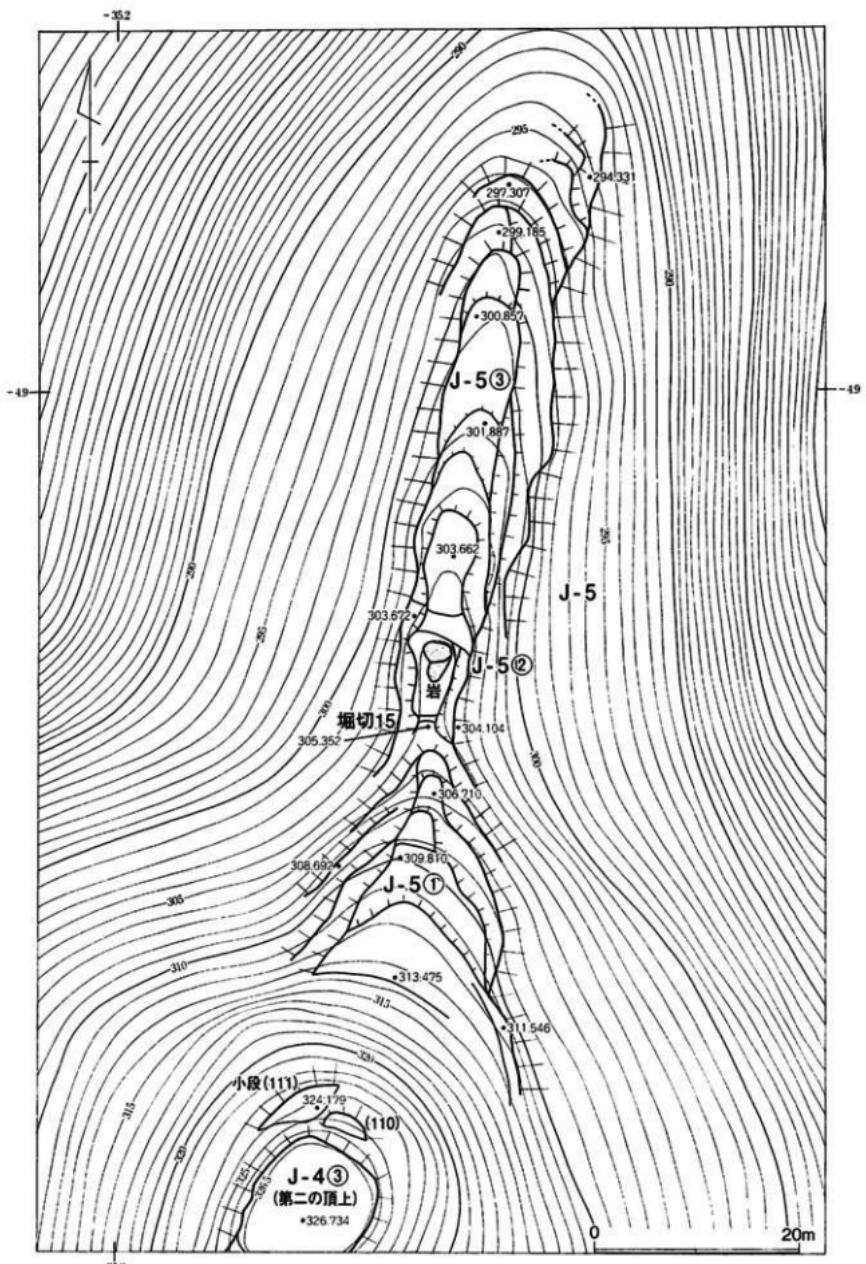
第40図 測量図② (J-2)



第41図 測量図② (J-2 ~ 4)



第42図 測量図② (J-4・5)



第43図 測量図② (J-5)

第22節 井戸の環境整備作業

Ⅲ郭-1の北城にあり、日平城跡の井戸として、良く知られている。昭和53年3月に、県教委が発刊した『熊本県の中世城跡』(熊本県文化財調査報告第30集)には、「直径4m、深さ3m、どんな旱魃にも水は涸れたことは無い。雨乞い祭りには、井戸の水を供えると、雨が降ったと伝えられる」とある。さらに、平成19年3月発刊の『菊水町史』には、「直径3.8m、現在の深さ1.5m、これほどの高所に井戸を有するのは、他に事例を知らない」との記事を見る。

町教委でも、非常に興味のある井戸であったが、日平城跡の調査中に、蜻浦集落で聞き込みを実施したところ、戦前は、定期的に大がかりな井戸さらいが行われていた事が判明した。それも、村の若者が、揮一つで作業に取り組んだ勇壮なものであった。井戸には、後世、長年にわたり人の手が入っていたのである。

調査を開始して以来、井戸水が涸れたことは一変も無かったが、戦後、長い間、放置されていたので、倒木や枯れ葉が多量に落ち込んでいた。そこで、調査にあらかた目途がついた平成23年9月末に、清掃作業を実施することにした。井戸の性格が、少しでも解明できたらという狙いもあった。

井戸の清掃作業は、1日半で終了した。結果として、「掘り抜き井戸」ではなく、「雨水を貯める大穴」であった。意外なほど浅く、深さ2mに留まっている。作業前に、井戸の周囲には、所々に、縁石が巡っていたが、中から、かなりの落石が見つかった。井戸さらいの事実とは、矛盾する結果であり、「一旦、掘り上げられて、再び、投げ込まれた」「近年になって、崩れ落ちた」かの2説が考えられた。わずかであるが、木製品や土器片の出土もあった。井戸の周辺からも、土器器などが表采できた。これについては、実測図(第47~49図)と写真(写真図版71~74)を掲載した。井戸の規模は、縁石を基準にするものである。

	長さ(m)	幅(m)	備考
井戸上場	3.8	3.2	北壁に、小段(長さ1.5m、幅0.3~0.2m)が付く。
井戸下場	2.6	2.55	下場の地形が、やや不明確である。中心部は、長円形(長さ1.7m・幅0.8m)に窪んでいる。

第51表 井戸計測表

〔井戸が掘り込まれた土層〕

土層の状態からすれば、漏水の心配は、ほとんど無く、最適な場所に、井戸が掘られていたことが分かる。

順序	土色	備考
①	褐色土	遺物包含層。
②	明褐色土	粘質土。井戸水の吃水線跡が残る。底部から、1.5mの箇所。常に、この辺りまで、水が溜まっている事が分かる。
③	灰褐色土	粘質土。
④	灰色土	硬質土。水田の床土に酷似する。

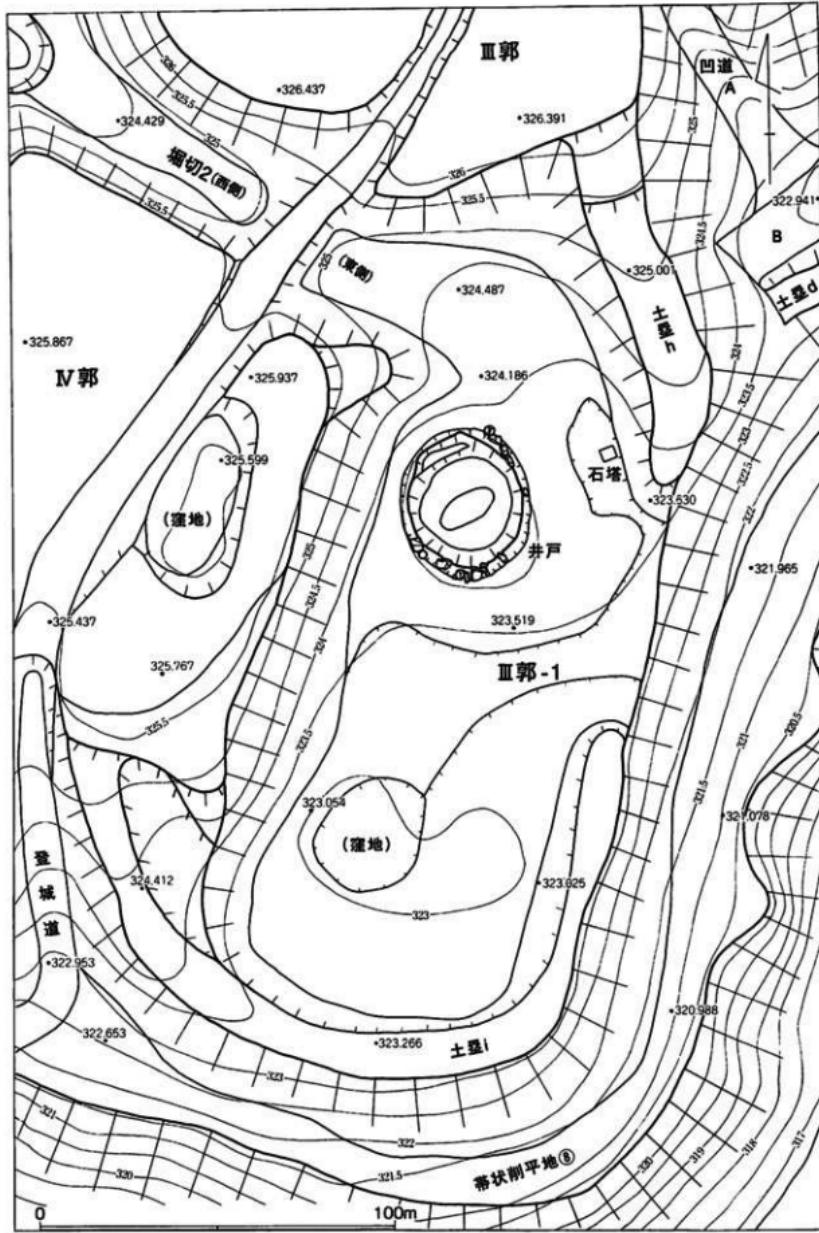
第52表 土層観察表

〔水質〕

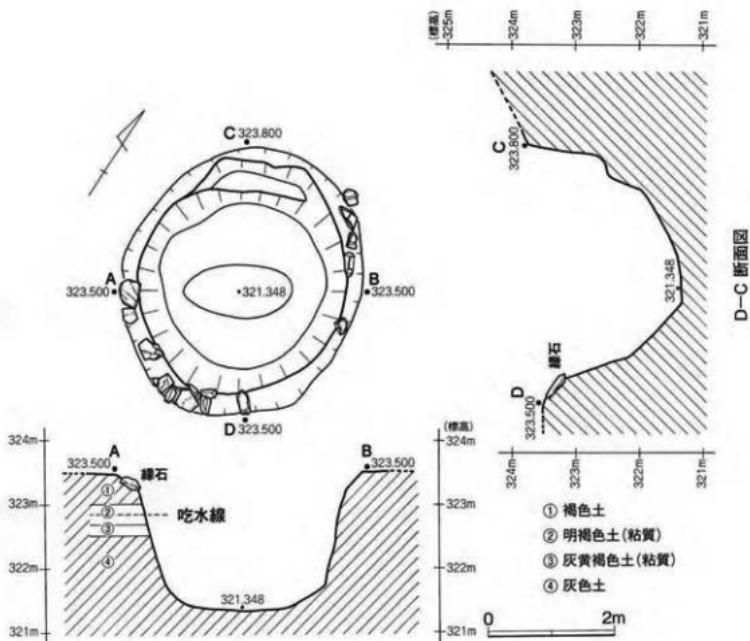
濁っており、到底、飲料水にはならない。しかし、井戸と呼ばれて、雨乞い踊りの獻水になった程で、城時代を含めて、湧き水があったことも考えられる。井戸の北側が城跡の山頂部なので、可能性は十分にある。一方で、堀切2の東側ラインは、流れ込んだ雨水を井戸に流し込むような造りになっており、疑問が残る。

〔縁石の修復作業〕

計画図面を作成して、現存の縁石の座りを良くして、欠けている箇所は、落石で補った。井戸の北側は、IV郭平場の法面が迫っているので、この箇所に縁石はない判断した。最終的に、落石の数も、ほぼ見合い、出来上がりの井戸を巡る縁石は、馬蹄形になった。



第44回 三郭一測量図



第45図 井戸・実測図および断面図



井戸・環境整備前



環境整備後

第23節 表採遺物

1. 城内全域からの遺物

青磁器（1～4）：碗で、中国からの輸入磁器である。1～3は、12～13世紀。4は、12～14世紀。釉色は、1・2が灰緑色、3が灰青色、4が灰黒青色。窓は、2・4が竜泉窯系、3が同安窯系。文様は、2が外器面に画花文、3が内外器面に描書き文。場所は、1が東側派生尾根Fの基底部、3がⅢ郭南斜面の凹道H、4がV郭南北斜面。

白磁（5～8）：碗で、中国からの輸入磁器である。5は、12～13世紀。6は、12世紀～14世紀前半。7・8は、13～14世紀前半。5は、口縁が扁平。6は、復元底径5.7cm、高台は、高さ7mmで、蛇の目袖剥ぎ。7・8は、玉縁口縁。場所は、5が堀切6-2の小溝、6がV郭-1の土壙n、7が堀切6-3の小段（17）。

染付（9・10）：肥前系窯の端反形・碗で、1820～60年代。場所は、9がV郭内の土壙状高まり、10は、小山I北側谷部の帶状削平地。

陶器（11）：内野山窯の皿で、17世紀末～18世紀前半。場所は、小山Iの北東斜面。9～11は、廃城後の持ち込みである。

土師器（12・13）：13は、外底面に糸切り痕が確認出来る。12の焼成は、やや不良。場所はいずれもV郭で、12が平場、13が北東斜面。

土師質土器（14）：火舎の破片かと思われる。場所は、小山I。

中世土器（15）：外器面に、跡目模様。

須恵器（16）：内外器面に、ハケ目。場所は、豊堀4の小段（40）。

古銭（17～20）：17・18・20は「寛永通宝」。19は「文久永宝」で、日本で最後の穴銭である。文久3年（1863）～明治2年まで鋳造された。20は鉄一文銭で、鍋銭とも呼ばれた。江戸では、元文3年（1738）に、銅の供給不足などから鋳造が始まったものの不評で、あまり流通しなかった。場所は、17がV郭南斜面、18が豊堀4の下位、19が城山J-3南側縁部、20が豊堀4の上位。

【小結】 青磁・白磁は、いずれも南北朝時代以前の輸入磁器である。文献資料による落城時期は、島津勢に攻められた天正10年（1582）で、時期的に大きな隔たりがある。伝世品と見なすべきであろうが、疑問は残る。古銭は、寛永通宝と文久永宝で、廃城後の持ち込みである。

2. Ⅲ郭-1（井戸曲輪）に散在する遺物

土師器（21～43）：底部が残るのは、大方、糸切り痕が認められる。40～43に限り、ヘラ切り痕である。器形は、25・27～31が杯で、他は皿である。いずれも、器面にススの付着はない。杯の25は、復元口径14cm、底径7.5cm、器高3.3cm。皿の32～34・39～43は、ごく浅い皿で、器高1.0～1.2cm、復元口径8.8～7.4cm、復元底径7.4～5.0cm。

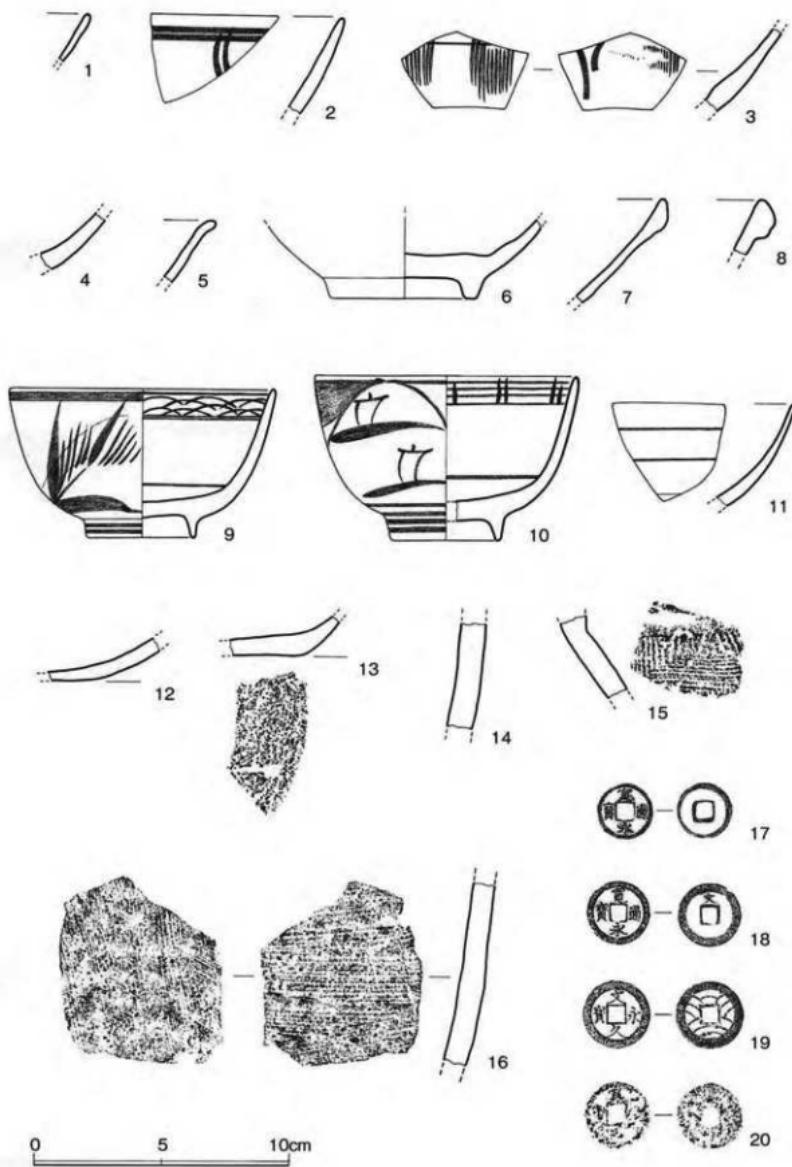
須恵器（44）：内外器面に、格子目と同心円のタタキ。

【小結】 城詰め兵士の生活品であったと推定される。文献資料によれば、落城の際に建物が被災しているが、被熱した遺物は、混じっていない。

3. 井戸からの遺物

土師器（45～50）：器形は、49が高台付きの椀、48が大型杯、他は、糸切り痕が残る皿。いずれも、器面にススの付着はない。復元底径は、48が9.7cm、50が6.3cm。

その他：51は、中世土器の壊片。52は古銭で「寛永通宝」、井戸脇の石塔下から表採したもの。この他、若干の木製品があり、写真図版（写真74）に5点を掲載した。

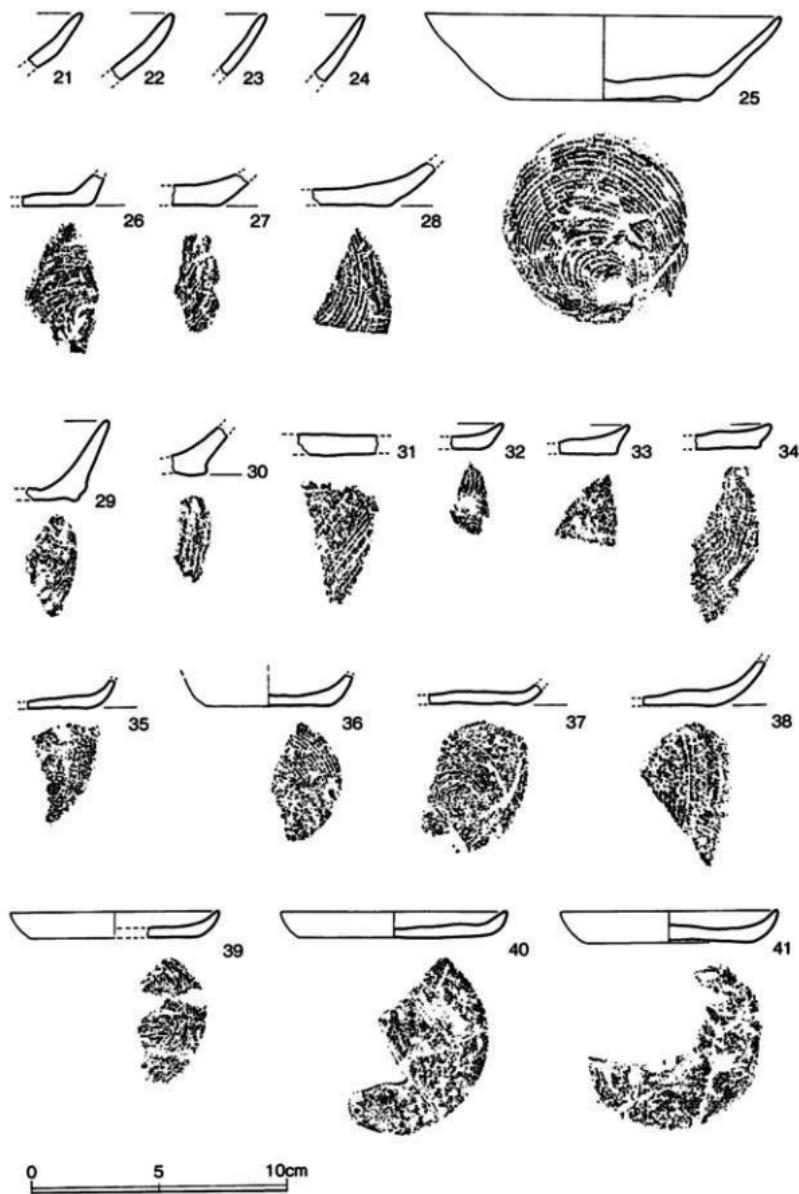


第46図 遺物実測図① (表探: 城内全域)

No.	器種	器 厚	特 徴	備 考	採取地点
1	青磁 碗 12~13C	体部上位 3 mm 中位 2 mm	細かな貫入があり。	窯: 中国・竈泉窯系 釉色: 灰緑色 焼成: 良好	東派生尾根F 基底部
2	青磁 碗 12~13C	体部上位 3 mm 中位 2 mm 下位 5 mm	外器面に画花文。	窯: 中国・竈泉窯系 釉色: 灰緑色 焼成: 良好	—
3	青磁 碗 12~13C	体部中位 4 mm 下位 8 mm	内外器面に鶴描き文。	窯: 中国・同安窯系 釉色: 灰青色 焼成: 良好	Ⅲ郭南斜面 凹道H
4	青磁 碗 12~14C	体部中位 5 mm 下位 6 mm	貫入あり。 厚めの施釉。	窯: 中国・竈泉窯系 釉色: 灰黒青色 焼成: 良好	V郭南西斜面
5	白磁 碗 12~13C	体部上位 2 mm 中位 2 mm	口縁は扁平(6 mm幅)。 貫入あり。	窯: 中国 釉色: 雪白色 焼成: やや良	掘切 6~2 小溝
6	白磁 碗 12C~ 14C前半	体部中位 4 mm 下位 6 mm 底部中央 9 mm 端部 8 mm	復元底径 5.7 cm 高台高 7 mm 内底面は、蛇の目軸割ぎ。 高台は扁平。	窯: 中国 釉色: 灰白色 焼成: やや良	V郭 - 1 土壠n
7	白磁 碗 13C~ 14C前半	口縁上位 6 mm 中位 8 mm 体部上位 3 mm 中位 3 mm	玉縁口縁。	窯: 中国 釉色: 白灰色 焼成: やや良	掘切 6~3 小段(17)
8	白磁 碗 13C~ 14C前半	口縁上位 5 mm 中位 9 mm 体部上位 5 mm	玉縁口縁。	窯: 中国 釉色: 灰白色 焼成: 良	—
9	染付 碗 1820~ 1860年代	体部上位 2 mm 中位 4 mm 下位 6 mm 底部中央 6 mm 端部 7 mm	復元口径 10.5 cm 復元底径 4.3 cm 端反形。 外器面に竹文様。 内器面中央に植物文。上位に 3 条の界線。界線間に文様。	窯: 日本・肥前系 具須: 深青黒色 器面: 灰色 焼成: 良好	V郭 土壠状の高まり
10	染付 碗 1820~ 1860年代	体部上位 2 mm 中位 4 mm 下位 6 mm 底部中央 6 mm 端部 7 mm	復元口径 10.5 cm 復元底径 4.5 cm 端反形。 外器面に帆かけ舟文様。 内器面中央に文様。上位に 4 条の界線。	窯: 日本・肥前系 具須: 深青褐色 器面: 白灰色 焼成: 良好	小山 I 帯状削平地②
11	陶器 皿 17C末~18C 前半	体部上位 2 mm 中位 3 mm 下位 5 mm	細いクロ底。 内器面のみに綠釉を施釉。	窯: 日本・内野山窯 釉色: オリーブ色 焼成: 良好	小山 I 通路北東斜面
12	土師器	体部下位 5 mm 底部端部 3 mm	—	胎土: 粗 色調: 暗灰褐色 焼成: やや不良	V郭平場
13	土師器	体部下位 6 mm 底部中央 6 mm 端部 9 mm	外底面に糸切り痕。摩滅している。	胎土: 粗 色調: 暗褐色 焼成: 良	V郭北東斜面
14	土師質土器	体部上位 10 mm 中位 10 mm	火舎の体部か (?)	胎土: 精良 色調: 暗褐色 焼成: 良	小山 I
15	土器	屈曲部 9 mm 体部上位 8 mm 中位 8 mm	獨目文様。	胎土: 粗 色調: 黒褐色 焼成: やや良	—
16	須恵器 甕	体部上位 8 mm 中位 9 mm	外器面は縱位のハケ目。 内器面は横位のハケ目。	胎土: 精良 色調: 黒灰褐色 焼成: 良	堅堀 4 小段(40) 下位

No	器種	径	備 考	No	器種	径	備 考
17	古鏡 寛永通宝	直径 21mm 孔径 8mm	V郭南斜面 通路脇採取	19	古鏡 文久永宝	直径 26mm 孔径 7.5mm	裏面: 青波文 城山J-3南側斜部採取
18	古鏡 寛永通宝	直径 25mm 孔径 7mm	裏面: 上位に「文」 堅堀4下位採取	20	古鏡 寛永通宝	直径 26mm 孔径 7mm	堅堀4上位採取

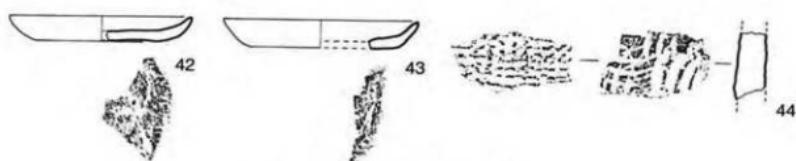
第53表 遺物観察表①



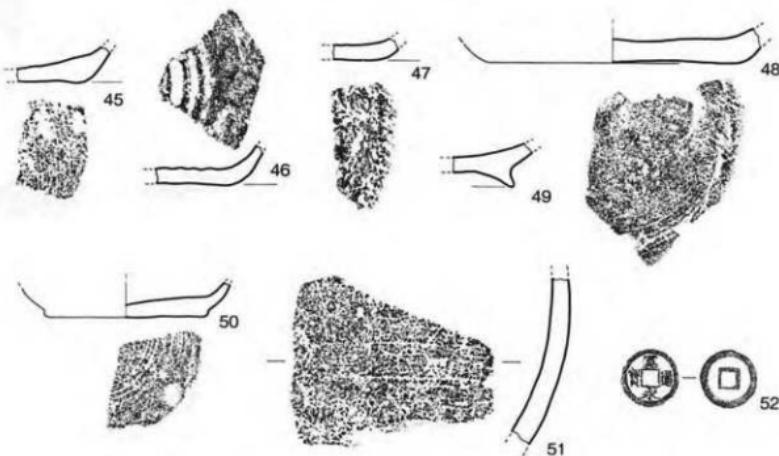
第47図 遺物実測図② (表探:Ⅲ郭-1)

No.	器種	器厚	特徴	備考
21	土師器皿	体部上位 4 mm 中位 5 mm	上位で内窓する。	胎土：精良 色調：褐灰色 焼成：堅緻
22	土師器皿	体部上位 4 mm 中位 6 mm	上位で内窓する。	胎土：精良 色調：灰褐色 焼成：やや軟
23	土師器皿	体部上位 3 mm 中位 4 mm	上位でやや内窓する。	胎土：精良 色調：灰褐色 焼成：堅緻
24	土師器皿	体部上位 3 mm 中位 5 mm	口縁直口。	胎土：精良 色調：褐灰色 焼成：堅緻
25	土師器杯	体部上位 3 mm 中位 4 mm 下位 5 mm 底部中央 7 mm 端部 8 mm	復元口径 14.0cm 底径 7.5cm 器高 3.3cm 外底面に、明確な糸切り痕。	胎土：やや粗い 色調：灰褐色 焼成：堅緻
26	土師器皿	体部下位 6 mm 底部中央 5 mm 端部 5 mm	外底面に糸切り痕。	胎土：やや粗い 色調：明褐色 焼成：やや軟
27	土師器杯	体部下位 7 mm 底部中央 8 mm 端部 9 mm	外底面に糸切り痕。摩滅している。	胎土：やや粗い 色調：暗橙色 焼成：堅緻
28	土師器杯	体部中位 5 mm 下位 8 mm 底部中央 7 mm 端部 8 mm	外底面に、明確な糸切り痕。	胎土：精良 色調：灰褐色 焼成：堅緻
29	土師器杯	体部上位 4 mm 中位 6 mm 下位 9 mm 底部端部 5 mm	口縁直口。 外底面に糸切り痕。摩滅している。	胎土：精良 色調：暗褐灰色 焼成：堅緻
30	土師器杯	体部下位 7 mm 底部端部 9 mm	立ち上がりは、一旦、窪む。 外底面に糸切り痕。摩滅している。	胎土：精良 色調：暗褐灰色 焼成：堅緻
31	土師器杯	底部中央 8 mm 端部 7 mm	外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：暗橙色 焼成：堅緻
32	土師器小皿	体部上位 3 mm 下位 5 mm 底部端部 5 mm	ごく浅い皿。 外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：褐灰色 焼成：堅緻
33	土師器小皿	体部上位 3 mm 下位 5 mm 底部中央 6 mm 端部 7 mm	ごく浅い皿。 外底面に糸切り痕。摩滅している。	胎土：精良 色調：褐白色 焼成：堅緻
34	土師器小皿	体部上位 3 mm 下位 6 mm 底部中央 6 mm 端部 7 mm	ごく浅い皿。 外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：褐灰色 焼成：堅緻
35	土師器皿	体部下位 3 mm 底部中央 3 mm 端部 5 mm	外底面に糸切り痕。摩滅している。	胎土：精良 色調：褐灰色 焼成：堅緻
36	土師器皿	体部中位 4 mm 下位 5 mm 底部中央 4 mm 端部 4 mm	復元底径 4.8cm 外底面に、明確な糸切り痕。	胎土：やや粗い 色調：暗褐灰色 焼成：堅緻
37	土師器皿	体部下位 4 mm 底部中央 4 mm 端部 5 mm	外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：褐灰色 焼成：堅緻

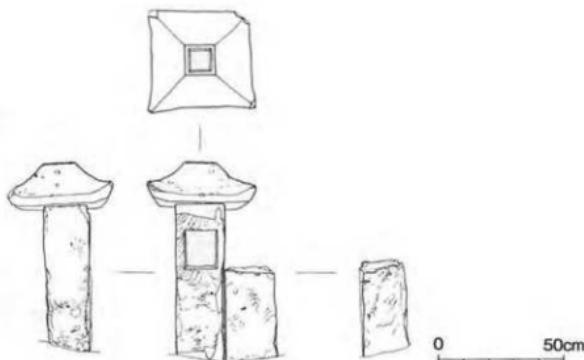
第54表 遺物観察表②



第48図 遺物実測図③ (表探: III郭-1)



第49図 遺物実測図④ (井戸)



第50図 III郭-1・石塔実測図

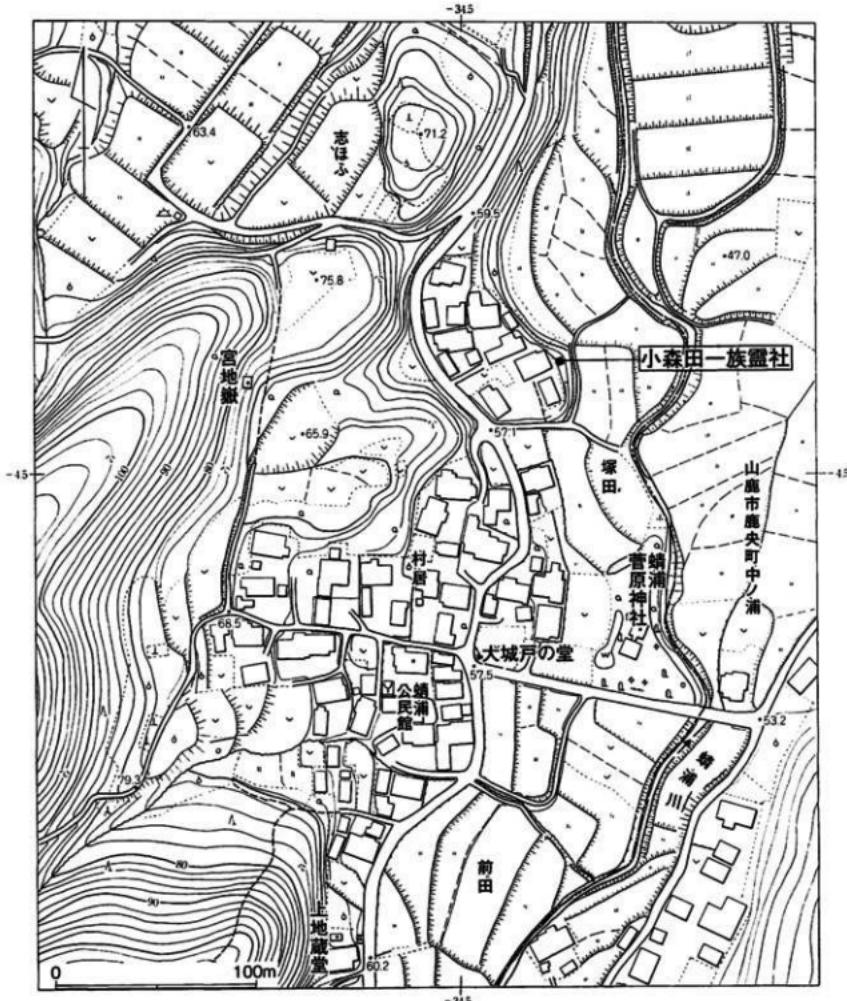
No.	器種	器厚	特徴	備考
38	土師器皿	体部上位 4 mm 下位 5 mm 底部中央 4 mm 端部 6 mm	外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：褐色 焼成：堅緻
39	土師器皿	体部上位 3 mm 下位 5 mm 底部中央 4 mm 端部 5 mm	復元口径 8.2cm 復元底径 6.8cm 器高 1.0cm ごく浅い皿。 外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：灰褐色 焼成：堅緻
40	土師器皿	体部上位 4 mm 下位 5 mm 底部中央 4 mm 端部 5 mm	復元口径 8.8cm 復元底径 7.4cm 器高 1.0cm ごく浅い皿。 外底面にヘラ切り痕。	胎土：やや粗い 色調：褐灰色 焼成：堅緻
41	土師器皿	体部上位 4 mm 下位 5 mm 底部中央 5 mm 端部 6 mm	復元口径 8.5cm 底径 6.5cm 器高 1.2cm ごく浅い皿。 外底面にヘラ切り痕。	胎土：やや粗い 色調：暗褐色 焼成：堅緻
42	土師器皿	体部上位 3 mm 下位 4 mm 底部中央 4 mm 端部 4 mm	復元口径 7.4cm 復元底径 5.0cm 器高 1.0cm ごく浅い皿。 外底面にヘラ切り痕。	胎土：精良 色調：褐色 焼成：堅緻
43	土師器皿	体部上位 3 mm 下位 4 mm 底部端部 4 mm	復元口径 7.9cm 復元底径 5.3cm 器高 1.1cm ごく浅い皿。 底面にヘラ切り痕。	胎土：精良 色調：褐色 焼成：堅緻
44	須恵器	体部上位 11mm 中位 12mm	外器面は格子目タタキ。 内器面は同心円タタキ。	胎土：精良 色調：黒灰色 焼成：堅緻
45	土師器皿	体部下位 6 mm 底部中央 6 mm 端部 8 mm	外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：褐色 焼成：堅緻
46	土師器皿	体部中位 5 mm 下位 6 mm 底部中央 6 mm 端部 7 mm	内底面に幅 4 ~ 6 mm のクロロ痕。	胎土：精良 色調：明橙色 焼成：堅緻
47	土師器皿	体部下位 5 mm 底部中央 6 mm 端部 6 mm	外底面に糸切り痕。摩滅している。	胎土：精良 色調：暗褐色 焼成：堅緻
48	土師質土器	体部下位 10mm 底部中央 9 mm 端部 10mm	復元底径 9.7cm 外底面に糸切り痕。 大型杯。	胎土：精良 色調：暗橙色 焼成：堅緻
49	土師器椀	体部下位 6 mm 底部中央 6 mm 端部 8 mm	高台（高さ 4 mm）付きの椀。	胎土：やや粗い 色調：褐色 焼成：やや軟
50	土師器皿	体部中位 4 mm 下位 5 mm 底部中央 6 mm 端部 8 mm	復元底径 6.3cm 立ち上がりは一旦、窪む。 外底面に糸切り痕。	胎土：精良 色調：灰褐色 焼成：堅緻
51	中世土器	体部上位 8 mm 下位 9 mm	—	胎土：精良 色調：褐色 焼成：堅緻
52	古銭	直径 22mm 孔径 6 mm	「寛永通宝」	井戸脇の石塔下から採取。

第55表 遺物観察表③

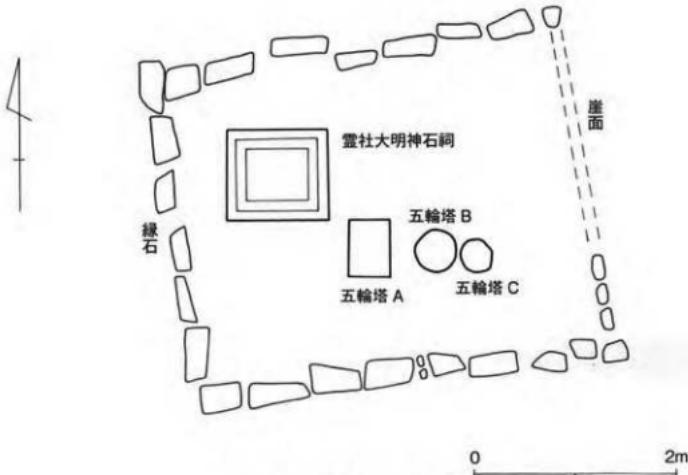
第24節 小森田一族靈社の調査

大城戸と呼ばれる四差路から北側へ130m進んだ所に、東側へ脇道がある。ここを下ると、左手に廃家があり、その敷地の東縁に小森田一族靈社が祀られている。縁石で囲まれた南北3.4m×東西4.2mに、石祠と3基の五輪塔が東西に並んでいる。

※天正10年（1582）に、島津勢との戦いで戦死した小森田氏（日平城主）を祀る場所である。石祠は、嘉永5年（1852）の建立。五輪塔は、家臣の弔い墓とされるが、建立時に、近くから寄せ集められたものであろう。



第51図 鮎浦地区周辺図

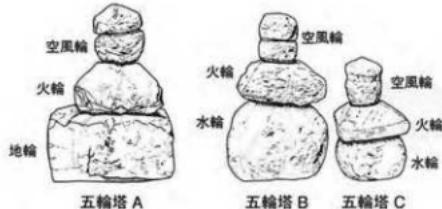


第52図 小森田一族靈社実測図

[石祠]

土台を入れた高さは1.5m。

本体は、幅60cm。屋根は、上位幅34cm、下位幅85cm。



第54図 精社・五輪塔実測図

第53図 精社・石祠実測図

0 1m

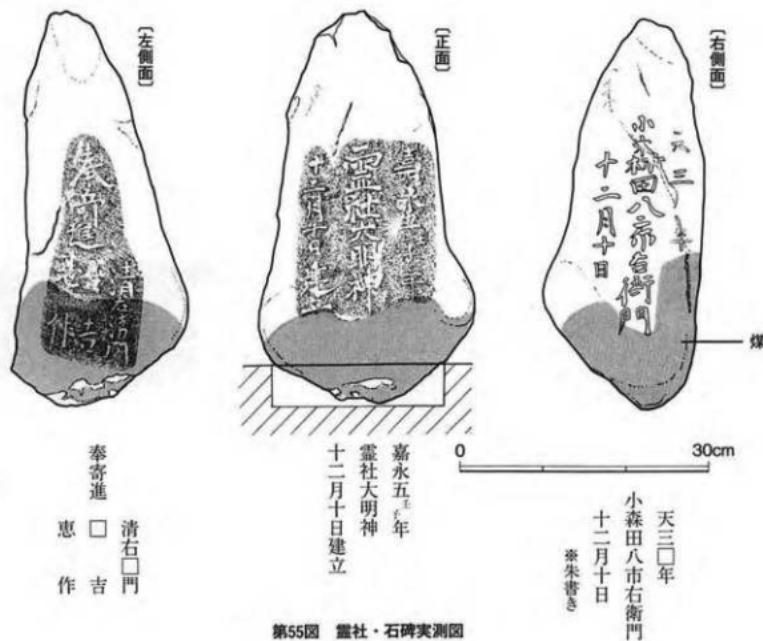
[五輪塔] 3基

	五輪塔A		五輪塔B		五輪塔C	
	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅
空風輪	23cm	20cm	20cm	15cm	19cm	14cm
火輪	20cm	32cm	16cm	30cm	13cm	28cm
水輪	—	—	29cm	40cm	16cm	28cm
地輪	27cm	49cm	—	—	—	—

第56表 五輪塔計測表

[石碑]

平面形については、下彫の長円形。長さ46cm、最大幅は下部で26cm。受け皿石に凹があり、はめ込み式になっている。特異なことは、下部に煤（スス）が付着している事である。これについては、明治20年3月3日に村内で大火があり、その時の火傷と伝えられる（片岡靖臣氏の調査）が、付着箇所からして、不自然である。



第55図 霊社・石碑実測図



小森田一族靈社

第25節 麓集落（靖浦・日平）の様子

（参考文献：『菊水町史』資料編 2006年）

1. 靖浦地区

①大城戸の堂

「大城戸」と呼ばれる堂が、四つ角に建っている。堂の時期や言い伝えなど不詳であるが、「大城戸」の呼称は、注目に値する。この場所が、日平城へ向かう登城道の大手口であった可能性も十分に考えられる。別記したが、近くには、明治時代になって、城主の小森田氏を祀った場所がある（→97頁）。

②靖浦菅原神社

延宝7年（1679）11月21日の勅請と伝えられる。大祭は、11月2日に行われる。「輪くぐり（6月下旬～7月上旬の日曜日）」や、「彼岸こもり（9月第1日曜日）」も行われている。

③上地蔵堂

「上の地蔵さん」と呼ばれている。明治20年3月3日の村の大火災を食い止めたと言われ、そのために「火の守り地蔵さん」とも呼ばれている。2月10日に公民館で地蔵祭りが行われる。



①大城戸の堂



②靖浦菅原神社



③上地蔵堂

2. 日平地区

④田川観音堂

田川寺跡に建つおり、「お観音さん」と呼ばれ、9戸で世話をまわしている。祭事は、1月18日と6月18日に世話人宅で行われる。

⑤田川寺跡 天文九年板碑

逆修供養塔で、「天文九年（1540）十月吉日」の紀年名がある。日平城と同時期の板碑で、寺跡の御堂前に建立されている。同所には、無銘の板碑もある。



④田川観音堂



⑤田川寺跡・板碑

⑥日平菅原神社

祭神は、菅原道真。祭礼は10月9日、神職・区長・神社総代2名・節頭組の氏子で神事が行われる。昭和13年頃まで、神楽が奉納されていた。

⑦今泉観音堂

「お観音さん」と呼ばれ、12戸で世話をまわしている。祭事日は、田川観音堂と同じ。



⑥日平菅原神社



⑦今泉観音堂

⑧日平宝篋印塔・板碑

「月浦妙泉院跡」と伝えられる民家の土手上にある。宝篋印塔には、「天文十六年（1547）八月十六日」の紀年名がある。建立者は、月浦妙泉禪定尼。

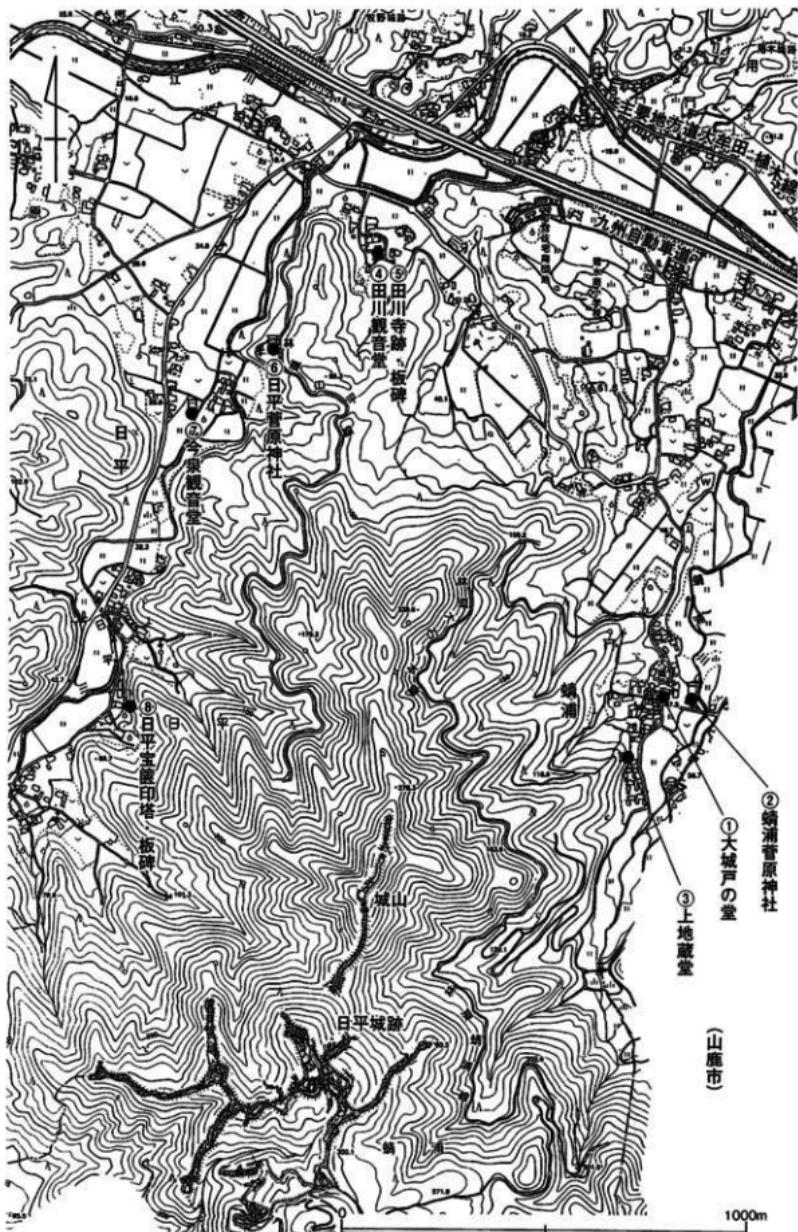
板碑には「天文九年（1540）八月吉日」の紀年名がある。建立者は、道口禪定門。二人は、夫婦と推定されている。「肥後国誌」は、近くに禪宗寺院の花簇寺があったと記す。



⑧日平宝篋印塔



板碑



第56図 鮎浦・日平地区周辺図

第三章 考 察

1. 「古城考」と「肥後国誌」に記載された網張りの規模と、測量数値の比較

両文献には、県内533の中世城跡の中で、19城跡に限り、城跡の規模が「間」単位で示されている。この中には、日平城跡が含まれているので、検証を試みた。作業に際して、江戸時代の「間」は、6尺5寸(1.97m)、6尺3寸(1.91m)、6尺(1.82m)の3種類があるので、これらの数字を「間」にかけて、測量数値と比較した。

『古城考』と『肥後国誌』は、ほぼ同一内容(数値が多少異なる程度)で、城の規模を「山城也、東西七間、南北五十九間、東高二百四十間、西北南三百七十間(西南北二百七十間、四方ノ堀口二間、深一間)、堀江曲輪百間(曲輪百間)」と記している。ただし、『古城考』には、一部『肥後国誌』の記述文が欠けており、考察では、その箇所を()で表現した。

場所	間	6尺5寸(1.97m)	6尺3寸(1.91m)	6尺(1.82m)	測量数値(m)	解説
東西	7	13.79	13.37	12.74	13	①
南北	59	116.23	112.69	107.38	107	②
東	240	472.80	458.40	436.80	443	③
西北南	370	728.90	706.70	673.40	—	④
(西南北)	270	531.90	515.70	491.40	486	④
(堀口)	2	3.94	3.82	3.64	4~6	⑤
(深)	1	1.97	1.91	1.82	1	⑥
堀江曲輪	100	197.0	191.0	182.0	182	⑦

第57表 「間」と測量値の対比表

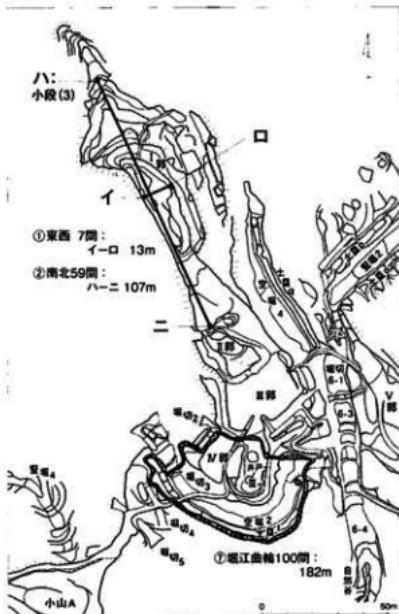
[解説]

①イーロは、東西の長さ。I郭平場で、最大の横幅箇所。西縁のイは、岩場縁で、近くに三角点がある。東縁のロは、標高339mの等高線がかかる。東西の長さは、13m。

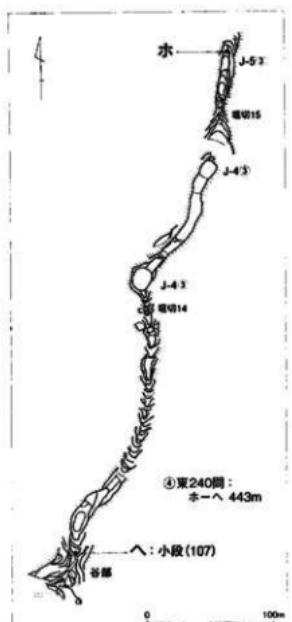
②ハーニは、南北の長さ。ハは、I郭北西斜面の小段3(標高328.45m)にある。これから下位に平場はない。ニは、I郭南斜面の端部であり、標高330mの等高線がかかる。緩傾斜地で、II郭との境目にあたる。南北の長さは107m。

③城山Jの事と思われる。「東」と表現されているが、日平城跡のI郭から、北東方向に延びる尾根と思われる。尾根・立ち上がりの小段(107)から計測が始まり、端部は、尾根の北東端(J-5(③))と推定される。測量図面での長さは、ホヘで443m。

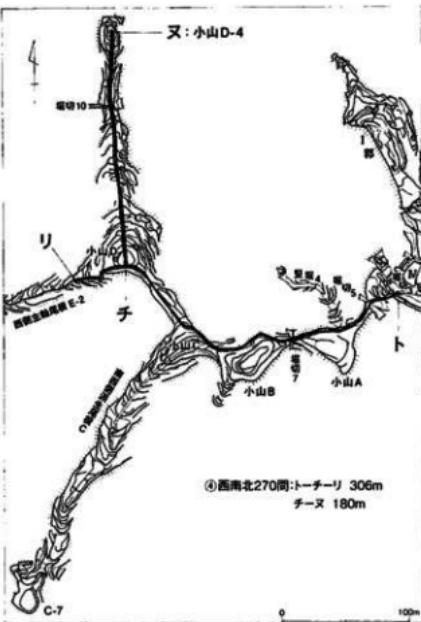
④『古城考』は「西北南370間」、『肥後国誌』は「西南北270間」と記しており、表記の仕方と数値が



第57図 網張り規模解説図①



第58図 繩張り規模解説図②



第59図 繩張り規模解説図③

異なる。さらに、前述のように、ほぼ同一内容ながら、「古城考」に欠けている部分が「肥後国誌」には記述されていることに注目しなければならない。「古城考」は、城郭の集成本であり、それ以前に、少なくとも『古城主考』～『古城主記』～『肥後国誌』の流れがあった。そのためには、「古城考」は、ダイジェスト的な性格があり、記事の省略個所や、数値の写し間違いが見られるのであろう。「370間」は「270間」の事と思われる。しかし、「西南北270間」に解釈を加えるのは、かなり困難である。あえて推論を試みると、西は「西側主軸尾根」のことではないかと考えられる。この場合、東端は(ト)の堀切3で、小山A～小山B～小山Cを経て、小山Dに到る。小山Dの西端は、地形の一大変化点で、ここから尾根が急傾斜になる。これに合せて、山道が(チ)～(リ)の間に斜型を形成している。(ト)～(チ)～(リ)の長さは、合計が306mになる。さらに「南北」については、小山Dを基底部とする西側派生尾根Dであろう。(チ)～(ス)で長さ180m、南北に伸びている。したがって、両者を合せると全長486mとなり、「肥後国誌」の270間に見合う数値となる。

⑤「堀口」は、Ⅲ郭-1の南下を巡る空堀2の事で、堀底を表しているのであろう。それでも堀底の幅は、4～6mと一定しない。

⑥「深」は、空堀2の深さであろう。南側の肩部・土塁jからの計画と思われるが、現況は2m弱に過ぎない。ただし、最も高低差がある個所で、1m程に留まる。この事については、後世に埋没したためと推察している。

⑦「堀江曲輪」は、空堀2の肩部・土塁j～堀切3～IV郭・Ⅲ郭-1の北縁を一周した範囲を意味する。長さ182mで、記述の数値と一致する。

結果として、日平城跡では、6尺(1.82m)を単位として、測量調査がなされた事が考えられる。

『古城考』 (小計14城)	上	中		下	
	飽田	玉名	合志	八代	葦北
上代城跡	筒井城跡 日平城跡 萩原城 神ノ尾城跡 坂本城跡 坂下鶴矢城跡 坂下鷹ノ尾城跡		竹迫上莊城跡	安島城跡 八代古籠城跡 吉本城跡 興善寺城跡	津奈木城跡
『肥後国誌』 (小計5城)	—	田中城跡 蘿井城跡 萩原城跡 六反城跡 万田城跡	—	高岡城跡 (吉本城跡と同じ)	—
					合計19城

第58表 「古城考」・「肥後国誌」に規範が記載された城跡

2. 日平城の選地と落城

花牟礼山が城地として選ばれたのは、菊水地区で群を抜く高さの山（標高342.2m）であることが、大きな要因の一つであろう。和木町役場とは、310.1mの高低差があり、どこから見ても、山の姿が目に入る。城山を含めた二つの山頂も印象的で、山城としての山容（山の形）も整っている。山頂に立てば、東方は萩原城跡、西方は菊池川流域と有明海、北方は役場周辺から県道3号（主要地方道大牟田・植木線）の沿線が望める。南方には玉東町の山並みが連なる。さらには、小岱山や島原半島の普賢岳も遠望される。国見の場として最適である。

高い所に城を築くのは、防禦の原点である。有事の際に、敵勢から攻撃を受けても、それだけで戦局が有利に働く。極端な事例であるが、小代氏は、小岱山・筒ヶ岳（標高501.4m）に、筒ヶ岳城を築城した。府本地区の「お花畑（居館跡と推定される）」筒所とは、実に422mの高低差がある。これだけ高い山であれば、登るだけでも一苦労で、容易に城が落ちないことは想像がつく。その意味では、類似の日平城跡が、島津勢の攻撃により、1日足らずで落城したのは驚きである。実際にあり得ない事で、何らかの原因があったものと思われる。現時点では、その一つに「この時期、肥前の竜造寺氏は、菊水地区の一部を侵食しており、小森田氏の勢力も大きく低下して、戦闘要員も少なかった」からではないかと推論している。

3. 繩張りの問題点

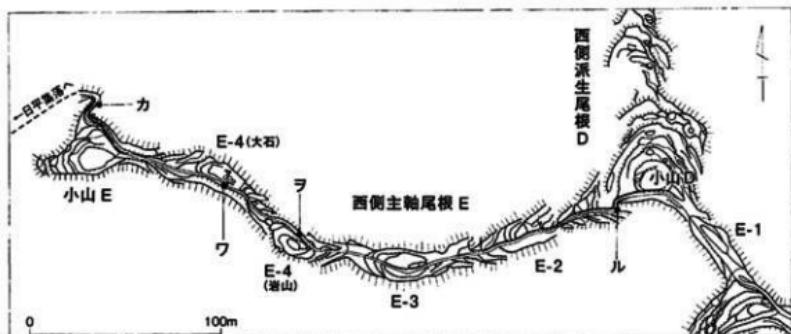
（1）堀切6・空堀4・堅堀2は、全体的に城の東側の守りを固めている。これらは、大手口と推定される納浦集落からの登城道に関連した施設と思われる。今日、当該の登城道は、東側派生尾根Fに残っているが、堀切12を下った後で、数か所が崩壊しており、明確ではない。ただし、地形図を見ると、下位では、現在の林道に繋がるのではないかと推定される。平時は、集落からの生活道路であるが、一方で、有事になると敵勢の侵入路になる危険性をはらんでいる。想像を巡らすと、侵入時のケースは、少なくとも4通りが考えられ、そのための対策を下表にまとめた。

敵勢の動向	対策
①東側派生尾根Fの端部に迫った時	尾根の北下に追い込んで、堅堀2で叩く。両肩部の土塁からの攻撃は、非常に有効である。
②東側派生尾根Fに上がった時	尾根を上がり切っても、堀切6で侵攻を食い止める。
③堀切6まで侵攻した時	Ⅱ郭～Ⅲ郭・東斜面の空堀4から叩く。
④東側派生尾根Fの南下へ、大きく回り込んだ時	南側主軸尾根の「武者溜まり」に追い込んで叩く。その際小山Ⅰと小山Ⅱは、付属的な区画になる。

第59表 敵勢の動向と対策

(2) 堀切3は、主軸尾根の東端に位置しており、堀底の中央部には、はっきりとした土橋を残している。この事で、「土橋の両壁に梯子が架かっていた」「堀切に引き橋が架かり、土橋に橋脚が下りていた」などのケースが考えられる。引き橋は、有事の際に、Ⅳ郭側へ引き込む事が出来た。堀切3の南端を通る山道は、この箇所に限り、後世のものである。

(3) 小山A～Dは、程度の差こそあれ、物見の場であったと思われる。小山Dの西端下で、山道は明らかに樹型（ル）をしており、当時は、登城道であった事が分かる。さらに、小山D～小山E間では、岩山（ヲ）や大石（ワ）の据部で、山道が極端に狭くなっている事も大事である。有事の際には、簡単な柵で、道を遮断することが出来た。さらに、小山Eの北下でも樹型（カ）になっており、幾重にも防備がなされていた事が分かる。



第60図 西側主軸尾根E

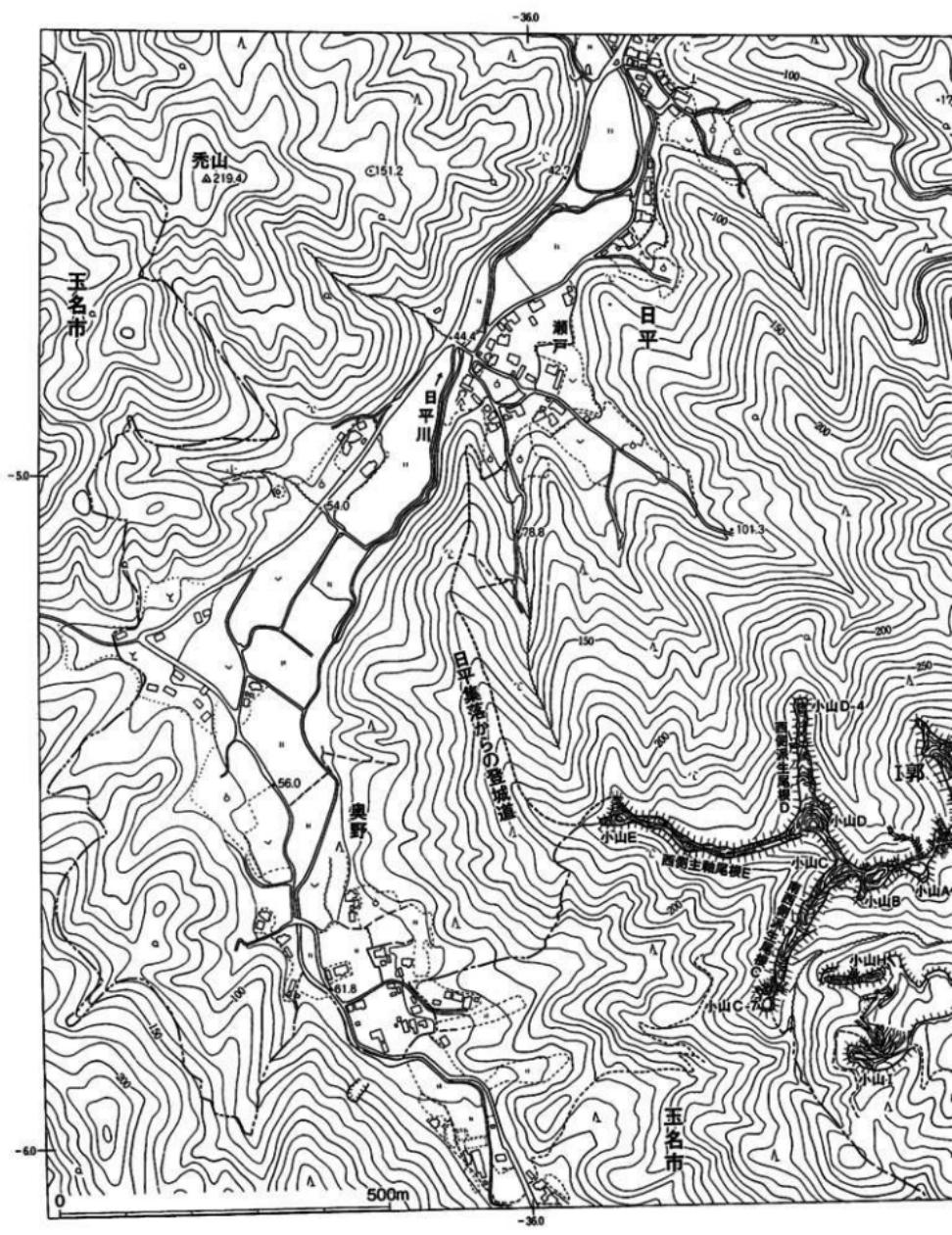
(4) 南西側派生尾根C、西側派生尾根D、東側派生尾根Fの先端部も注目される。3個所とも小山で、ここも物見の場である。西側主軸尾根Eの小山群とは、異なる景観が望める。

(5) 城山（J-3・J-4③）を、物見の場とすることで、日平城跡の山頂（I郭）からの死角部分が、完全に補える。J-3～靖浦集落（大城戸）間の直線距離は、880mに縮まり、両者間の連絡に役立つ。

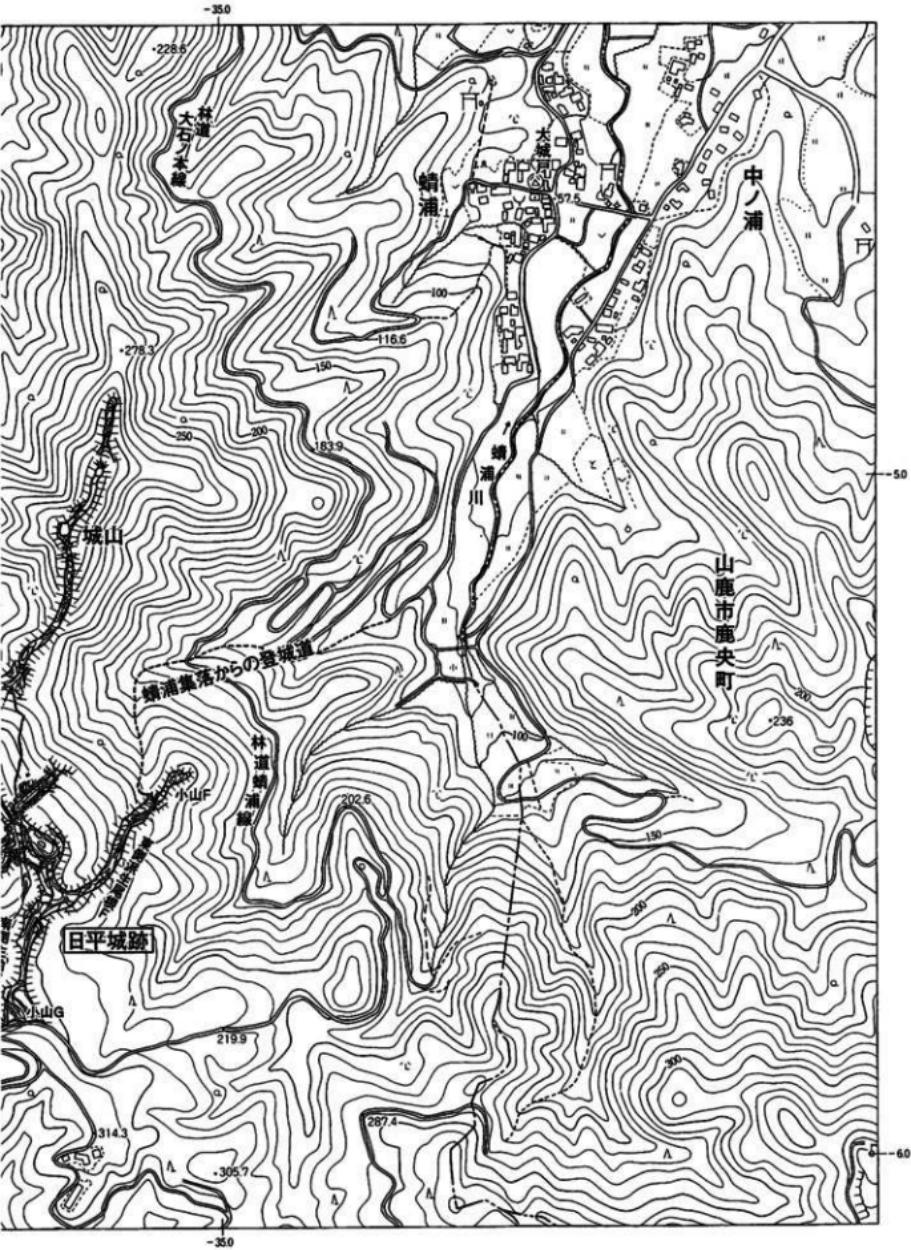
(6) 日平集落側からは、良好な状態の登城道が上がっている。こちら側に林道が開通していないのは、靖浦集落よりも山腹の傾斜が急なことと関係があるのかも知れない。位置的には、城の搦め手と思われる。ただし、天文年間の宝鏡印塔と板碑が残っているのは、日平集落である。

【結語】

調査は、推定される縄張りの全ての範囲で実施した。今後は、この資料を元に、さらなる検討を重ねて、大規模山城の実態解明に取り組む。



第61図 日平



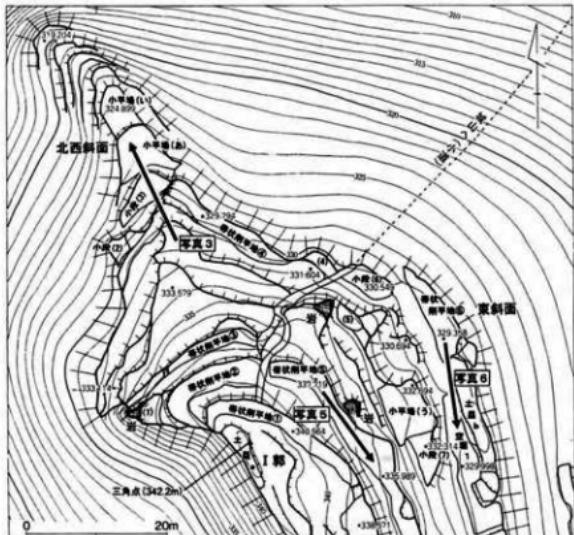
写 真 図 版



写真1 遠景 用木地区から望む



写真2 I郭から鍋浦地区（麓集落）を望む



第62図 写真撮影位置図① (I郭)

【絞り8 シャッター速度1/30】



写真3 I郭 北西斜面



写真4 I郭の山頂から萩原城跡を望む

【絞り5.6 シャッター速度1/30】



写真5 I郭 带状削平地⑤（北西→南東）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真6 I郭東下 空堀1（北→南）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真7 堀切1（土橋より東側）

第63図 写真撮影位置(1)～(5)～V部断面



〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真8 III郭 城跡最大の平場（北東→南西）

〔絞り5.6 シャッター速度1/60〕



写真9 III郭（正面に毘沙門天の石祠：III郭の法面）

〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕



写真10 堀切2（III郭→IV郭）登城道が土橋を通る

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真11 堀切2（土橋：登城道→北側）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真12 Ⅲ郭南斜面 構型の凹道C

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真13 Ⅳ郭北西下 空堀3と土壠k

〔絞り8 シャッター速度1/30〕



写真14 空堀2と土堤 j (西→東)

〔絞り8 シャッター速度1/30〕



写真15 空堀2と土堤 j (東→西)

〔絞り8 シャッター速度1/30〕



写真16 堀切3と土壠1

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真17 堀切4と土壠m

〔絞り3.5 シャッター速度1/8〕



写真18 堀切 6-2 (通路①より北側)

〔絞り5.6 シャッター速度1/4〕



写真19 堀切 6-2 と土星n

〔絞り3.5 シャッター速度1/8〕

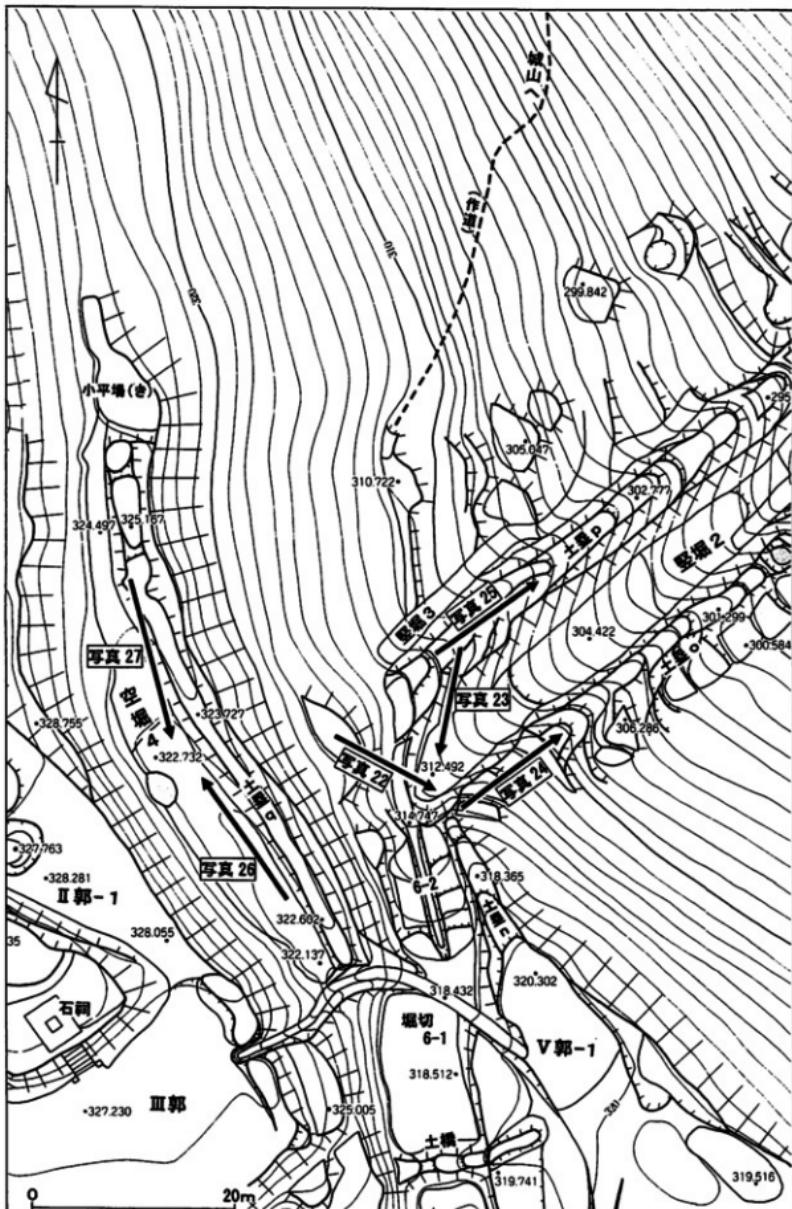


写真20 堀切 6-1 (通路①より南側)

〔絞り3.5 シャッター速度1/30〕



写真21 堀切 6-4 下位 (自然谷：湧水地)



第64図 写真撮影位置図③ (竖堀2・空堀4)

〔絞り5.6 シャッター速度1/8〕



写真22 堀切6-2と豎堀2の結合箇所

〔絞り5.6 シャッター速度1/4〕



写真23 豊堀2上位 (北→南)

[絞り5.6 シャッター速度1/2]



写真24 堅堀2の南側土塁o（イ→下位）

[絞り5.6 シャッター速度1/4)



写真25 堅堀2の北側土塁p（ト→下位）

【絞り3.5 シャッター速度1/15】

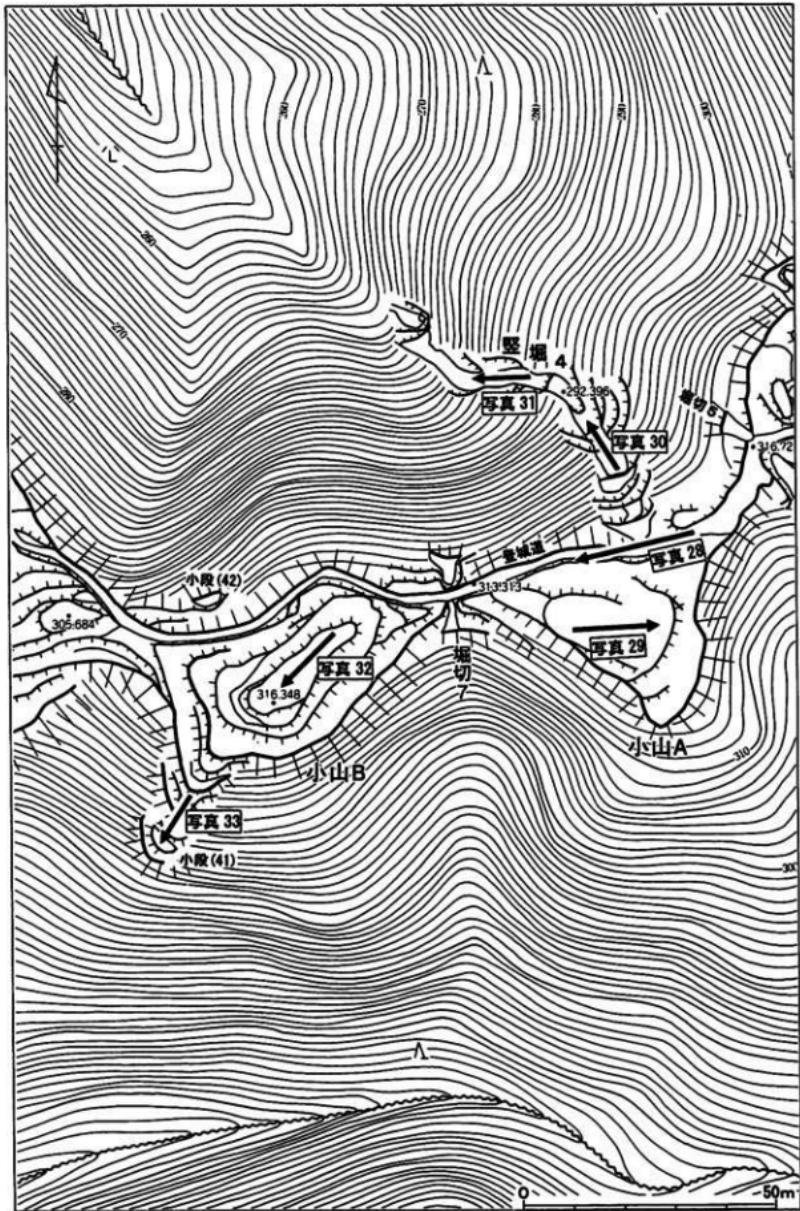


写真26 空堀4と土壘q（南→北）

【絞り3.5 シャッター速度1/30】



写真27 空堀4と土壘q（北→南）



第65図 写真撮影位置図④（小山A・豎堀4・小山B）

〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕



写真28 小山A北下の登城道（東→西）

〔絞り5.6 シャッター速度1/60〕



写真29 小山A 頂上（西→東）

〔絞り5.6 シャッター速度1/8〕



写真30 竪堀4-1（上位：南→北）

〔絞り3.5 シャッター速度1/8〕



写真31 竪堀4-4（下位：東→西）

〔絞り5.6 シャッター速度1／15〕

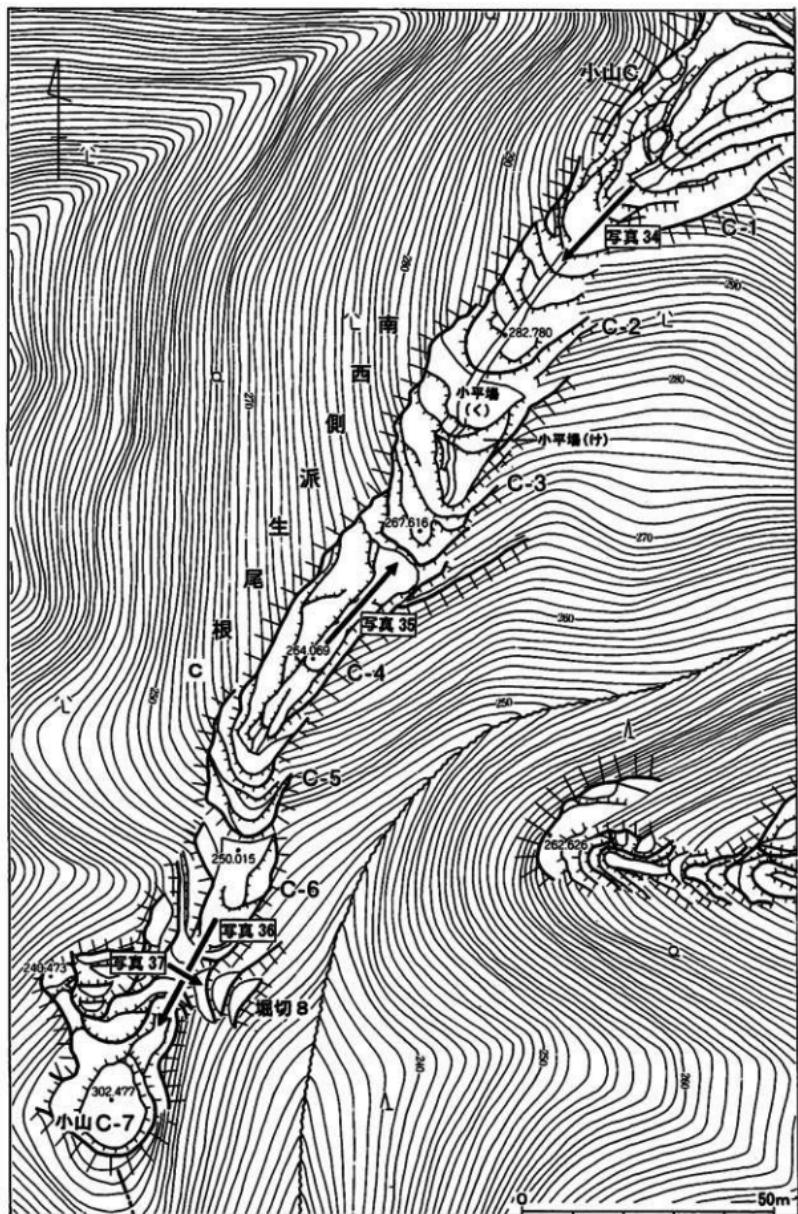


写真32 小山B 頂上（北東→南西）

〔絞り5.6 シャッター速度1／30〕



写真33 小山B南西斜面 小段(41)



第66図 写真撮影位置図⑤ (南西側派生尾根C)

[続り5.6 シャッター速度1/30]



写真34 南西側派生尾根C-1（北東→南西）

[続り5.6 シャッター速度1/60]



写真35 南西側派生尾根C-4（南西→北東）

〔絞り5.6 シャッター速度1/60〕



写真36 堀切8と小山C-7（北→南）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真37 堀切8（西→東）

【絞り3.5 シャッター速度1/15】

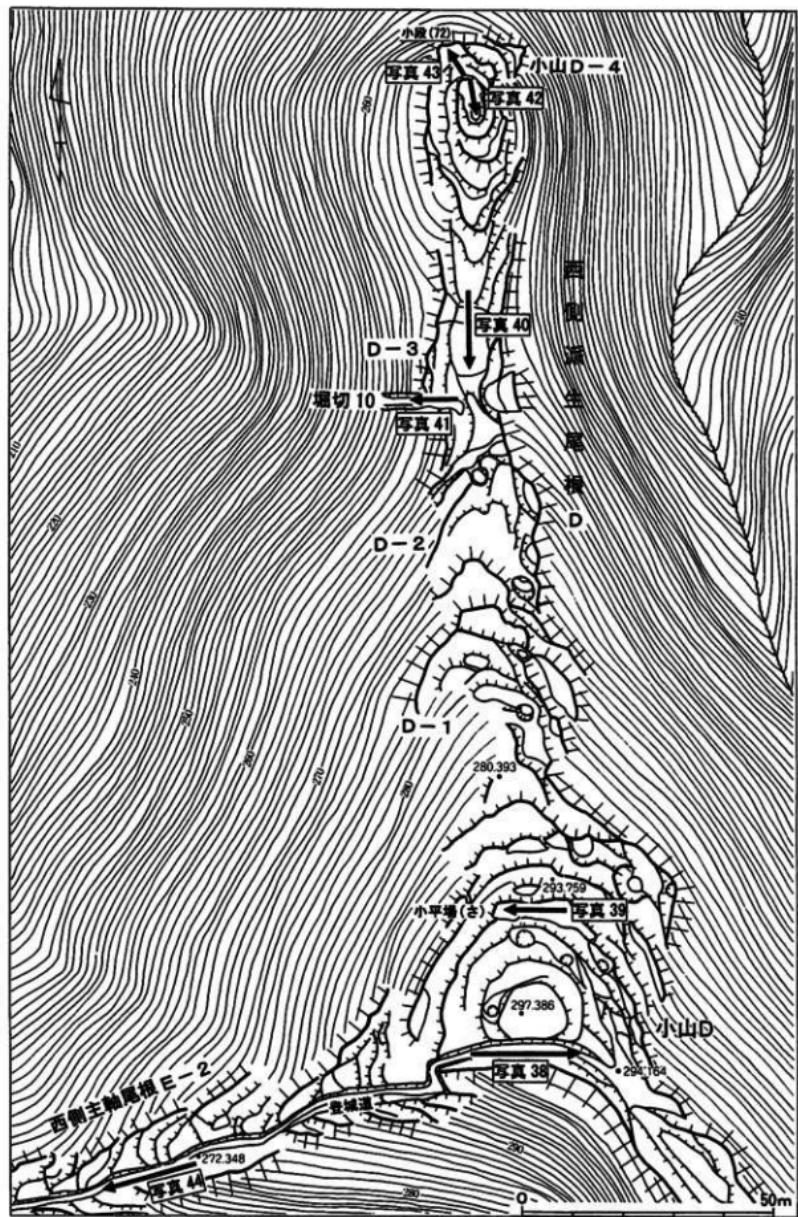


写真38 小山Dの南端・登城道（西→東）

【絞り5.6 シャッター速度1/4】



写真39 西側派生尾根Dの小平場(さ)（東→西）



第67図 写真撮影位置図⑥ (西側派生尾根D)

〔絞り5.6 シャッター速度1/8〕



写真40 西側派生尾根D-3①（北→南）

〔絞り3.5 シャッター速度1/15〕



写真41 堀切10-2（尾根筋より西側）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真42 西側派生尾根・小山D-4（北→南）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真43 西側派生尾根の最北端部・小段(72)

〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕

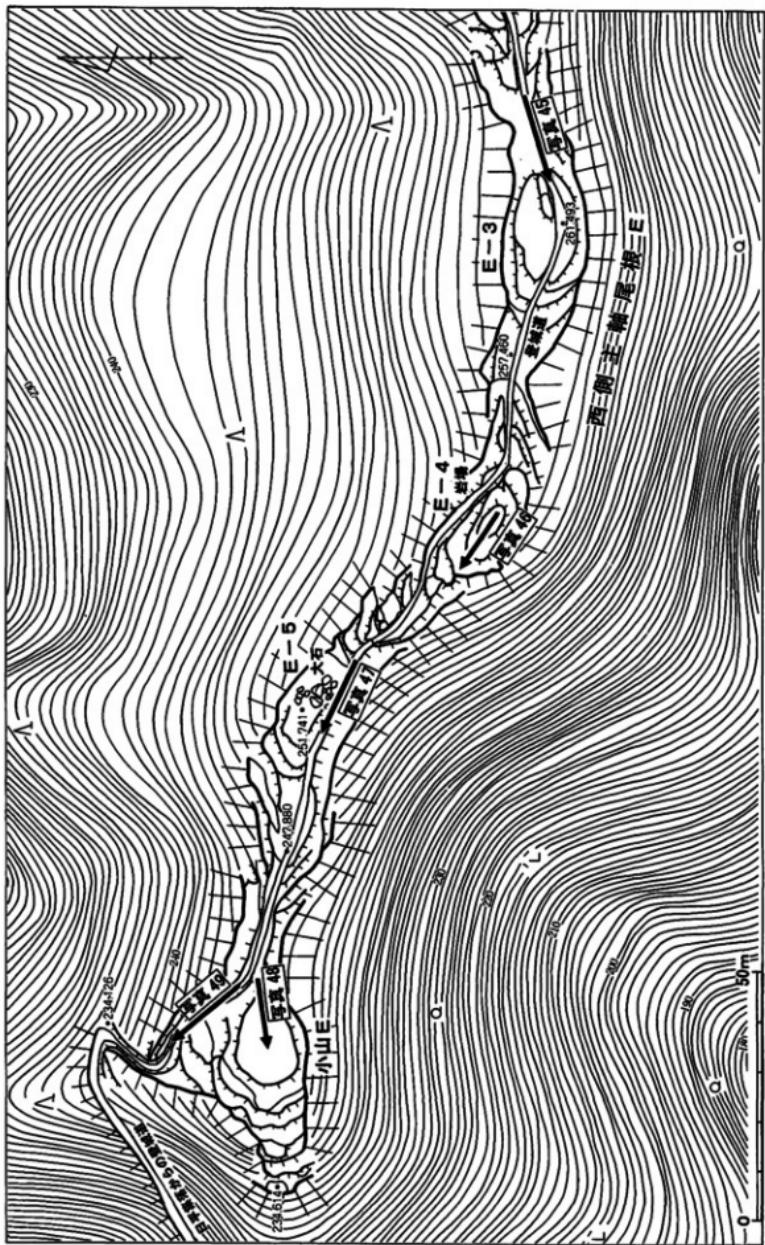


写真44 西側主軸尾根E-2（東→西）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真45 西側主軸尾根E-3（東→西）



第68圖 寫真攝影位置圖⑦（西側主軸尾根E）

〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕



写真46 西側主軸尾根E-4・岩場（東→西）

〔絞り5.6 シャッター速度1/30〕



写真47 西側主軸尾根E-5の南側を通る登城道

〔絞り3.5 シャッター速度1/15〕



写真48 小山Eの頂上（東→西）

〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕



写真49 日平集落からの登城道

〔絞り3.5 シャッター速度1/8〕

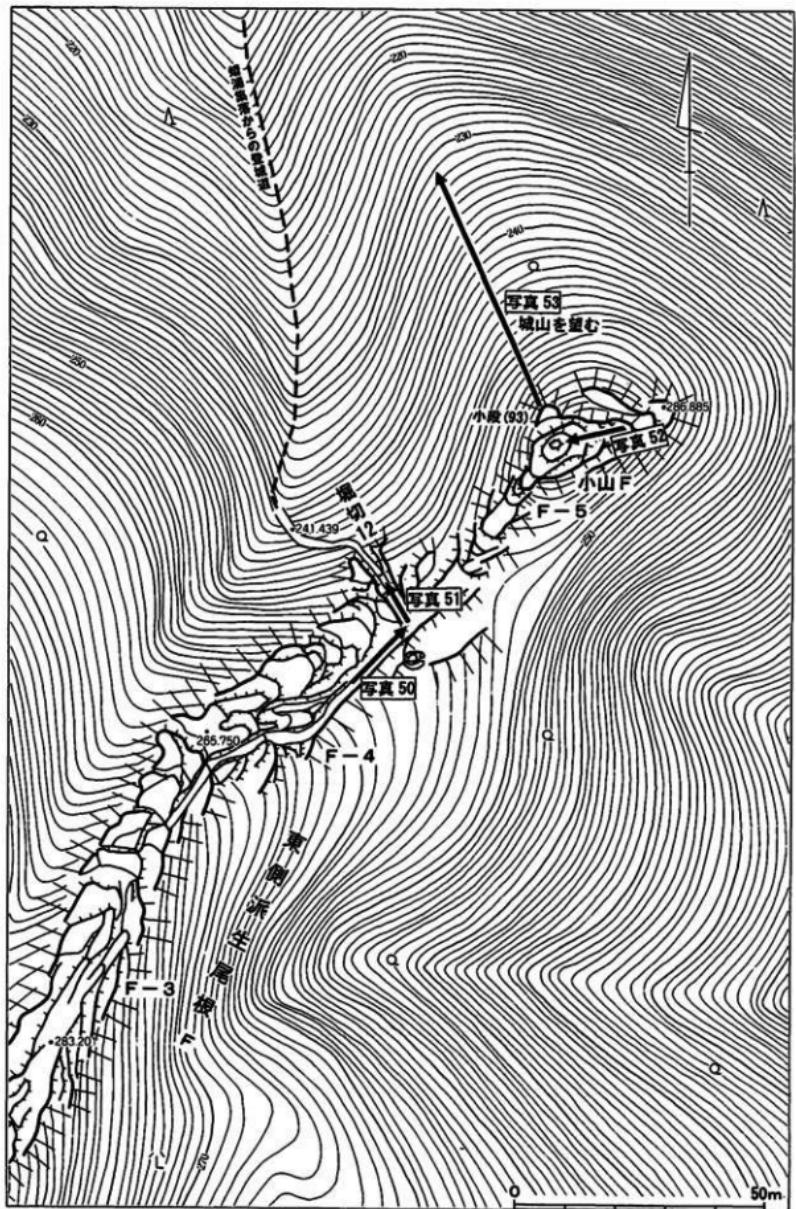


写真50 東側派生尾根F-3鞍部（南西→北東）

〔絞り3.5 シャッター速度1/8〕



写真51 東側派生尾根 堀切12（蜻浦集落からの登城道）



第69図 写真撮影位置図⑧ (東側派生尾根F)

〔絞り5.6 シャッター速度1/60〕



写真52 東側派生尾根 小山F（東→西）



写真53 小山Fの北側小段(93)から城山を望む

第70圖 写真撮影位置図⑨ (南側主輪尾根G・小山H・小山I)



〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕



写真54 V郭から南側の通路①（北→南）

〔絞り5.6 シャッター速度1/4〕



写真55 小山G-③「武者溜まり」

【絞り3.5 シャッター速度1/15】



写真56 小山H-①（頂上：東→西）

【絞り3.5 シャッター速度1/8】



写真57 小山Hの西斜面（頂上→西）

〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕

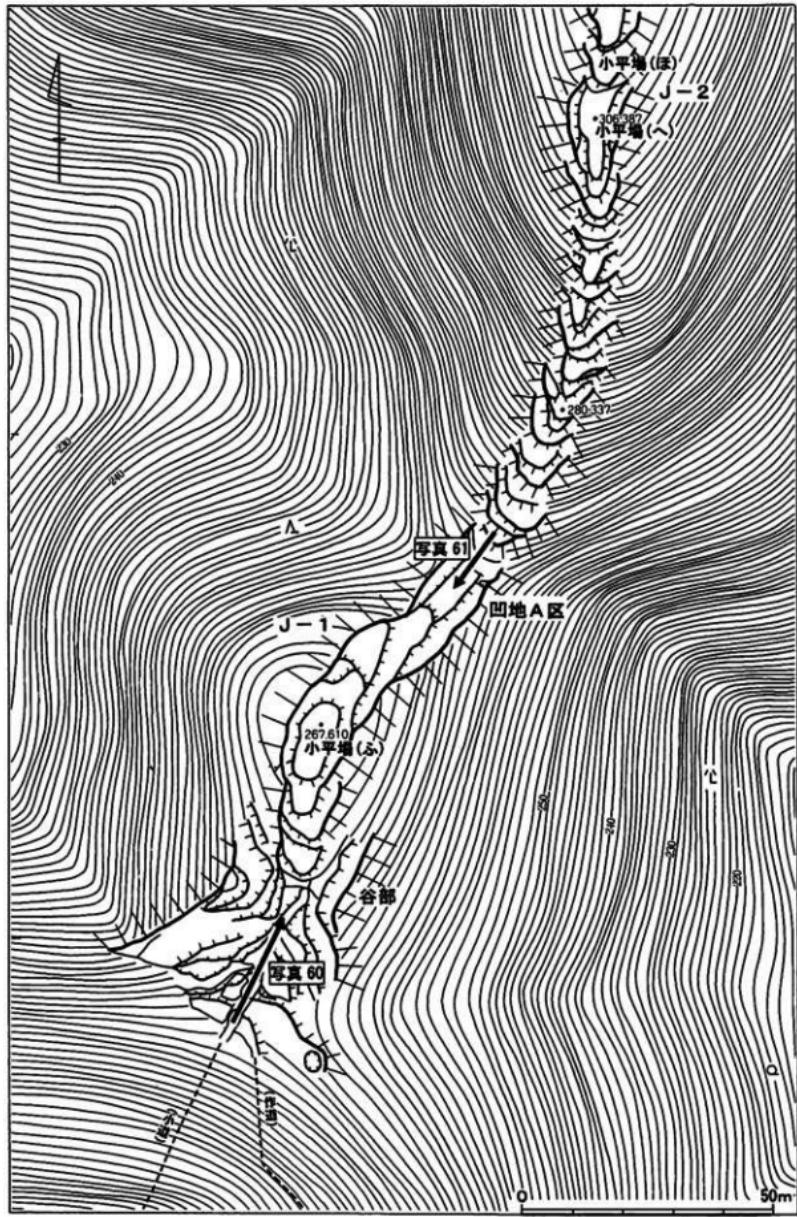


写真58 小山I -① (頂上: 東→西)

〔絞り3.5 シャッター速度1/2〕



写真59 小山I 北側谷部 (南西→北東)



第71図 写真撮影位置図⑩(城山谷部～J-1)

【絞り5.6 シャッター速度1/8】



写真60 城山 谷部（南→北）

【絞り8 シャッター速度1/2】



写真61 城山 J-1 凹地 A区（北→南）

【絞り3.5 シャッター速度1/8】



写真62 城山J-2・堀切14（北→南）

【絞り3.5 シャッター速度1/8】



写真63 堀切14（尾根筋より西側）

〔絞り5.6 シャッター速度1/8〕

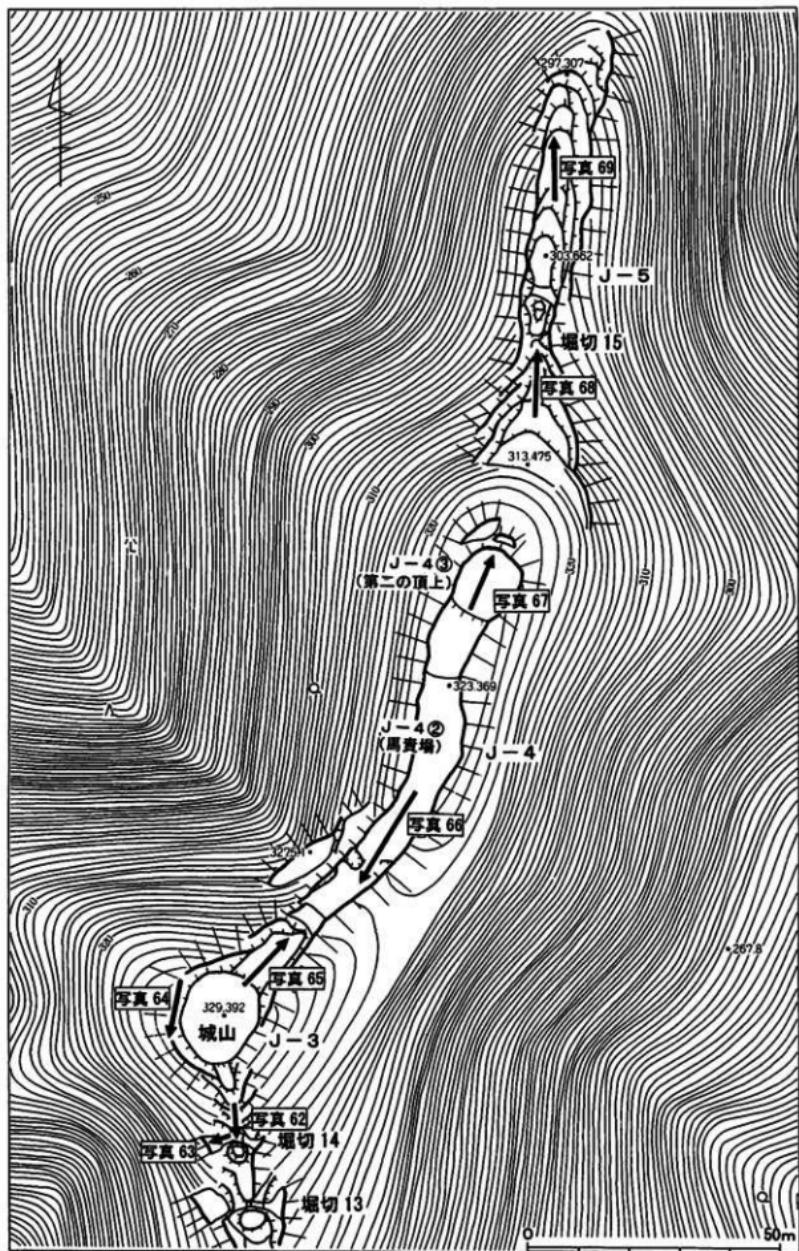


写真64 城山J-3（山頂）西側の削り落とし

〔絞り5.6 シャッター速度1/8〕



写真65 城山J-3から下る北東尾根



第72図 写真撮影位置図⑪ (城山J-2~5)

[絞り5.6 シャッター速度1/8]



写真66 城山 J - 4 ② (尾根線：北→南)

[絞り3.5 シャッター速度1/8]



写真67 城山 J - 4 ③ (第二の頂上：南西→北東)

〔絞り3.5 シャッター速度1/15〕



写真68 城山 J - 5・堀切15（南→北）

〔絞り5.6 シャッター速度1/15〕



写真69 城山 J - 5・北端部（南→北）

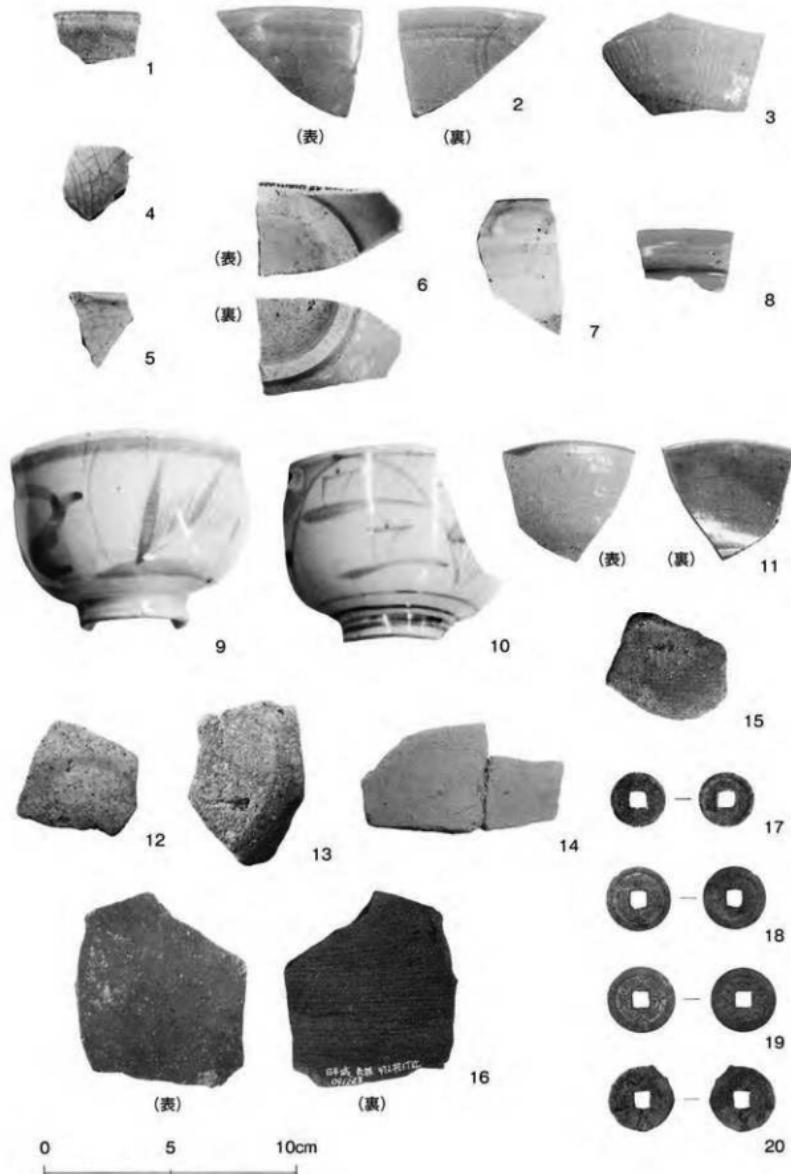


写真70 表探遺物① (城内全域)

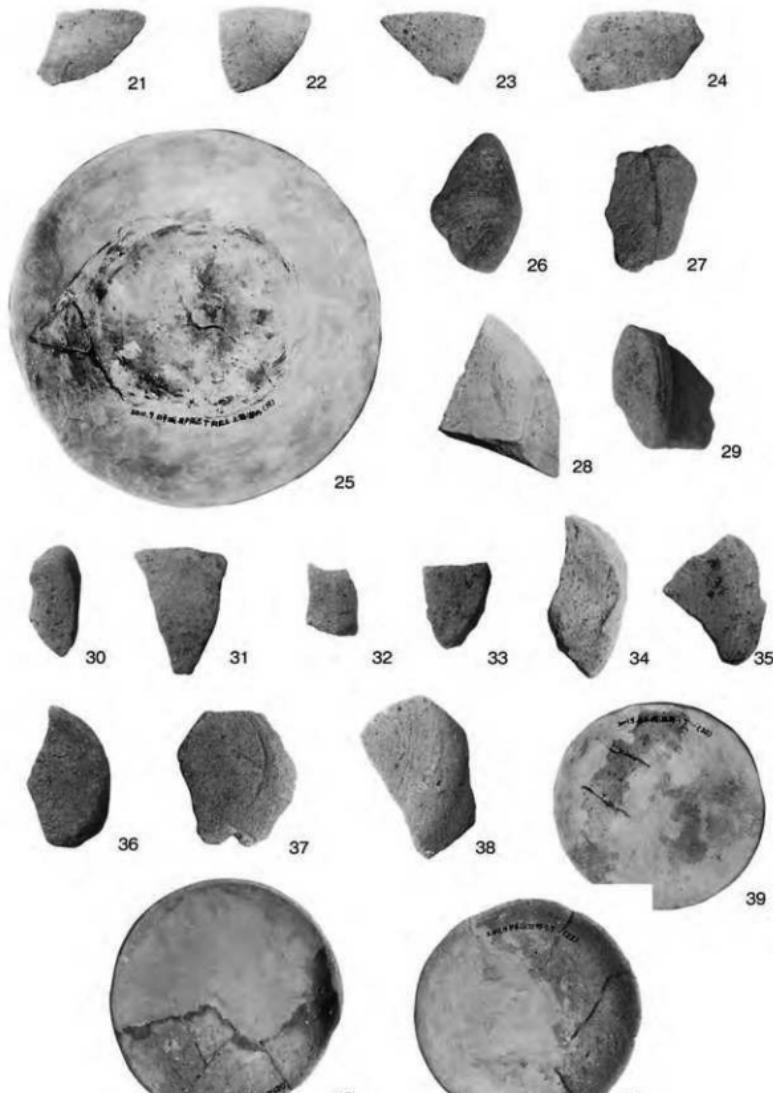


写真71 表探遺物② (Ⅲ郭-1)



写真72 表探遺物③ (Ⅲ郭-1)

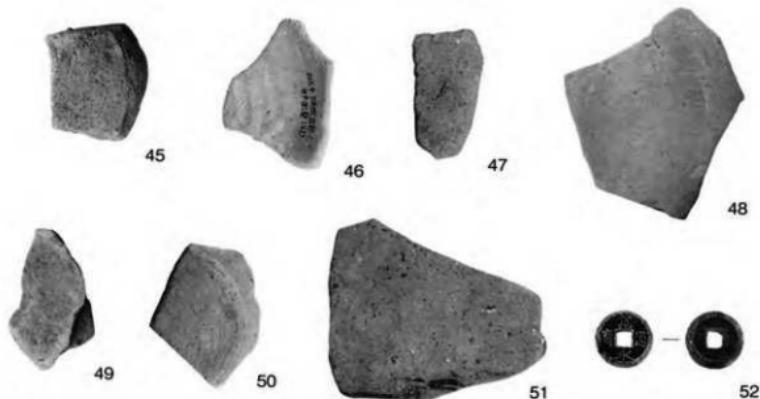


写真73 井戸からの遺物

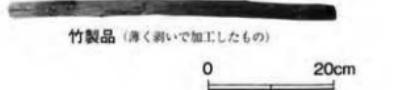
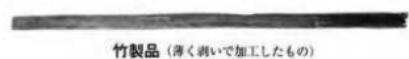


写真74 井戸からの木製品

十二月廿二日

「日平良在陣ハ不適ナ地ニツキ、諸将ニ山北移駐ヲ命ズ」

「忠棟等日比良攻略ノ模様ト肥後表ノ形勢トヲ鹿児島ニ報ズ」

伊野州・上長州日平より帰宅候間、於陣内意趣各被聞せ候、其衆、武庫様・中書公・圖書頭殿・忠棟・經平・鎌刑・比宮・本刑・拙者也、日平へ當番衆分別者、霜野へ御着陳可然之由也、伊野・上長被見候處者、霜野ニ着陳候ても、急度一途見得候する事ハ不知之由也、菟角日比良へ諸軍衆逗留者、一向土地無質所にて候衆、山北など申在處へ陳所をなをされ候て可然之備出合候衆、巣山寺・丹生民部少輔両使にて、日平へ被居候軍衆へ右之由被仰遣也、菟角日平談合衆被申候處も尤候、然者涯分御談合被成、追而一途之段、從爰元可被仰通之由也、彼意趣、忠棟宿にて拙者同前ニ被仰候、此晚、鹿児島寄合中へ日平落居之御懃之様子、又爰元諸方角之義、書状を以申渡候、忠棟、拙者判仕候也

〔解釈〕 日平城攻めの伊集院久宣と上原尚近が八代に帰宅したの

で、本陣では二人の意見を聽取した。二人の考えは「霜野城攻めは、すべきであるが、霜野を陥したからといつても、すぐ先が見える（次の方向が見える）という結果にはならぬのではないか」ということであった。とにかく、本陣での会議では、日比良は番衆を置くに好ましい土地には見えない。山北（現玉東町）に陣を構えた方が良いという意見がでたので、巣山寺と丹生民部少輔を使使者として、日平駐留の軍勢に山北に陣を移すことを指示した。とにかく日平については、本陣の会議での意見はもつともあり、大まかなことを決めておいて、後日、さらに具体的の方針を指示することになった。この晩、鹿児島に日平落城の働きの様子と、諸方の動きを連署の書状にして送った。

此日、新納武州・伊集院作州より、日比良之城輝被攻落、城主小森田討捕候、其外敵數多被打留候、各軍勞之鉢など、追而巨細可承由之書状也、忠棟連判ニ返書申候

える。上井覺兼（日記の著者）の寄合衆・長野淡路守、覺兼家臣の加治木治郎左衛門も分捕りの手柄。加治木は鍾統を貰う。

〔解釈〕日比良城攻めの二将からの書状は「日比良城を攻め陷し、

城主小森田を討ち取ったこと、その他、多くの敵を討

ち取ったこと、味方の軍功の次第は追つて詳しく述縦」

とあつた。伊集院忠棟と上井覺兼は連署で彼らに返書を送つた。

十二月十八日

〔日比良攻略軍、霜野ニ移ラントス〕

肥州日比良之當軍衆挙量にて、明日十九、到志毛野着陣之由候曉得候条、爰元へ被懸置候軍衆、少く可被差登之由觸候也、地下衆も少く被遣候て可然之由、武庫様へ、捺を以忠棟・拙者前

より申入候、御納得被成之御返書也

〔日比良攻で辛勞〕

此朝、肥後へ指遣候宇多能登守罷帰候、衆中各日比良格責、軍勞被申由也、拙者伴者共も別而辛勞申由也、衆中ニ長野淡路守分捕之由也、拙者伴加治木治部左衛門尉、軍ニ合候而鍾统候、分捕も申候由也

〔解釈〕今朝、宇多能登守が八代に帰り、日比良攻めの軍功を伝
あつた。八代駐在の一部の武士たちに出陣が命ぜられた。また、島津義弘支配下の地下衆（八代地元の武士）も少々出兵させたいと本陣は義弘に申し入れ、承諾の書状を受け取つた。

〔解釈〕今朝、宇多能登守が八代に帰り、日比良攻めの軍功を伝

本主税助は連絡係・見届役として隈本に残留)。八代本陣

陣から連署の書状で報告した。

では、その合戦の結果次第で、その後の方向は考えるこ
とにした(特に指示は出さない)。ただ、八代郡内の島津

勢(島津義弘家臣、郡内領主の薩摩武士、八代番衆)は参

戦しても良いことにしたので、伊集院忠棟や上井覺兼の
家臣たちは、思い思いに隈本に出向いた。

十二月十三日

「日比良安楽寺落居ス」

隈本當番吉利殿・新納武州・伊作州、彼三人へ使書にて申候、

一昨日、日比良之森各被相傷、落居之由巷説候、目出候、未各
より御左右不承候、如何之由也、聽而追々日平・安楽寺など落

居之由聞得候

此日、隈本ニ被相捕候諸所、日比良之森攻之由也、火色見得候、

〔解釈〕隈本に集つた島津勢が日比良城を攻めたとのことで、火
災が見えた。

十二月十一日

「忠澄等、日比良城ヲ攻ム」

昨日、日比良邊之火色見得候由(略)、三人連判申候

〔解釈〕日比良付近の火災が見えたとのことを、鹿児島へ八代本

「日比良城主小森田」

十二月十四日

のことが伝わってきた。

新納・伊集院)に送った。やがて、日比良・安楽寺落城

そこで、隈本の次の島津勢力の前進拠点入手に日比良(日平)城攻撃が行われたのである。小森田氏の本城日比良は、菊池川河畔の安樂寺城を出城とすることで、竜造寺氏の支配下にある港町高瀬の津に圧力をかけることのできる位置にあり、一方、南関に至る西海道の本道にもつながる地理的位置にあつた故とみられる。ただ、背後に山本郡の内古闇氏の本拠の一つである霜野城が控えているのが、問題であった。

十二月九日

「吉利忠盛等、日比良城ヲ攻メントス」

隈本へ被遣候本田治部少輔被罷帰候、其趣者、四本主税助ハ、吉利殿・新武・伊作州・到日比良、明後日十一、勧たるへき之間、其一左右可被仰越ため留也、然者本計帰也、様子ハ此一勧させられ候て、時宣法第、武庫御兄弟又ハ當庄へ被懸候歷この諸軍衆、國中へ可被指通之由也、此日、忠棟、拙者唆之衆など、少々隈本へ被遣候也、諸軍衆も思く其分也

(解釈)隈本(熊本)に派遣されていた目付の一人、本田治部少輔が八代に帰り、隈本当番の三人が、明後日(十一日)に日比良(日平)城攻めを行うと通知(もう一人の目付役・四

この間のことは「上井覚兼日記」に記録が残っている。

島津勢は、隈本から北上して日平城を攻め落としたが、番衆を

駐在させる要地ではないと、八代の島津本陣は談合で定め、山北に移駐させている。この記事から日平城の城主が小森田氏であつたことも分かる。天正十年十二月九日から二十二日までの動きは、次の通りである。

天正八年～十年の肥後情勢と島津氏

阿蘇品保夫

天正八年（1580）、島津勢は、城親賢の要請により隈本城宮

派遣した。

内に駐兵。肥後国衆工作をはじめ、大友勢を背景として敵対する合志勢と合戦し、勝利した。

これに対し、天正九年には、肥前の竜造寺氏が肥後に進出し、三月には城・名和・隈部・赤星・甲斐（宗運）・その他の国衆らを従えた。この時、城親賢は起請文で島津勢の隈本駐在の引き揚げを約束させられ、島津氏は肥後進出の足がかりを失った。

そこで島津氏は八月に水俣を攻め、相良氏は破れ、葦北郡を失うが、さらに十二月、相良義陽は島津氏との約束で阿蘇を攻め、響ヶ原合戦で甲斐宗運に破れ、討死した。同じ頃、隈本では城親

賢が病死し、支配下の地下衆の混乱が生じた。

天正十年（1582）、島津義久は、相良忠房に球磨郡を与え、八代郡も支配下に入れて弟の義弘に八代庄を与え、八代を肥後進出の本陣とし、番衆を派遣した。八代本陣では、さらに八代の出先として、城久基の後見者出田一要（親賢の弟）の協力を得て、再び隈本駐在を定め、当番衆に吉利忠澄・新納忠元・伊集院久宣を派遣した。

八代本陣の課題は、大友氏に代わって台頭してきた肥前の竜造寺氏対策が根本にあり、当面の具体的懸案は、①和戦両様を含んだ阿蘇勢力との対応、②筑後で竜造寺氏と抗戦中の田尻氏救援手段の模索、③竜造寺勢と対戦中の島原の有馬氏への救援、④肥後中央・北部国衆の竜造寺氏離反工作であつた。

隈本番衆には、肥後の国衆を支配下に入れることと、筑後のつなぎを作ることが期待され、同時に進行していた有馬氏救援の出兵による島原半島での竜造寺勢との対決を側面から援護する目的を持つものであつたといえよう。

報 告 書 抄 錄

書名	日平城跡
シリーズ名	和水町文化財調査報告 第8集
編著者名	大田幸博 益永浩仁 居石裕臣
編集機関	和水町教育委員会 社会教育課
所在地	熊本県玉名郡和水町大字靖浦・大字日平
発行年月日	2013年3月29日

所収遺跡名	所在地	調査期間	調査原因
日平城跡	熊本県玉名郡和水町 大字日平 字花群 城 中谷 大字靖浦 字中野開 井尻 籠目山	平成21年(2009)5月～ 平成24年(2012)1月	学術調査

遺跡名	主な遺構
日平城跡	堀切1～15・空堀1～4・豎堀1～4 小段(1)～小段(111)・土壘a～土壘s・小平場(あ)～(ま) 帯状削平地①～② 〔表採遺物〕 青磁・白磁・染付・陶器・土師器・須恵器・土師質土器 古錢

和水町文化財調査報告 第8集

日平城跡

平成25年3月29日

〔編集発行〕

和水町教育委員会

〒865-0192 熊本県玉名郡和水町江田3886

TEL 0968-86-3131

〔印刷〕

西本印刷

〒861-2241 熊本県上益城郡益城町宮園564-2

TEL 096-286-4151

この電子書籍は、『和水町文化財調査報告 第8集 日平城跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：和水町文化財調査報告 第8集 日平城跡

発行：和水町教育委員会

〒861-0913 熊本県玉名郡和水町板楠 76 番地

TEL : 0968-34-3047

電子書籍製作日：2024年2月28日